



The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

~ キャンパスマスタープラン (長期ビジョン) 2012 ~
改訂版 (2023)

国立大学法人九州工業大学
平成 23 年度 (2012 年 3 月末)
改訂 令和 4 年度 (2023 年 3 月末)

CHAPTER
00

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

学長からのメッセージ～キャンパスマスタープラン策定の趣旨～

はじめに、学長より、九州工業大学における本プラン策定の趣旨について説明します。

未来の技術に堪能なる士君子を輩出するキャンパスをめざして

九州工業大学は、筑豊地域での炭鉱ビジネスを基点として官営八幡製鉄に関わる多数の関連企業を設立した安川敬一郎氏が、技術人材の育成を目的に私財を投じて1909年に開校した明治専門学校を起源としています。開学以来 110 年余にわたって、先端的教育と研究を展開し、その成果を社会との連携により社会実装すると共に、それらを大学の教育研究に対して好循環をもたらせることにより、信頼を築いてきました。時代の要請を迅速に反映する本学の教育方針は、開学式において初代総裁山川健次郎先生が発信された理念を継承しています。士君子すなわち、学問、人格ともにすぐれた立派な技術者の輩出を目指し、時代に相応しい品格と創造性を有するグローバル・エンジニアを社会と共に育成し、卒業生・修了生は産業界から高い評価を受けています。また、環境、宇宙、ロボティクス、人工知能、IoT、次世代通信、パワーデバイス等の各分野において世界最先端の研究成果を多く創出するとともに、地域社会や国際的な産学官連携の“つなげる力”による社会的責任を果たし、高い評価を得ています。さらに、半導体関連産業の基盤技術を支える人材の養成や、次世代を支える青少年への科学技術教育を推進し、社会との連携と調和にも努めています。

現在、本学は、戸畑（北九州市戸畑区）、飯塚（飯塚市）、若松（北九州市若松区、北九州学術研究都市内）の3キャンパスで活動しています。安川敬一郎氏のビジネス展開とも関連が大きく、歴史の因縁を感じます。戸畑キャンパスは、文京地区の戸畑区にあり住宅地に囲まれた都市型キャンパスで、産業近代遺産などの歴史の風格と豊かな緑が特徴的で、旧安川邸や旧松本邸とも繋がっています。飯塚キャンパスは、旧産炭地の緩やかな丘陵地に築かれ、筑豊の盆地と山々を眺望できる近代的キャンパスです。若松キャンパスは、国公私立大学と企業・研究機関が集う北九州学術研究都市の中核であると共に人口増による新小学校の設置がなされるなど、住宅地としても発展を見せており、図書館・情報処理機能・厚生施設等の共同利用に見られるように、特色あるキャンパス環境にあります。

30年先のキャンパスの姿を見通したマスタープランを策定してから10年が経過しました。その間社会情勢も大きく変化したものの、大学キャンパスは学生の学びの場であり、次世代社会を開拓する教育研究の拠点としての重要性は変わりません。変貌する社会に回答するため、地域づくりの拠点としての役割も重要度を増しつつあります。本学が位置する福岡県は2つの政令都市とともにグリーンアジア国際戦略総合特区に指定され、北九州市は環境未来都市並びにSDG's未来都市に選定されました。またスタートアップ創出にも力を入れ、福岡市と北九州市がスタートアップ拠点都市に選定されています。イノベーションの創出と文化の拠点としてのリージョナルセンターの機能を、地域の中核機関として本学が発揮することが求められています。また、多様性のキーワードが益々重要になってきており、多くのステークホルダーが交流する共創空間が建設され、学内のイノベーションハブとして重要な位置付けとなっています。さらには、リカレント・リスキングに対する大学の役割が重要になってきており、そのための環境づくりも重要です。

本学は、今回改訂しましたキャンパスマスタープランを、今後も点検・評価・改善プロセスを通して磨き、ステークホルダーにとって快適なキャンパスの構築を通して、大学の機能の強化を実現していきます。皆様方のご協力、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

国立大学法人九州工業大学
学長 三谷康範

INDEX

CHAPTER 学長からのメッセージ～キャンバスマスタープラン策定の趣旨～

00

CHAPTER キャンバスマスタープランの目的・策定の進め方

01

- 1-1. キャンバスマスタープランの目的 01
- 1-2. キャンバスマスタープラン策定にあたって 03
- 1-3. キャンバスマスタープランの構成 07

CHAPTER 九州工業大学の現状の把握と課題整理

02

- 2-1. 九州工業大学の基礎情報……歴史、理念・方針、取組 08
- 2-2. 九州工業大学と社会動向……アジア、日本、地域社会 18
- 2-3. 九州工業大学の空間……空間の履歴、現状 29
- 2-4. 九州工業大学の価値観、想いとニーズ 57
- 2-5. 現状の課題整理とキャンバスマスタープランの方向性 80

CHAPTER キャンバスマスタープランの基本方針

03

- 3-1. 九州工業大学 キャンバスマスタープランの目標 81
- 3-2. キャンバスマスタープランの基本方針 82

CHAPTER キャンバスマスタープランの基本方針実現に向けたアクティビティ

04

- 4-1. 基本方針「人づくり」の実現に向けたアクティビティ 86
- 4-2. 基本方針「実学主義」の実現に向けたアクティビティ 89
- 4-3. 基本方針「相互成長」の実現に向けたアクティビティ 92
- 4-4. 基本方針「自己表出」の実現に向けたアクティビティ 95
- 4-5. 基本方針「多種共生」の実現に向けたアクティビティ 98

CHAPTER フレームワークプラン

05

～30年後のキャンパスをみつめて～

- 5-1. 戸畑キャンパス 102
- 5-1-1. キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略 102
- 5-1-2. フレームワークプランにおける重視すべき項目 103
- 5-1-3. 動線・ゾーニング計画 105
- 5-1-4. パブリックスペース計画 108
- 5-1-5. サステイナブルな環境・建築計画 111
- 5-1-6. インフラストラクチャー計画 113
- 5-1-7. 学外活動計画 114
- 5-2. 飯塚キャンパス 115
- 5-2-1. キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略 115
- 5-2-2. フレームワークプランにおける重視すべき項目 116
- 5-2-3. 動線・ゾーニング計画 118
- 5-2-4. パブリックスペース計画 120
- 5-2-5. サステイナブルな環境・建築計画 123
- 5-2-6. インフラストラクチャー計画 125
- 5-2-7. 学外活動計画 126
- 5-3. 若松キャンパス 127
- 5-3-1. キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略 127
- 5-3-2. フレームワークプランにおける重視すべき項目 128
- 5-3-3. 動線・ゾーニング計画 130
- 5-3-4. パブリックスペース計画 132
- 5-3-5. サステイナブルな環境・建築計画 135
- 5-3-6. インフラストラクチャー計画 137
- 5-3-7. 学外活動計画 138

CHAPTER キャンバスマスタープランの運用

06

資料（別冊） キャンバスマスタープラン策定プロセスと調査結果の詳細

CHAPTER

01

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

キャンパスマスタープランの目的・策定の進め方

本プラン策定の目的と、「人間中心」の新たなアプローチを採用した、本プラン策定の進め方を示します。

1-1. キャンパスマスタープランの目的

キャンパスマスタープランとは、大学の教育・研究・社会貢献活動の方針や、経営戦略の実現に向けて、キャンパスの目指すべき将来像・キャンパスづくりの指針を示す長期計画です。九州工業大学では、次のような目的でキャンパスマスターを策定します。

大学の基本理念・基本方針の実現を支えるために

九州工業大学では、「技術に堪能なる士君子の養成」という建学の理念の下、100年以上にわたり教育・研究・社会への価値還元を行ってきました。現在も、基本理念である「九州工業大学は、わが国の産業発展のために、品格と創造性を有する人材を育成します」と、それにもとづく教育・研究・社会との連携・運営の基本方針を掲げ、戸畑・飯塚・若松の3キャンパスで活発に活動しています。

今回、九州工業大学では、こうした活動を継続し、更に発展させ、基本理念・基本方針の実現を支えていくために、30年後の将来を見据えたキャンパスマスタープランを策定します。

社会環境のシビアな変化に対応していくために

今後30年間には、人口減少・高齢化・グローバル化といった社会変動の更なる発展が予想されます。さらに、国の厳しい財政状況を鑑みると、国立大学法人への施設整備費補助金はさらに減少していくと考えられます。

激しい社会の変化に対応し、限られた施設整備費を効果的に配分していくためにも、キャンパスマスタープランで目指すべき将来像と、長期的なキャンパスづくりの指針を示すことが極めて重要です。

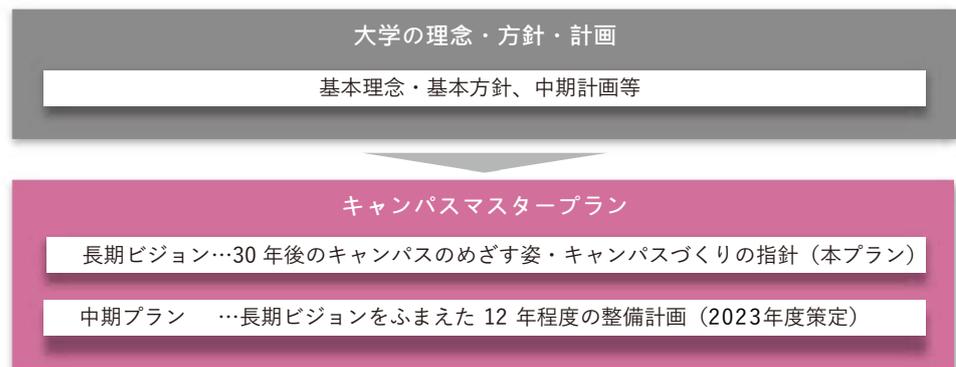
めざす将来像を描き、段階的に実行していくために

本プランでは、30年後のキャンパスの目指す姿とキャンパスづくりの指針を描く長期ビジョンを策定し、学内で共有します。また、長期ビジョンは、全学の教育研究・社会貢献活動とかかわるものであるため、施設担当部局だけでなく、全学の協力のもとで実行に移します。

ただし、長期ビジョンの実現に向けては、より具体的な施設・環境の整備計画を段階的に策定・実行していく必要があります。

そこで今後は、2022年度に改訂した、本プランの示す長期ビジョンをふまえた、12年程度（中期計画2期間分）の施設・環境の整備計画（中期プラン）を策定し、長期ビジョンの実現に向けた計画の具体化に取り組みます。

キャンパスマスタープランの位置づけ



1-2. キャンパスマスタープラン策定にあたって

「施設起点」に加えて「人間中心」のアプローチを用いた キャンパスマスタープランをめざして

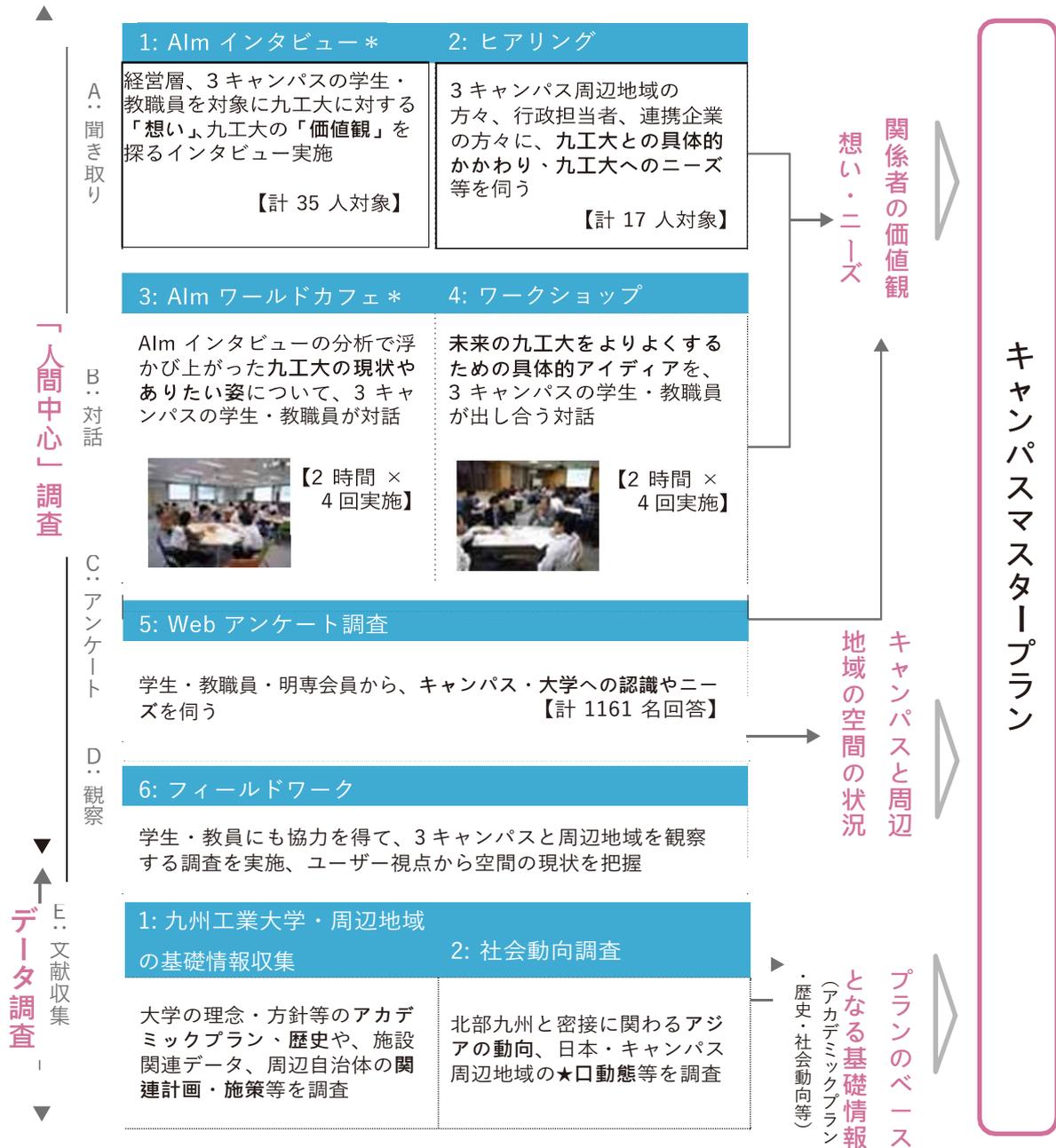
キャンパスマスタープランの策定においては、30年後の大学の理想像を描き、学内外の関係者で合意することが必要となります。そのためには、人々の価値観、九州工業大学に対する想いやニーズを共有し、あるべき姿を見出していくことが重要です。

そこで、今回のキャンパスマスタープラン策定では、学生・教職員や卒業生・地域住民といった学内外の関係者の視点や、価値観・想い・ニーズを重視する、「人間中心のアプローチ」を採用しています。具体的には、次項に示すように、聞き取りや、誰でも参加できるオープンな対話、アンケートを通じて、関係者の価値観・想い・ニーズを把握し、大学の理想像を議論・共有していきました。また、関係者の視点からキャンパス・周辺地域の空間を把握する観察調査も行っています。加えて、文献調査を通じてプランのベースとなる基礎情報も収集しました。

従来の施設整備では、施設やインフラの配置・老朽化状況やスペースの過不足といった情報を起点に改修・新築計画を立てる、いわば「施設起点」のアプローチをとることが多くありました。しかし、そうしたアプローチでは、関係者の声を反映した、全学で共有できるキャンパスの理想像を描くことには限界があります。

本学では、従来の「施設起点」のアプローチに加え、さらに「人間中心」のアプローチで見出した大学のあるべき姿を反映していくことで、関係者にとって納得性の高いキャンパスマスタープランの策定を図っています。





* Alm (エイム、Appreciative & Imaginative の略) とは、対象となる個人や組織・集団の、ものの考え方や感じ方、価値判断基準、行動の仕方のパターンを捉えて表現することを目的に開発された、定性調査の方法論 (富士通株式会社開発)。より詳しくは、資料 (10 ページ) を参照

全学の学生・教職員に対する プラン制定の活動の周知と理解、協力の促進

キャンパスマスタープランを学生・教職員の声を反映したものとし、実行段階でも学内の協力を得ていくためには、プラン策定の活動について全学に周知し、理解を得ることが重要です。

今回のプラン策定では、次のような方法により、全学への活動の周知、学生・教職員の理解・協力の促進を図りました。

プロジェクトネーム・ロゴの作成

未来のキャンパス像を学内外の関係者を巻き込んで検討していくためには、検討活動自体の広報戦略が必要です。プロジェクトネーム・ロゴの作成と発信はその第一歩となります。今回は、下記のようにプロジェクトネーム「未来の九工大」とロゴを作成し、活動の周知・浸透を図りました。

次に示すページの活動報告誌・学園祭での広報や、対話イベントの際に繰り返しロゴを使用して、視覚を通してわかりやすく活動の存在を訴え、関係者に参加・協力を呼びかけました。



活動報告誌の発行

プラン検討の過程をまとめた、キャンパスマスタープラン策定活動の報告紙を3回にわたり発行しました（詳細は資料編 4-5 ページを参照）。報告誌は、電子媒体で全学に配布するとともに、キャンパス内の各所に掲示しました。

学内外の関係者には、聞き取り・ヒアリング・アンケート等の調査で協力を得ており、そうした調査結果をどのようにまとめ、プランの検討に活かしているか、報告誌を通じて共有を図りました。

学園祭での広報

学生や地域の方々の多く集まる学園祭は、プラン策定の活動を周知する重要な機会です。戸畑キャンパス・飯塚キャンパスで2011年11月18日・19日に行われた第51回工大祭では、プラン策定活動の様子を伝えるポスター（詳細は資料編6ページを参照）の掲示や、ステージ上での告知を行い、学生・地域住民への幅広い周知を図りました。

中間報告会の開催

策定中のプランの内容をより詳しく説明する機会として、2012年1月18日（戸畑）・25日（飯塚）・26日（若松）に教職員・学生を対象としたキャンパスマスタープラン策定状況中間報告会を実施しました。

あわせて、プランの内容に対する意見を募り、その後の検討に活用しました。

1-3. キャンパスマスタープランの構成

キャンパスマスタープランの構成を次ページに示します。

ここまでの0章・1章では、キャンパスマスタープラン策定の考え方を論じてきました。

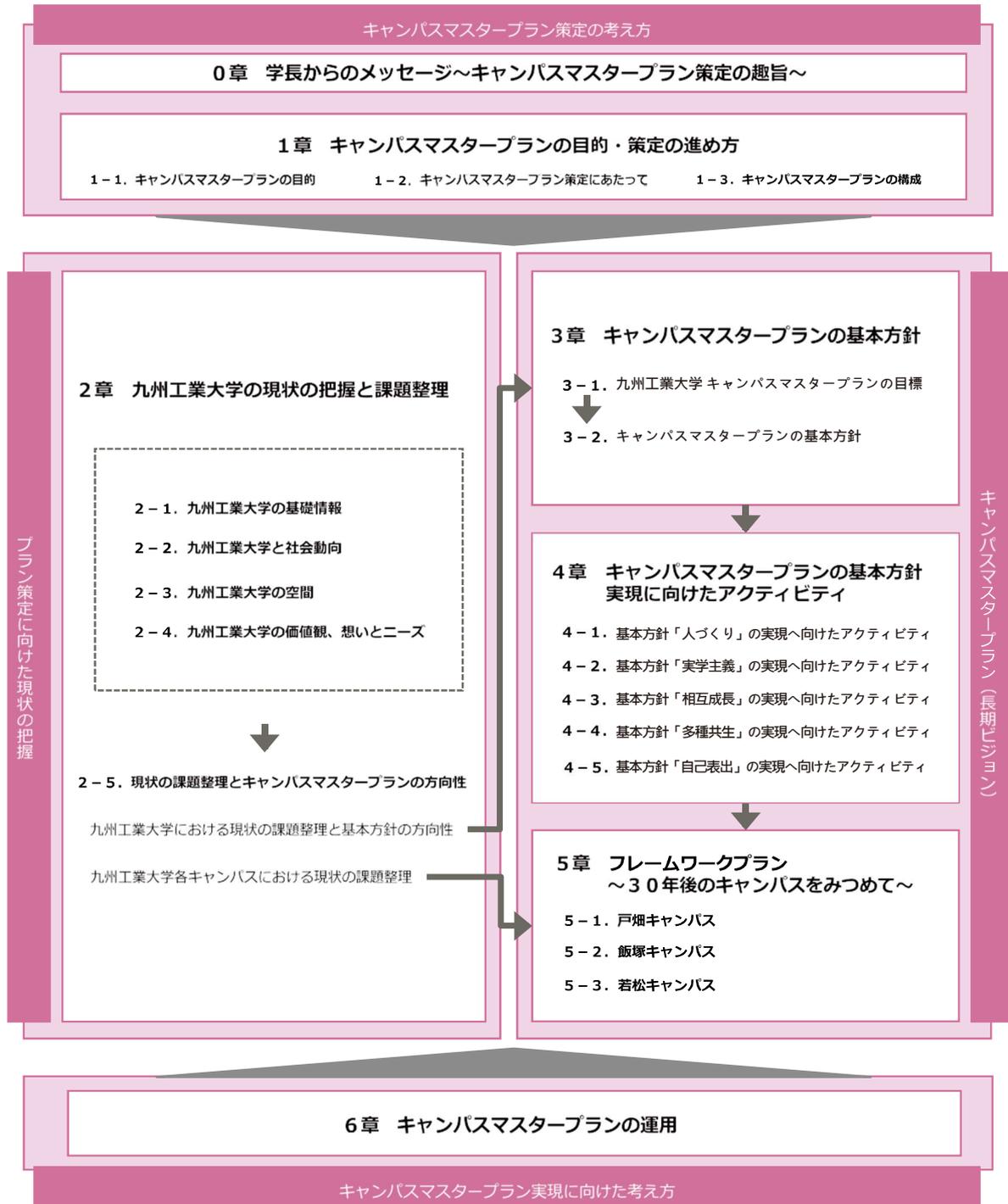
続く2章では、各種調査結果をもとに、九州工業大学の現状を把握し、課題を整理します。九州工業大学の基礎情報、大学を取り巻く社会動向、キャンパスと周辺地域の空間、関係者の価値観・想い・ニーズを整理したのち、それらをもとに、現状の課題整理とキャンパスマスタープランの方向性の検討を行います。

3章では、現状把握・課題整理の結果から導かれた、今後のキャンパスづくりの目標と、基本方針（キャンパスづくりの柱となる考え方）を提示します。なおここでは、戸畑・飯塚・若松の3キャンパス共通の目標とキャンパスマスタープランの基本方針を示します。

4章では、基本方針の実現へ向けて、キャンパスでどのようなアクティビティを行っていくかを検討します。

5章では、基本方針およびその実現に向けたアクティビティをふまえて、それらを支えるキャンパスづくりの指針（フレームワークプラン）について検討します。ここでは、2章で整理する各キャンパスの課題をふまえ、各キャンパスでの指針を示します。

6章では、キャンパスマスタープランの運用についてまとめます。具体的には、プランを実現していくためのPDCAサイクル(計画、実行、点検、評価、改善)、組織体制、実践手法や、資金・コスト管理、施設・スペース管理、品質管理、安全管理の考え方を整理します。



CHAPTER

02

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

九州工業大学の現状の把握と課題整理

聞き取り・対話・アンケート・観察や、文献調査といった各種の調査結果をもとに、九州工業大学の現状を把握し、今後に向けた課題を整理します。また、課題をふまえて、キャンパスマスタープランの方向性を検討します。

2-1. 九州工業大学の基礎情報…歴史、理念・方針、取組

本節では、九州工業大学の歴史、理念・方針、取組という、キャンパスの将来像を描くにあたっておさえるべき、大学の基礎情報を整理します。

2-1-1. 歴史

沿革

九州工業大学は、安川電機の創設者である、安川敬一郎と松本健次郎の親子によって明治40(1907)年に設立、明治42(1909)年に戸畑町（現在の北九州市戸畑区）に開校した、私立明治専門学校を起源とします。大正10(1921)年に官立移管し、昭和24(1949)年には新制大学となりました。北九州市戸畑区の工学部に加えて、昭和61(1986)年には飯塚市に情報工学部、平成12(2000)年には北九州市若松区に大学院生命体工学研究科が設置されました。平成21(2009)年に創立100周年を迎えた、地域の工学教育・研究の中核を担う伝統校です。

明治40年(1907)	私立明治専門学校(4年制)設立
明治42年(1909)	開校
大正10年(1921)	官立明治専門学校(4年制)移管
昭和19年(1944)	明治工業専門学校(3年制)改称
昭和24年(1949)	九州工業大学(新制大学)設置
昭和61年(1986)	情報工学部設置
平成12年(2000)	大学院生命体工学研究科設置
平成21年(2009)	創立100周年
平成26年(2014)	大学院改組
平成28年(2016)	教養教育院設置

■ 建学の経緯・理念 ■

安川敬一郎と松本健次郎の親子は、石炭業をはじめとして、鉄道業、紡績業など様々な事業で成功を収め、特に日露戦争前後の好景気で、巨大な財産を得ました。しかし、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである」という信念から、本業以外の全ての資産を投じて、戸畑の地に、明治専門学校を設立しました。九州工業大学を生んだのは、こうした社会への価値の還元の想いでした。

明治42（1909）年4月1日の開校式で、創立経営を託された山川健次郎は、私立明治専門学校の教育目的は「技術に通じて居るところの士君子を育める、即ち技術に通じて居る『ジェントルマン』を養成する学校である」としました。私立明治専門学校を、技術を教えるだけでなく、人間形成の道場としようとしたのです。今日の九州工業大学も、こうした教育精神を、建学の理念「技術に堪能なる士君子の養成」として受け継いでいます。

私立明治専門学校は全寮制で、構内には教員の住む役宅や、医局・日用品供出所・娯楽施設、さらにはガス工場都発電所までつくられました。自給自足の「教育ユートピア」の中で、学生と教員は家族的教育を実践していました。

■ 各キャンパスの設立経緯 ■

戸畑キャンパス

戸畑キャンパスは、前述の通り、明治40（1907）年に設立、明治42（1909）年に開校した、私立明治専門学校の敷地・校舎を引き継いでいます。

北九州市において戸畑区は「文教のまち」とされていますが、私立明治専門学校は、その礎を築きました。今日においても戸畑キャンパスが、「文教のまち」の中核をなしています。

飯塚キャンパス

かつて石炭産業で栄えた飯塚市は、石油へのエネルギーシフト以降、経済の深刻な停滞に見舞われました。そこで飯塚市は、学園都市づくりによる地域振興を目指して、大学の誘致に乗り出しました。九州工業大学にも飯塚市での新学部設置が打診され、これを受けて、昭和61（1986）年に飯塚キャンパスに情報工学部を設置することとなりました。設立以来、飯塚キャンパスは、飯塚市の掲げる学園都市・情報産業都市づくりの核として、飯塚のまちづくりに貢献を続けています。

若松キャンパス

昭和 63（1988）年、円高による基幹産業の重工業の停滞などに見舞われていた北九州市は、新たな都市再生計画（北九州市ルネッサンス計画）を公表しました。その中で示された、「未来をひらくアジアの学術・研究都市」という都市像の実現に向けて、平成 13（2001）年、先端科学技術の教育研究を行う大学や研究機関を集積する、北九州市学術研究都市が開設されました。

九州工業大学も、学術研究都市に生命体工学研究科を設置し、同じく学術研究都市にキャンパスを構える北九州市立大学・早稲田大学などとともに、未来をひらく産業の創出に向けて教育研究を行っています。

こうした背景で設立された 3 キャンパスの位置関係は下の通りです。

それぞれ、20 ～ 40Km 程度離れています。

キャンパス計画においては、各キャンパスの持つ社会的背景の違いや、地理的な距離を考慮する必要があります。



2-1-2. 理念・方針

九州工業大学は、次のような基本理念・基本方針のもとで、教育・研究・社会との連携・大学運営に取り組んでいます。

■ 基本理念 ■

九州工業大学は、わが国の産業発展のため、品格と創造性を有する人材を育成します。

■ 基本方針 ■

教育	開学以来の教育理念を基本とし、志（こころざし）と情熱を持ち産業を切り拓く技術者・知的創造者を養成するため、質の高い教育を行います。
研究	研究活動を常に活性化し、科学に裏付けられた融合技術や境界領域の創成を行うなどにより多くの優れた研究成果を創出します。
社会との連携	教育・研究で培った知の公開と価値創造型もの創りを推進し、技術革新と社会を支えるイノベーションにつなげ、地域社会との連携と調和に務めます。
運営	社会に対する大学の責任 (University Social Responsibility) を重視し、大学に係るステークホルダーに対する説明責任を果たせる経営を行います。

これらの理念・方針は、本学が長期的に追求していくべき姿を示しています。キャンパスマスタープランは、理念・方針の実現を支えるものであり、キャンパスの将来像も、理念・方針をふまえて描く必要があります。

2-1-3. 取組

■ 教育・研究 ■

九州工業大学は、さまざまな特色ある教育・研究に取り組んでいます。

教育においては、学生が自ら学ぶ意欲と姿勢を身につける教育、グローバル社会で活躍する力を身につける教育や、PBL（Project-Based Learning）のように社会と接しながら課題解決能力を育む実践型教育などにおいて、先進的な取組を進めており、国の教育支援プログラムにも数多く採択されています。こうした教育を通じて輩出した卒業生は、産業界から高い評価を受けています。

さらに、世界で活躍できる技術者として身につけるべき能力（Global Competency for Engineer）の獲得を目指すGCE教育を推進してきました。

研究においては、技術開発の拠点となる先端基幹研究センター等を設置し、衛星開発プロジェクトが開発したウイスカ検証衛星『FUTABA（ふたば）』にも活用された宇宙技術をはじめ、環境エネルギー、ICT、バイオ、ロボティクス等の分野で、世界最先端の技術開発と社会をリードするものづくりを行っています。また、九州歯科大学との歯工学連携、飯塚市・飯塚病院との医工学連携等において、異分野との連携による新たな領域の創造にも努めています。

■ 学生活動・学生支援 ■

課外活動は、学生が広い視野を持って成長していく上で重要なものです。九州工業大学では、ものづくりや地域貢献活動などで学生による特色ある活動が行われています。

例えば、次のような活動があります。

戸畑

- 100周年記念人工衛星「鳳龍」の学生プロジェクトによる打ち上げ
- 全日本学生フォーミュラ大会にチーム「KIT-Formula」が自作マシンで参加
- 九州ロードレース選手権で「GP-MONO」プロジェクトチームが年間優勝
- 「鳥人間コンテスト」への出場

飯塚

- 創作炭坑節チーム「CDR21」を立上げ、年間約30回程度の地域公演
- ジャグリングクラブ「ピルエット」が地域のイベント・福祉施設・小学校等で多数公演

若松

- ロボットのサッカーワールドカップ「RoboCup」で世界大会優勝
- 国際水中ロボット競技会 AUVIC に出場、技術賞受賞

大学では、創造的人材の育成を目的としたプロジェクトなどの取り組みに上限200万円を拠出して支援しています。これに加えて、戸畑キャンパスでの「ものづくり工房」の設置など、学生が夢に向かってのびのびと活動できる環境の整備も進められています。

■ 社会貢献 ■

産学連携

わが国の工業教育と北九州工業地帯の発展のために創立された大学として、九州工業大学は、産業界との連携を通じた技術開発・ものづくり、研究成果の社会への還元に積極的に取り組んできました。平成18(2006)年に設立された産学連携推進センター（現産学イノベーションセンター）では、研究プロジェクトの企画・運営、産学連携のコーディネートや、知財管理、ベンチャー設立支援、出前講座などを行っています。平成19(2007)年には企業、関係機関、市民を会員とする九州工業大学技術交流会「キューテックコラボ」を設立して、最新技術や事業の講演会を定期的に行っています。今後も未来思考キャンパス構想に基づいた社会実装を橋渡しするキャンパスを目指し、イノベーション創出の場として、キャンパス全体が多様なステークホルダーと連携したイノベーション・コモンズ（共創拠点）の整備、充実、また、共同研究講座や社会連携講座の設置を通じてキャンパス内に企業オフィスを設置し、組織対組織の産官学連携を推進していきます。

地域連携

大学と地域がともに学びあう、地域教育への貢献の取り組みも積極的に進められています。出前講座・公開講座のほか、高大接続センターでは、学生や教員が地域の小中学校で理数教育プログラムを実施する「ジュニア・サイエンススクール」、学校教員向けの先端技術講義「スーパー・ティーチャーズ・カレッジ」などを実施しています。また、研究者と一般の方々が科学について語り合うサイエンスカフェや、学生による地域の小学校でのボランティア活動などの取り組みも行われています。

2-1-4. 環境・施設マネジメント

■ 環境マネジメント ■

環境マネジメントの取組

地球環境と共生する大学づくりに向けて、平成 19(2007) 年に環境マネジメントセンターを設置してさまざまな取組を行っています。

電力・ガス・水道・紙の使用量削減を目標に、使用状況を見える化し、電力については戸畑・飯塚・若松キャンパスで「デマンドオーバー警報メール」を送信してピークカットする取組や、太陽光発電の導入、水道については節水ゴムの導入などを行っています。さらに、学内外への環境教育・啓発活動や、キャンパス内での環境技術の実証実験の取組（グリーンキューブ・プロジェクト、電気自動車試験走行など）も実施しています。ただし、猛暑などの地球環境の変動や、研究活動の活発化の影響もあり、電力・ガス・水道・紙の使用量は継続的削減を実現できておらず、継続的な教育・啓発活動や、削減施策の追加検討を行う必要があります。また、学内の環境技術を積極的にキャンパスの環境マネジメントに取り入れ、先端的キャンパスづくりに活かすことも重要です。

学生主体の環境活動

このほか、学生主体で、自治会による清掃・美化活動、生協でのリサイクル活動も行われています。学生・教職員の自主的な環境活動に対する支援も、今後の環境マネジメントにおいて重要と考えられます。

■ 施設マネジメント ■

九州工業大学では、キャンパスの有効活用・効率的運用に向けた取組として、平成17(2005)年度から、施設のレンタル制とスペースチャージを他大学に先駆け、全学で導入しています。これにより、従来ばらつきのあった占有スペースを活動に見合う形で適正に配分するとともに、余剰スペースを生み出してプロジェクト研究スペースを確保しています。また、チャージ料は維持管理費にあて、安定的な維持管理の確保に役立っています。

このほか、施設ごとに長期修繕計画を策定して修繕・維持管理を計画的に進める取組などを行っています。

今後に向けては、施設マネジメントの高度化に向けては、近隣大学や工科系大学と連携し、施設マネジメント実施状況の大学間ベンチマーキングが重要と考えられます。また、利用者から寄せられているニーズに対応できていない部分もあることから、利用者のニーズを随時共有し、施設整備に活かす仕組み作りも必要と考えられます。

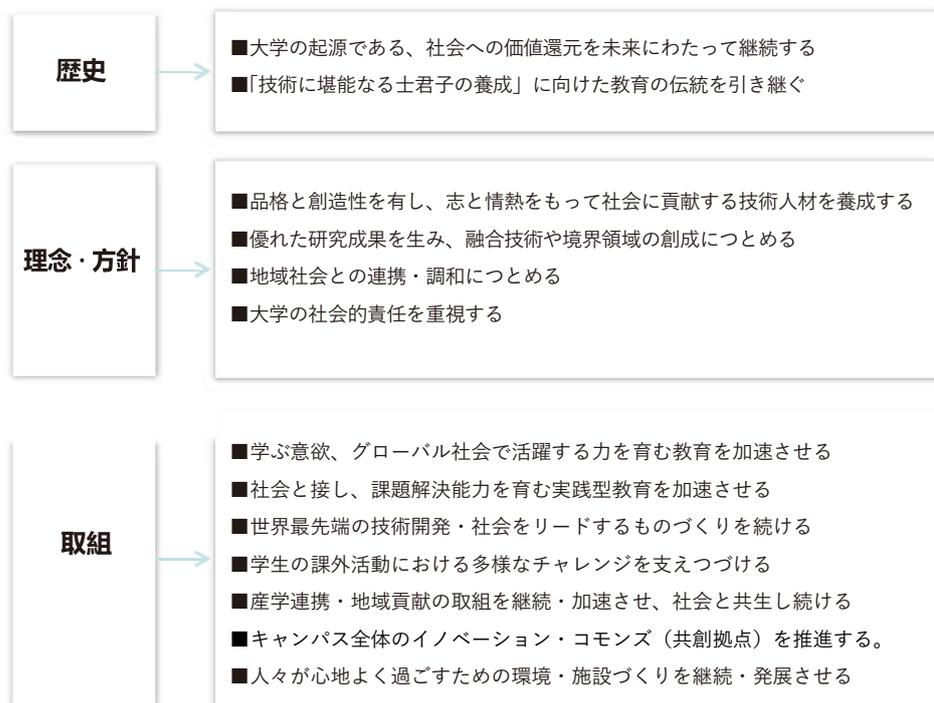
2-1-5. まとめ—今後に向けて

九州工業大学の基礎情報をふまえ、今後に向けた課題を整理します。

九州工業大学は、建学以来 100 年を越す歴史を有しています。大学を生んだ社会への価値還元精神、長く受け継がれてきた建学の理念「技術に堪能なる士君子の養成」や、深いコミュニケーションを通じた人間形成を重んじる家族的教育の伝統は、他の大学にない、独自の資産です。こうした歴史の中で培われた資産を継承し続けることが、30 年後の未来にも、地域の工学教育・研究の拠点であり続けるために必要です。

また、基本理念・基本方針は、大学の目指す長期的なあり姿を示す上位計画として、キャンパスマスタープランにも反映する必要があります。

さらに、今後に向けて、現在行われている教育・研究、学生活動・学生支援、社会貢献、産学官交流、環境・施設マネジメントにおける特徴的な取り組みを継続し、さらに発展させていくための環境整備も求められています。



2-2. 九州工業大学と社会動向…アジア、日本、地域社会

本節では、九州工業大学の歴史、理念・方針、取組という、キャンパスの将来像を描くにあたっておさえるべき、大学の基礎情報を整理します。

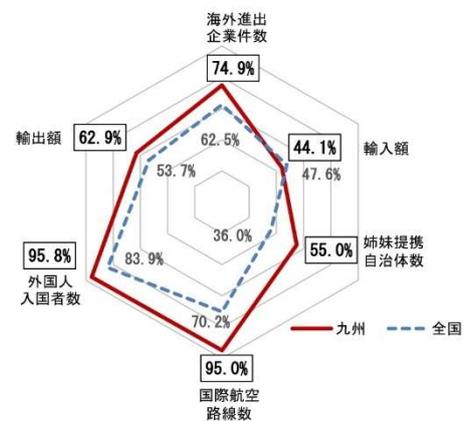
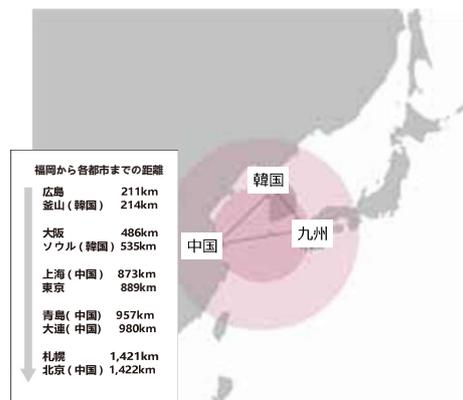
2-2-1. アジアとの関わり・アジアの動向

■ アジアとの位置関係 ■

戸畑、飯塚、若松の各キャンパスは、いずれも北部九州に位置しています。北部九州は、アジアと近い位置関係にあります。国内の他都市への移動と変わらない距離で、中国・韓国の主要都市へ行くことができる、日本におけるアジアとの玄関口になっているといえます。

■ アジアとの関わり・アジアの動向 ■

近接性を背景として、九州とアジアの関係はさまざまな面で深いものとなっています。右下の図は、各項目における「アジア度」(アジアが占める割合)を示しています。九州では、特に、外国人入国者や国際航空路線に占めるアジアの割合が全国に比べて大きく、アジアとの結びつきの強さが読み取れます。また、企業の海外進出の際にもアジアに進出する企業の割合が大きく、経済的にもアジアが重要視されています。



* 出典：経済産業省九州経済産業局
「九州経済国際化データブック 2011²⁰」より作成。

* 出典：経済産業省九州経済産業局
「九州経済国際化データブック 2011²⁰」より作成。

2-2-2. アジアの成長

■ アジアの成長 ■

世界経済においてアジアの占める割合は、今後増加していくと予想されます。たとえば、アジア開発銀行では、アジアが今後も高成長を続けると仮定した場合、平成 22(2010)年に 27.4%だった世界経済に占めるアジアの割合が、平成 62(令和32)(2050)年には 50.6%になると予測しています。経済規模だけでなく、一人当たり GDP も大きく増加し、生活や教育水準も向上していくことが想定され、アジアとの連携の重要性は、今後ますます高まっていくと考えられます。

	2010	2020	2030	2040	2050
世界 GDP (MER, 兆ドル)	62	90	132	195	292
世界 GDP に占めるアジア割合	27.4%	33.5%	38.9%	44.5%	50.6%
世界経済成長率		4.0%	3.9%	3.8%	3.6%
アジア経済成長率		5.8%	5.2%	4.8%	4.4%
経済成長に占めるアジア割合		55.7%	59.3%	62.8%	66.0%
世界一人当たり GDP (PPP)	10700	14300	19400	26600	36600
アジア一人あたり GDP (PPP)	6600	10600	16500	25400	38600

MER: 市場為替レート、PPP: 購買力平価

* 出典: アジア開発銀行「Asia 2050: Realizing the Asian Century」(2011年)より作成。アジアが高成長を続けるとした場合の予測値。

■ 九州工業大学とアジアの関係 ■

アジアは、九州と深く結びついていると同時に、九州工業大学とも深く関わっています。たとえば、現在九州工業大学が受け入れている留学生の大多数はアジア出身(令和4(2022)年5月1日現在、全 272 名中 230名がアジア出身)です。

また、日本(九州)・中国・韓国の官民が連携して実施する環黄海経済・技術交流会議事業の一環である、環黄海産学官連携大学総(学)長フォーラムでは、本学が代表校を務め、日中韓の産学官連携推進において主導的役割を果たしています。さらに、マレーシアにはサテライトオフィスを構えており、日本とマレーシアの協働によるパームバイオマス事業の推進や、油ヤシプランテーションの持続的経営の支援などにおいて、中心的役割を担っています。

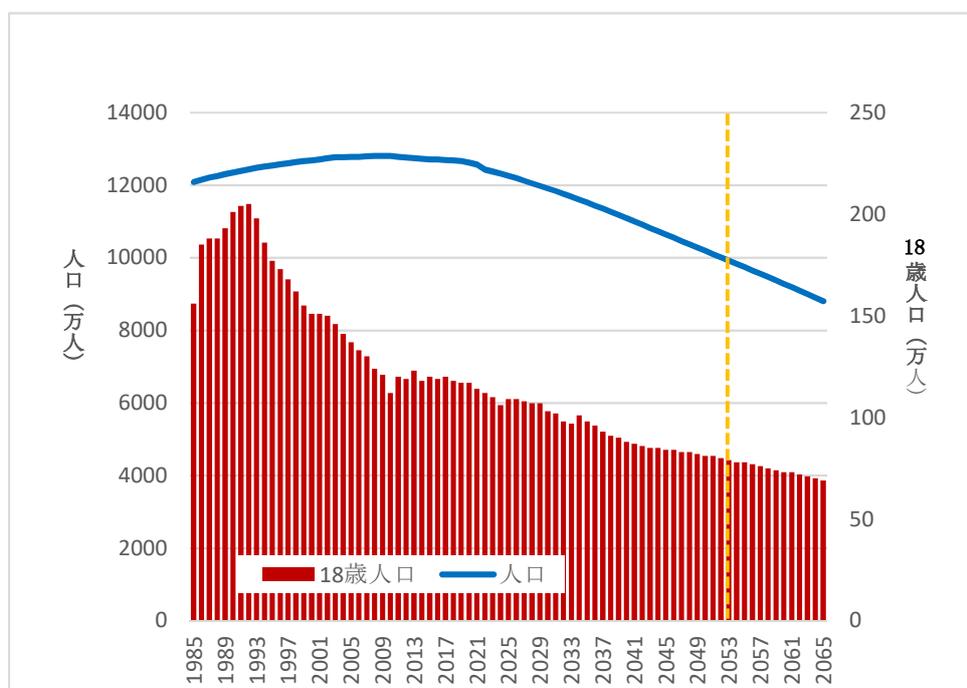
今後も、成長していくアジアとの教育研究活動における連携をさらに深め、優秀な留学生の獲得、教育研究活動における協力を推進していくことが重要です。

2-2-3. 日本の動向

将来に向けて、世界では、新興国を中心に人口の爆発的増加が予想されていますが、日本は今後本格的に人口減少が進んでいくと予想されます。

日本の18歳人口に注目すると、2010年代までは120万人前後で比較的安定的に推移しますが、その後減少が進み、30年後の2053年には80万人を割り込み、1/3以上減少すると予想されています。

大学においては、18歳人口の減少を見据え、アジアをはじめとする海外からの留学生や社会人学生など、より多様な人々を迎え入れるキャンパスづくりを進めていく必要があります。



* 出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」より作成。

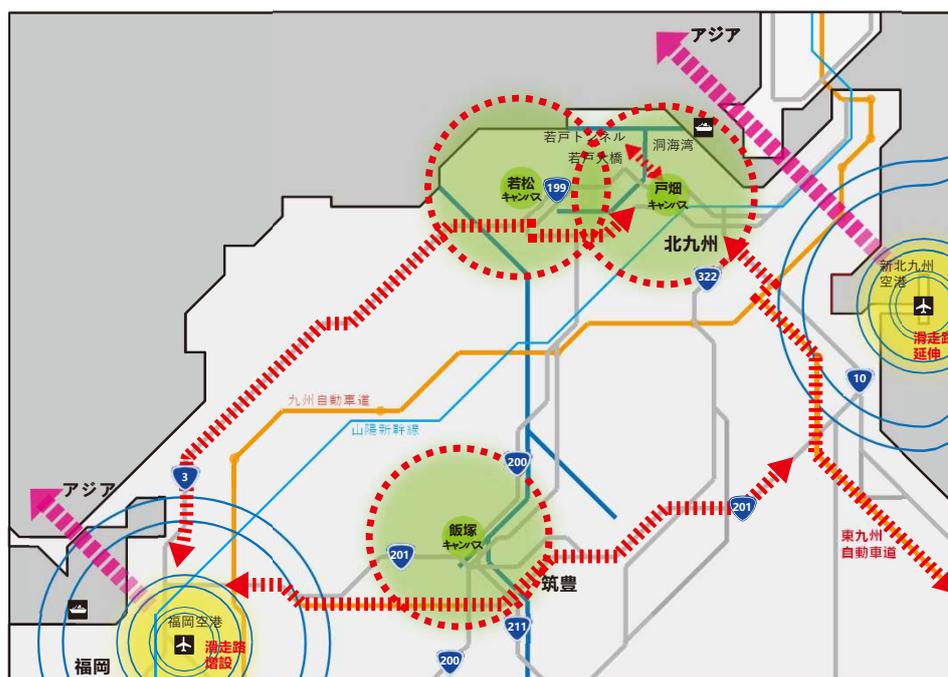
2-2-4. 地域社会の動向

■ 北部九州の動向、大学とのかかわり ■

交通インフラ

北部九州では、近年、地域間をつなぐ交通インフラ整備が進んでいます。今後、こうしたインフラを活用し、戸畑・飯塚・若松の3キャンパスのつながりや、周辺地域・大都市圏・アジア諸国との連携を深める基盤としていくことが重要となります。

- 空路では、福岡空港に加え、2006年に新北九州空港が開業し、国内他都市圏およびアジアを中心とする海外諸国への玄関口となっており、さらに滑走路の増設や延伸が予定されています。
- 鉄道では、2011年3月に九州新幹線が全線開通し、南九州へのアクセスが改善しました。
- 道路では、北九州市から苅田・行橋・豊前など京築エリアを通り、大分・宮崎の各県を結び鹿児島県に至る東九州自動車道の整備が進んでいます。また、福岡都心と筑豊・京築エリアをつなぐ国道201号線では、東九州自動車道につながるインターチェンジの整備や、2009年3月に全線開通した飯塚庄内田川バイパスなどにより、飯塚での渋滞緩和や、福岡・北九州都心へのアクセス改善されている。さらに、洞海湾を横断して戸畑・若松をつなぐ若戸トンネルが2012年9月に開通し響灘港を経由した北九州の国際物流を円滑化するとともに、戸畑・若松キャンパスのつながりを深めるインフラとしても期待されます。

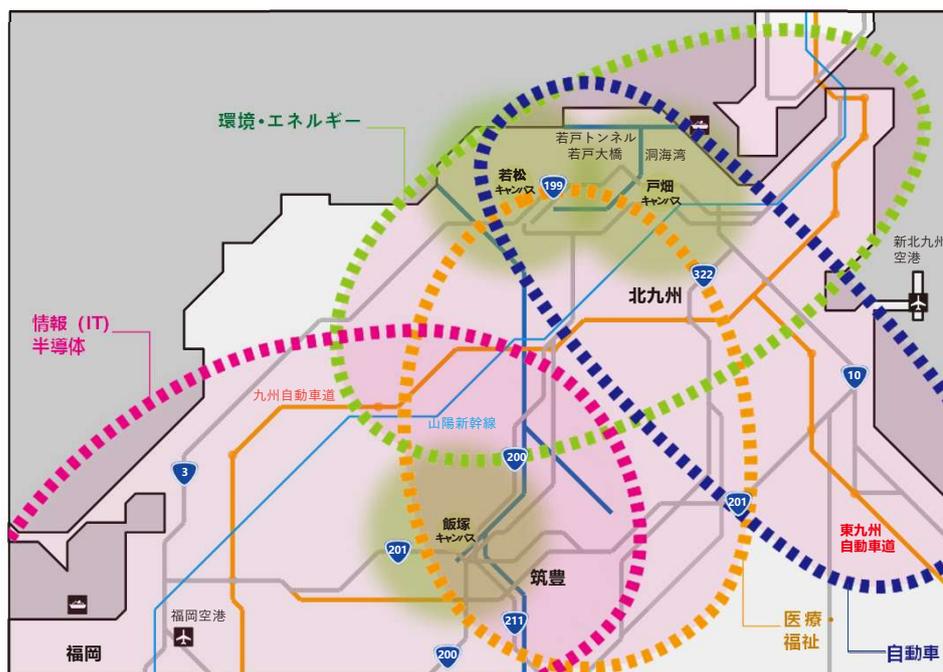


- 福岡・北九州・筑豊の連携強化
- アジアとの距離の縮小

基幹産業

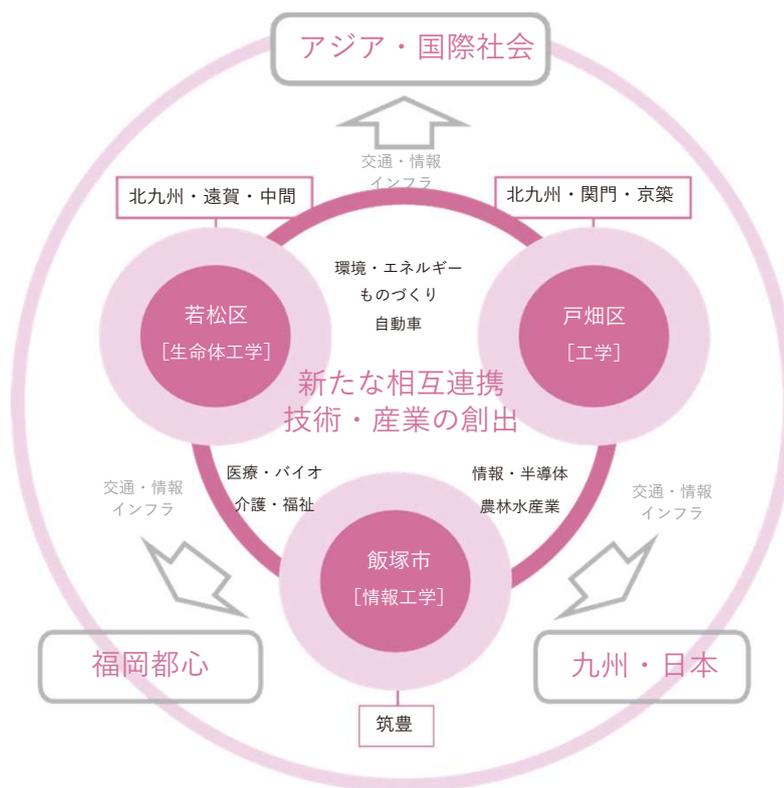
北部九州では以下をはじめとした基幹産業が形成されており、九州工業大学もこれらと深く結びついています。今後も、キャンパスの位置する自治体や、より広い地域（福岡、関門、京築、遠賀、中間、筑豊等）との連携を拡大・深化し、これらの産業の発展や新たな技術開発につなげることが重要です。

- 自動車： 北九州・京築エリアを中心に、自動車関連産業の集積が進んでいます。機械工学・金型・電気電子工学など、関連先端技術を有する九州工業大学も、北九州市立大・早稲田大と連携大学院カーエレクトロニクスコースで教育研究を行うなど、地域の基幹産業である自動車産業と密接に関わっています。
- 情報： 半導体・情報産業の集積も進んでいます。九州工業大学は、アジア IT 特区となっている飯塚の情報産業都市づくりや、福岡・北九州・飯塚地域における次世代産業創出を目指す福岡先端システム LSI 開発拠点構想（文部科学省「地域イノベーション戦略支援プログラム」、平成19～23年度）に関わるなど、この分野でも地域と深く結びついています。
- 環境・エネルギー： 北九州市で環境・エネルギー技術の開発・実証実験が進むとともに、隣接する遠賀・中間エリアでも資源循環プロジェクトなどが行われています。本学では、北九州市響灘沿岸でのエコタウン実証実験のほか、関門海峡での潮流発電実証実験などにも取り組んでいます。今後は、北九州を基盤としつつ、周辺の遠賀・中間、関門エリアなどもフィールドとして技術開発を進めることが重要と考えられます。
- 医療： 本学の位置する北九州・筑豊地域には、九州歯科大・産業医科大・福岡県立大・飯塚病院・総合せき損センター等、多くの医療研究機関が集まっています。これまでも、本学では歯工学連携、医工連携を進めてきましたが、さらなる取り組みの進展に向けては、新設されたバイオメディカルインフォマティクス研究開発センター（飯塚キャンパス）などを活かし、新たな領域を開拓していくことが重要です。



以上をふまえると、九州工業大学3キャンパスでは、キャンパスの位置する自治体を中心としつつ、より広域の地域（戸畑では北九州・関門・京築、飯塚では筑豊、若松では北九州・遠賀・中間など）も含めて、新たな連携と技術・産業創出に取り組むことが重要といえます。また、地域の基幹産業にイノベーションをもたらすためには、多様な専門性を持つ人々が集い、交わる中で新たな融合技術や境界領域を見出すことが課題となります。そのためには、今後も整備の進む交通インフラや、情報通信インフラによって、3キャンパスの連携も強めることが求められます。

さらに、3キャンパスと地域社会の連携の中で生まれた成果は、アジア・国際社会、福岡都心、九州、その他日本各地に発信し、大学と地域の魅力を広めることも重要です。



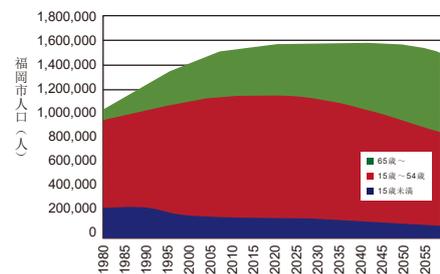
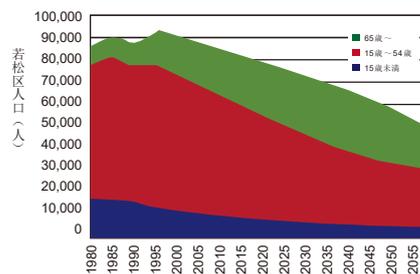
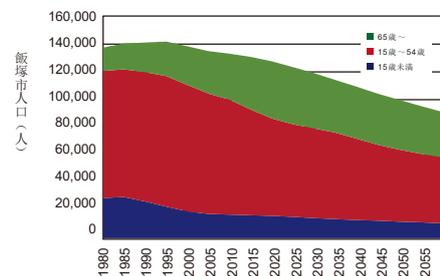
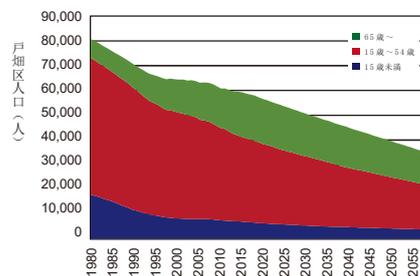
■ 自治体の人口推計 ■

本全体で人口減少が進むと同時に、今後、キャンパス周辺地域でも、軒並み大幅な人口減少が予想されます。

特に、戸畑区では、既に急激な人口減少が起こっており、今後もさらに減少が進むものと予想され、街の空洞化が懸念されます。

地域の魅力はキャンパスの魅力でもあります。住宅地や商店街と近接する戸畑キャンパスでは、大学としての地域づくりへの貢献が、大学自身の魅力づくりにとっても今後ますます重要になると考えられます。飯塚市でも、平成7(1995)年から人口減少が始まっています。今後は減少の速度が上がり、令和32(2050)年には10万人を割り込むと予想されます。飯塚市と連携して実施してきた学園都市・情報産業都市づくりに向けた取組が、これまで以上に重要になると考えられます。

若松区では、北九州学術研究都市周辺の住宅開発などの影響もあり、近年まで人口減少は緩やかにとどまっていますが、今後は大幅に減少が進むものと予想されます。北九州学術研究都市を構成する大学・研究機関などとともに、良好な教育研究環境の維持と、まちづくりに努めることが重要と考えられます。



* 各地方自治体が公表している人口ビジョンによる。

一方、九州最大都市の福岡市は、社会増（転入超過）が大きく、今後しばらく人口増加が続き、令和42(2060)年にも現在と同規模の人口を維持すると予想されます。アジアの玄関口としての役割も担う福岡市とは、天神サテライトキャンパスの更なる活用などの方策により関係を深め、広報等の活動を効果的に展開していく必要があると考えられます。

■ 自治体の計画・大学との関わり ■

戸畑区

- 北九州市は、「世界の環境首都」「アジアの技術首都」を目指したまちづくりを進めています。OECDの選定するグリーン成長モデル都市や、国の「環境モデル都市」「環境未来都市」「脱炭素先行地域」「スタートアップ・エコシステム推進拠点都市」にも選ばれており、低炭社会・スマートコミュニティの実現に向けた取組のトップランナーとなっています。
- 九州工業大学は、平成 24(2012) 年 2 月、北九州市・産業技術総合研究所と研究開発・人材育成における連携・協力協定を結びました。今後は、新たな技術開発と、北九州市の「世界の環境首都」構想実現に向けて、連携・協力を強化していくことになります。
- 戸畑区では、明治専門学校の時代から築かれた緑あふれる文教のまちとしての空間を維持し、歴史を活用する取組を行っています。たとえば、都市計画マスタープランにおいて、九州工業大学の位置するエリアを「便利で快適な居住環境を有する緑豊かな文教のまち」とすることを目標に掲げています。また、開学 100 周年の際には、区が記念事業を開催し、九州工業大学の歴史を活かした企画・イベントを開催しています。

飯塚市

- 飯塚市では、炭鉱の閉鎖後、大学・研究機関を誘致し、情報産業都市・学園都市としての発展に向けて取り組んできました。その中で、大学はまちづくりの中核に位置付けられています。現在進めている飯塚市産業振興ビジョンでも、「大学力を活かした地域経済の活性化」が標榜されています。
- 九州工業大学では、飯塚の地に大学発ベンチャーを数多く輩出し、飯塚市の経済活性化に貢献してきました。飯塚市産業振興ビジョンで目指している「人と産業が集まり成長するまち」の確立に向けても、九州工業大学は、アジアにおける教育研究交流及び研究開発の拠点、飯塚病院との医工連携、などへの参画により貢献しています。学生も、地域の小学校でのボランティア活動や、イベント運営への協力など、さまざまな形で飯塚市のまちづくりに関わっています。
- 飯塚市でも、積極的に大学や学生を支援しています。大学や学生のまちづくり活動に対する補助や、教職員・学生・留学生への住宅斡旋支援、留学生のアルバイト斡旋支援など、内容は多岐にわたります。飯塚市と九州工業大学の間では、お互いが支えあ
- う関係が築かれているといえます。

若松区

- 若松キャンパスの位置する北九州学術研究都市は、北九州市において、「世界の環境首都」「アジアの技術首都」の実現に向けた技術開発・産業創成の拠点に位置付けられています。
- 北九州学術研究都市は、国公立大学、企業・研究機関が集まり、連携・協働しながら教育研究にはげむとともに、図書館・情報処理施設・福利施設等の共同利用などにより効率的なキャンパス運営を実現していることが特色です。
- 学術研究都市の開発事業では、大学・企業・研究機関の集積するエリアだけでなく、付近に住宅や公園のエリアを開発し、複合的なまちづくりを進めています。第一期（1995～2006年）に整備された大学・企業・研究機関集積エリア、住宅・公園エリアに加え、第二期（2007～2014年）にはさらに大学・関連施設向けのエリアと、住宅・公園エリアが整備されています。また、学術研究都市地区周辺には住宅地が形成され大学を核とした都市づくりが進められています。

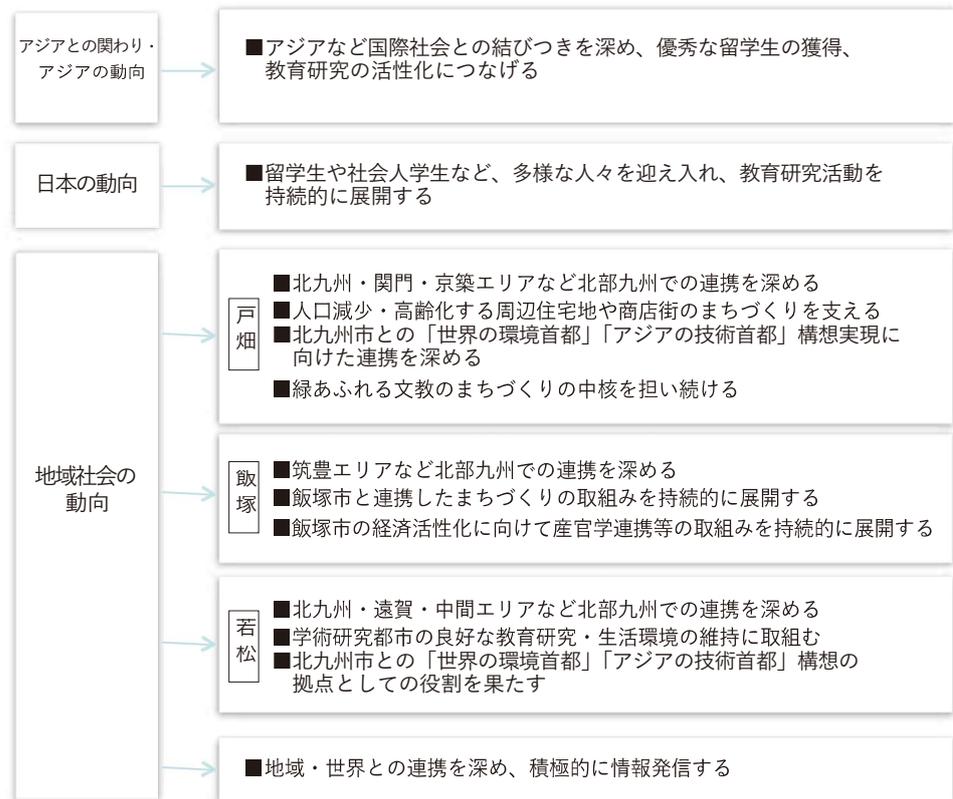
2-2-5. まとめ今後に向けて

九州工業大学のアジア・日本・地域社会との関係をふまえた、今後に向けた課題を整理します。

アジアは、九州工業大学の位置する北部九州と近く、今後大きく成長していくと予想されます。九州工業大学にとっては、アジアを中心に、国際社会と今以上に関係を深めていくことが求められます。

日本は、今後急速な人口減少が予想されます。18歳人口も大幅に減少することを前提に、多様な人材を迎え入れ、教育研究を持続的に展開させることが必要です。

地域社会でも、それぞれ急速な人口減少や高齢化が予想され、大学がまちづくりにおいて果たすべき役割も増大していくと考えられます。キャンパスづくりも、地域の掲げる計画や方針をふまえて進めていくことが重要です。



2-3. 九州工業大学の空間・・・空間の履歴、現状

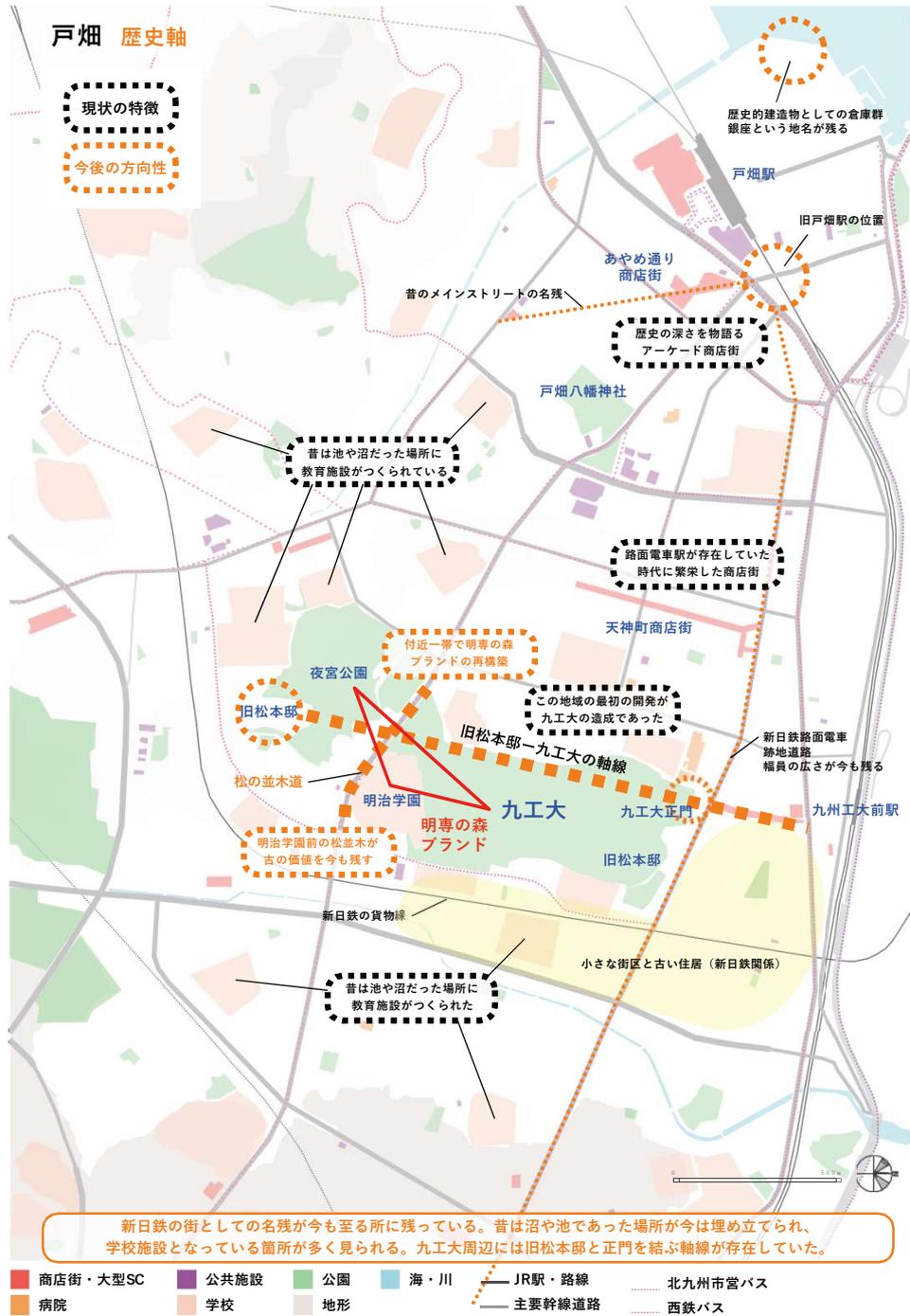
本節では、九州工業大学キャンパスと周辺地域の空間の状況について、次のような観点から整理します。

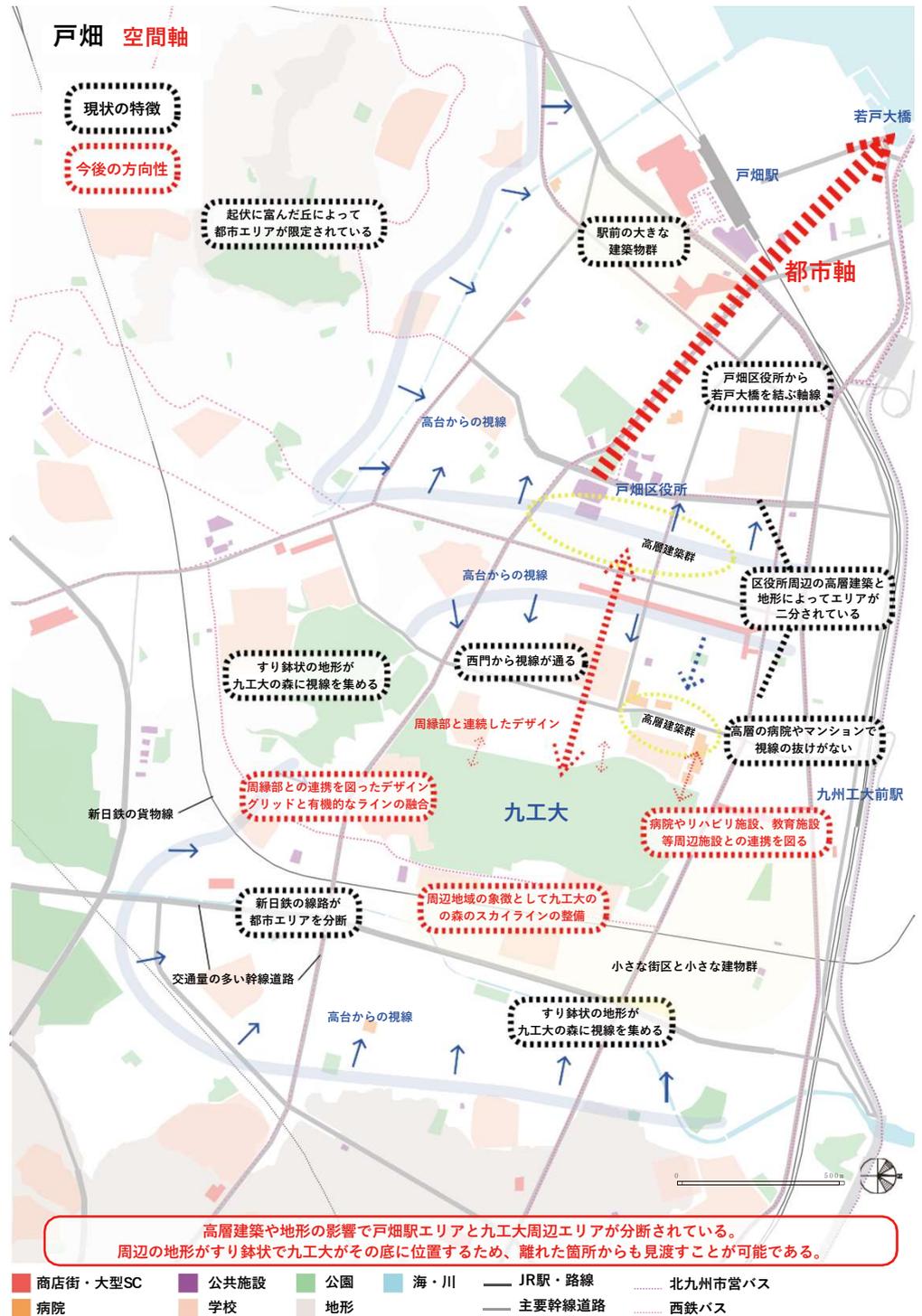
- 歴史軸・・・空間構造、土地と施設、景観要素がどのような歴史をもつか
- 空間軸・・・道路、建物、スペースの様子や使われ方の特徴はどんなものか
- 自然軸・・・地形、緑、水系、風、自然景観の特徴はどのようなものか
- 生活・情報軸・・・キャンパスのひと・もの・こと、生活風景の特徴はどんなものか

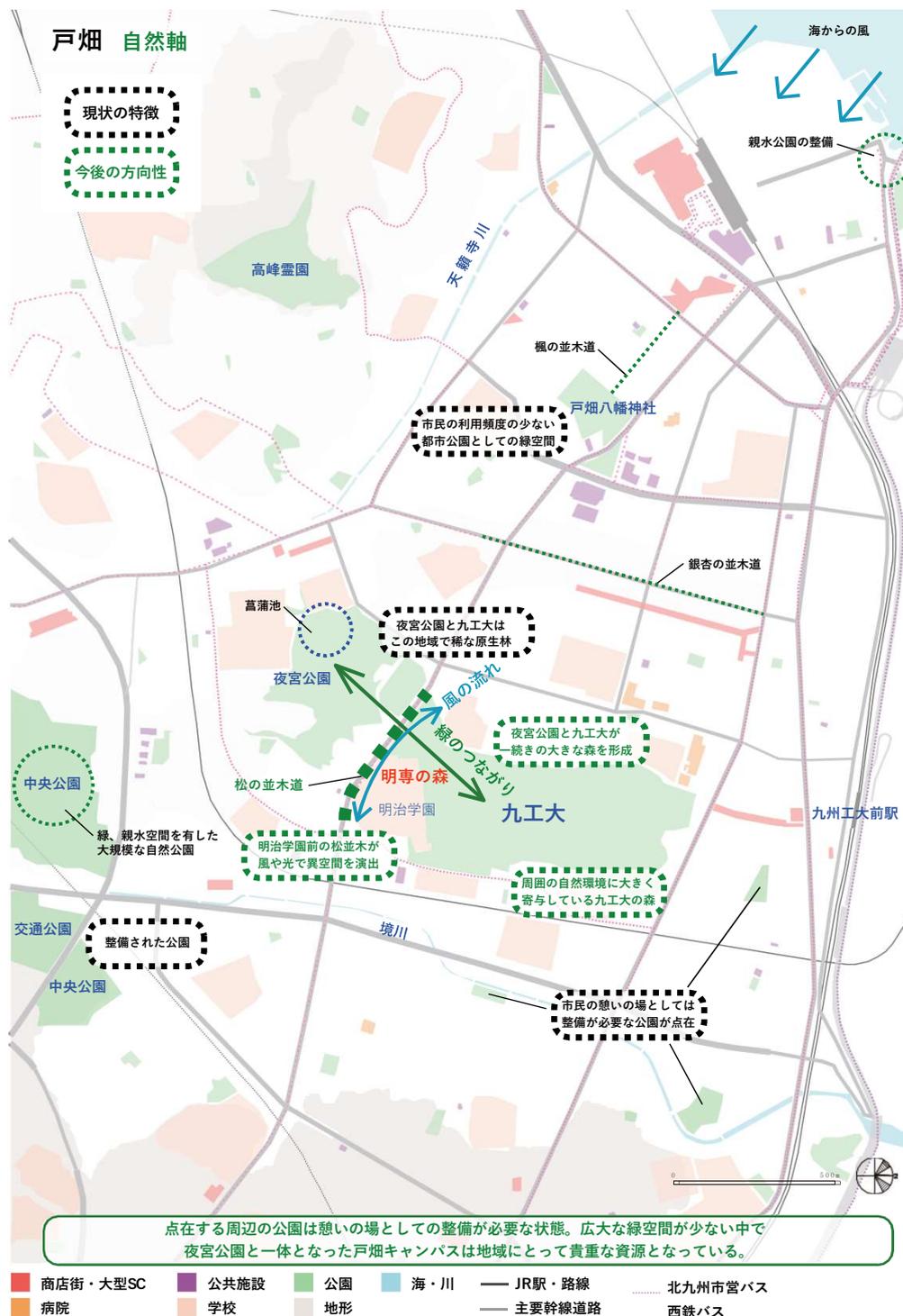
あわせて、九州工業大学のキャンパスの基礎的データを整理します。

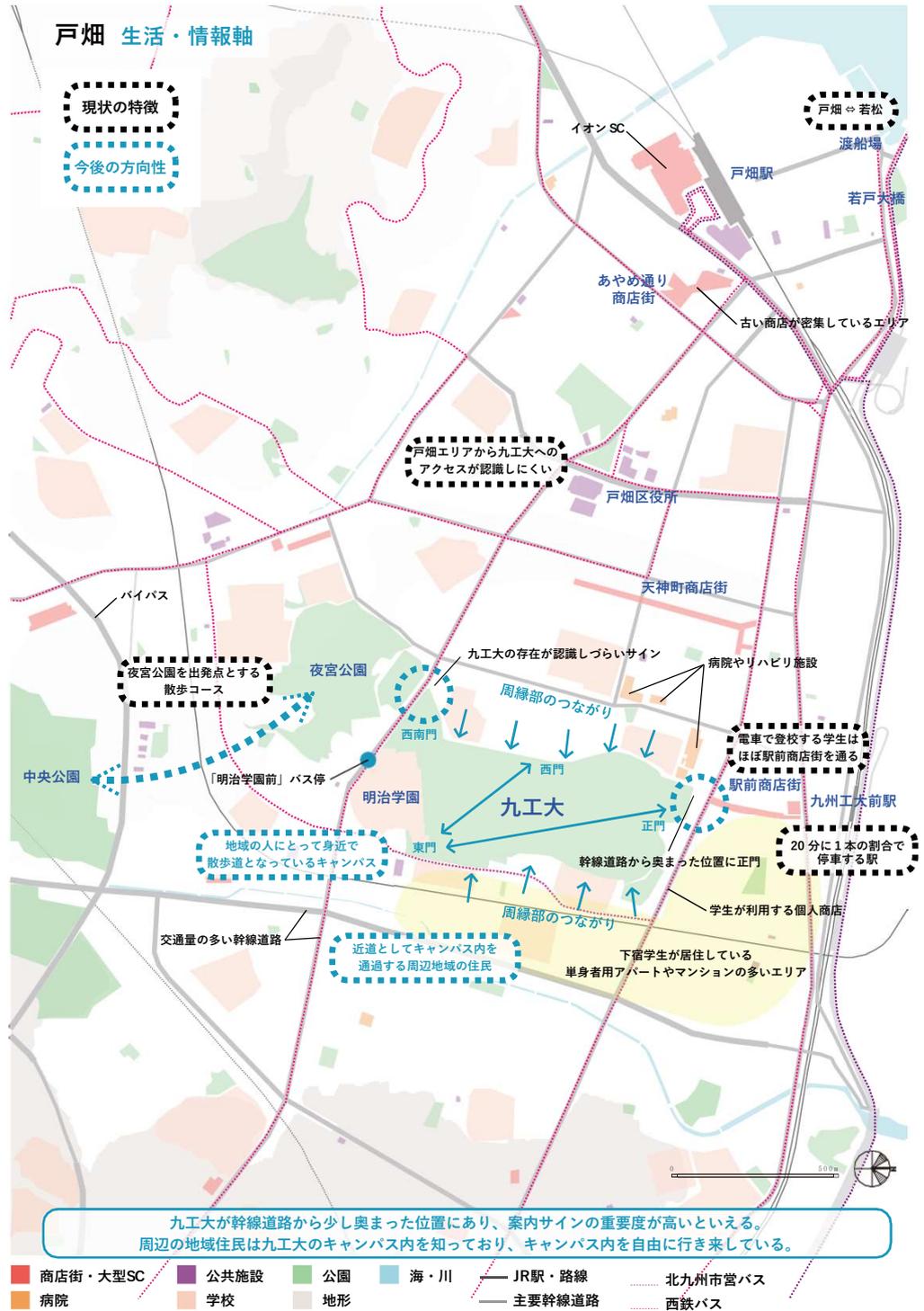
こうした整理を通じて、未来像を描くにあたって出発点となる、キャンパスと周辺地域の可能性や問題点を明らかにします。

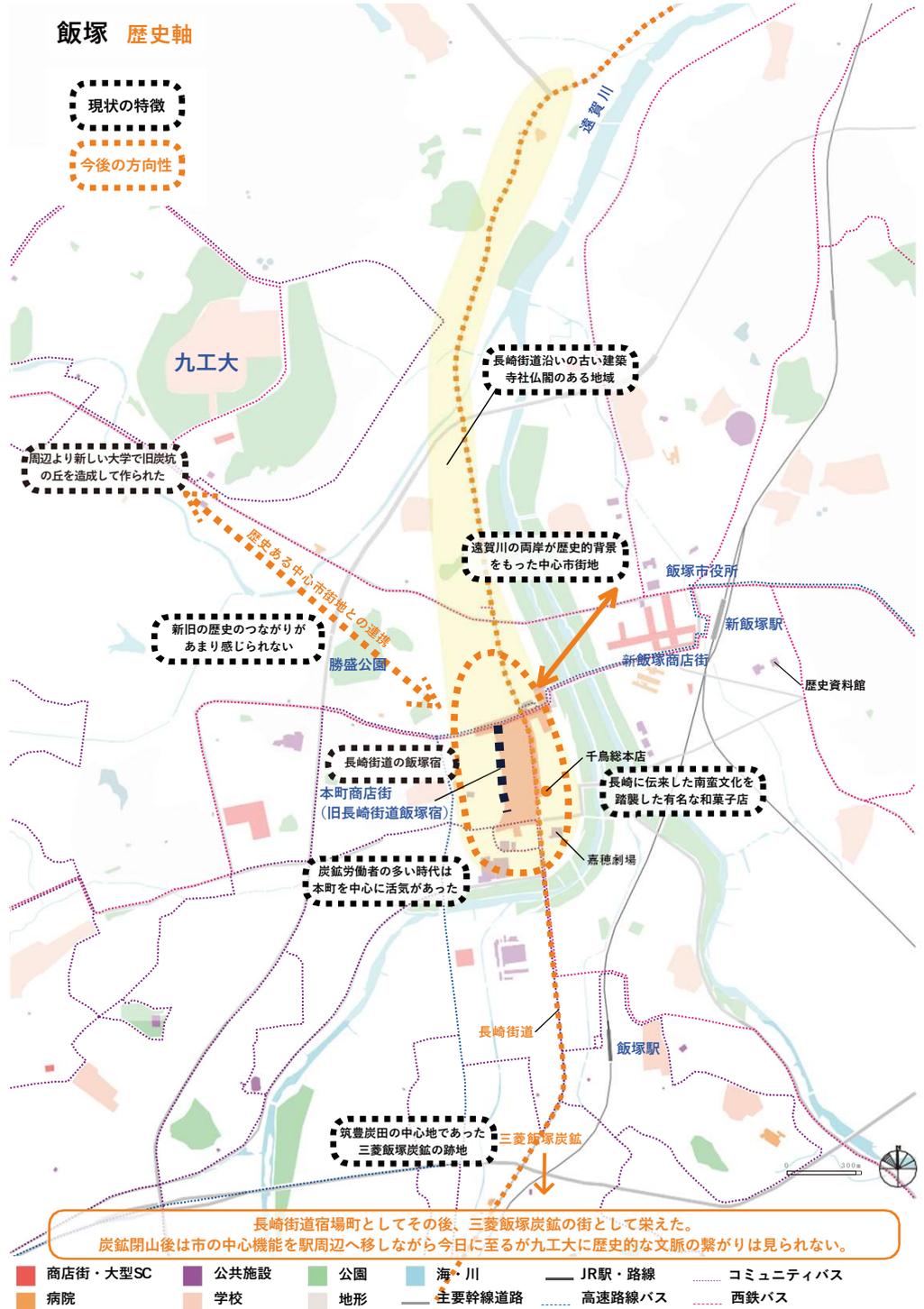
2-3-1. 周辺地域の空間

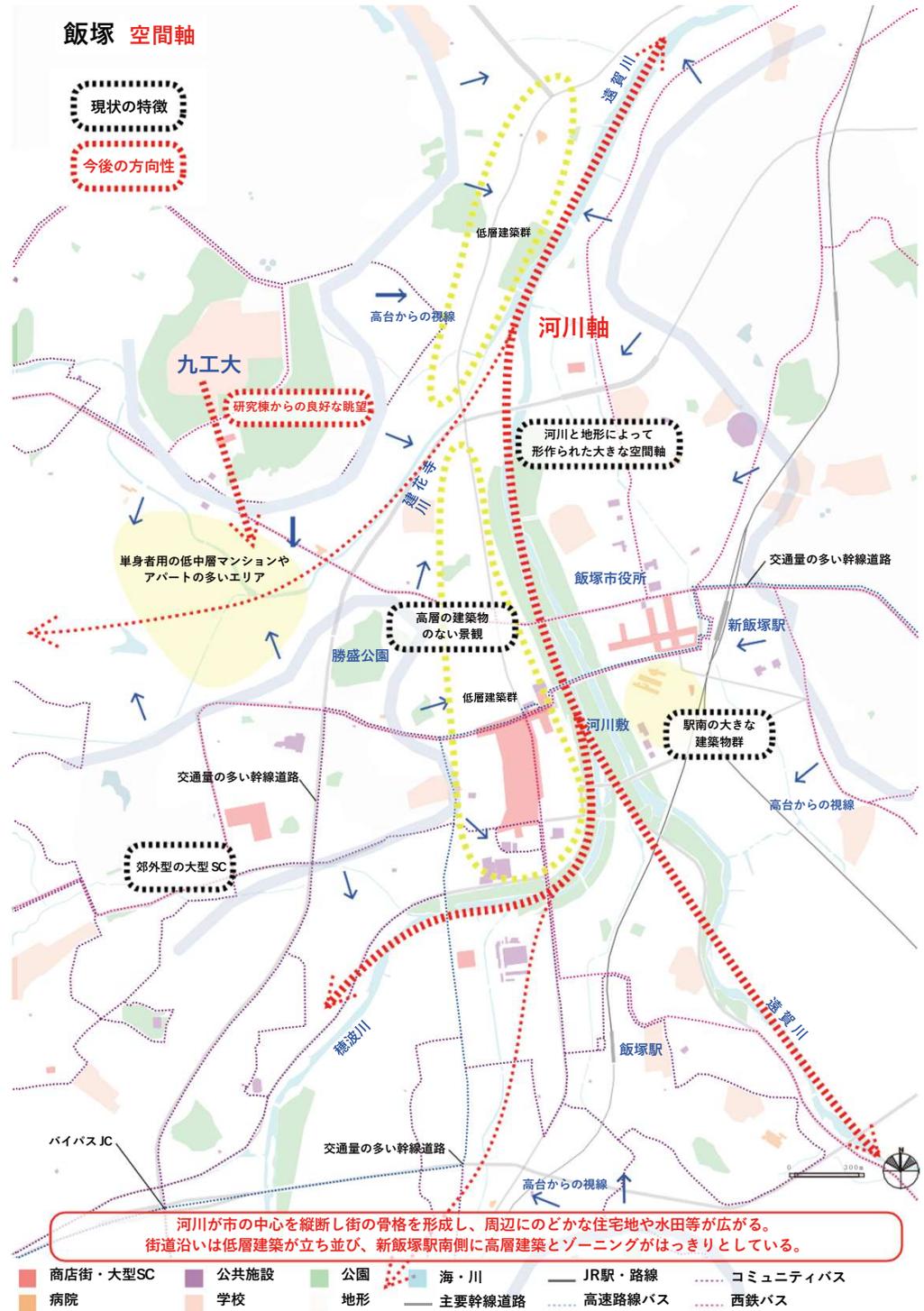


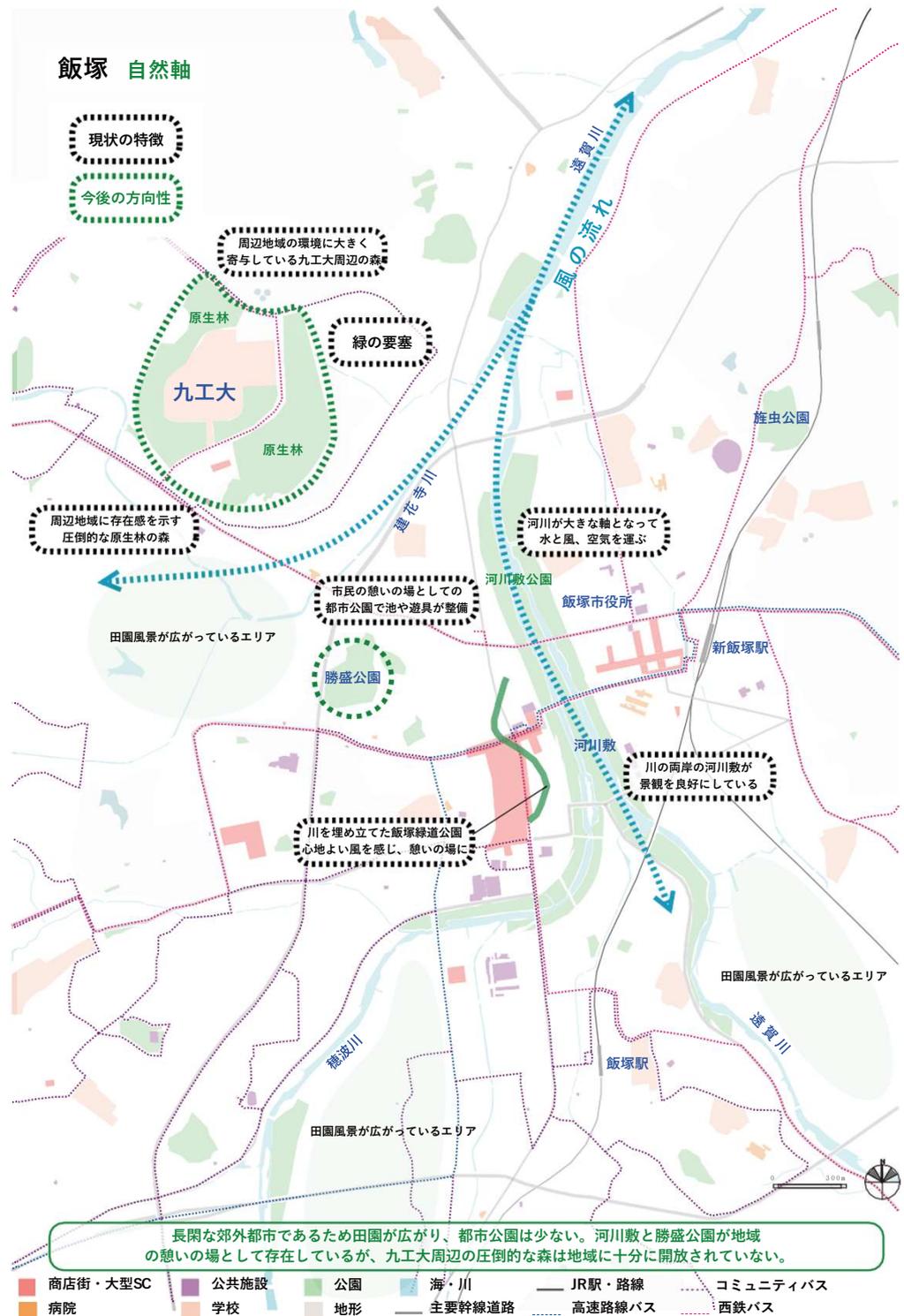


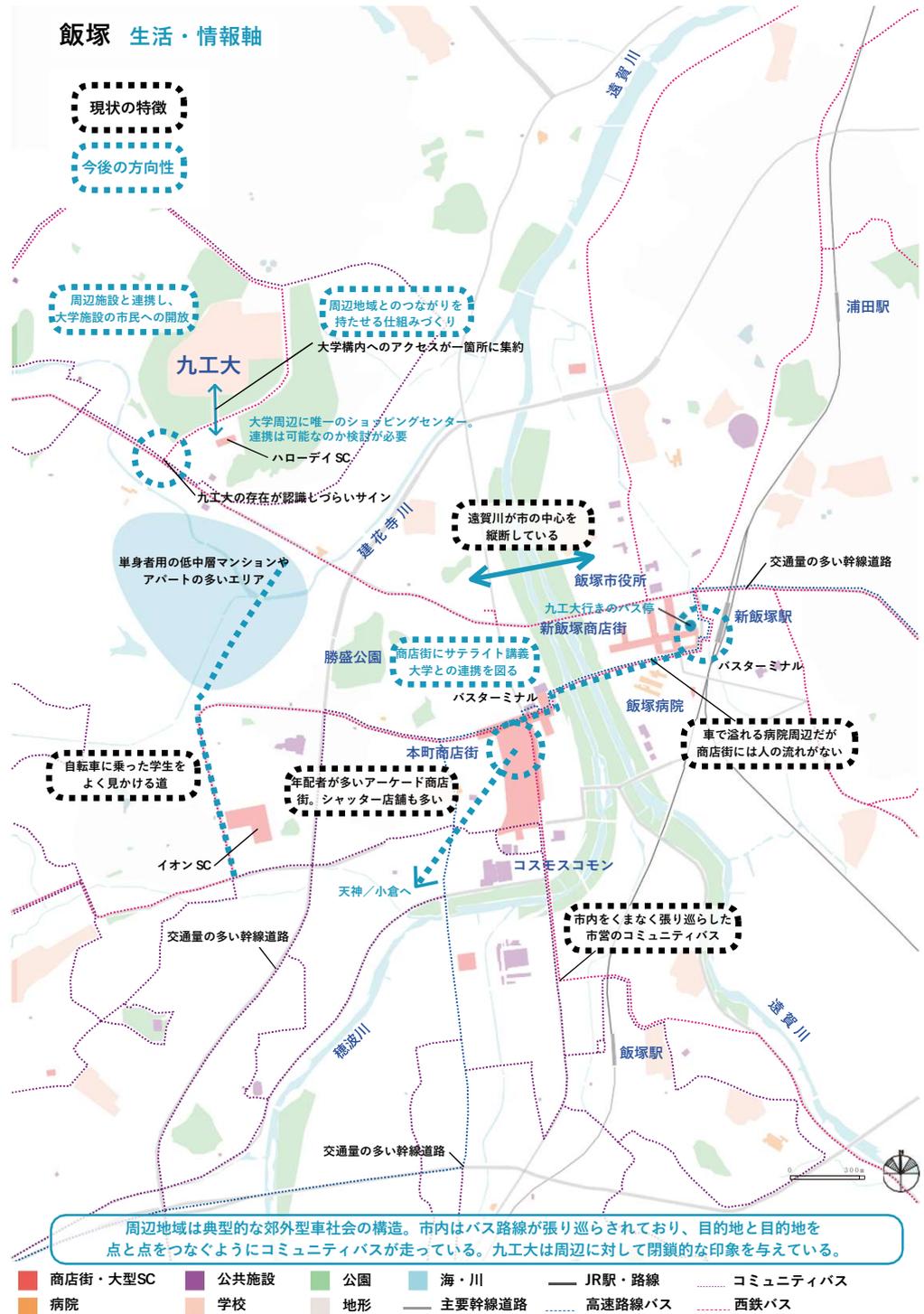


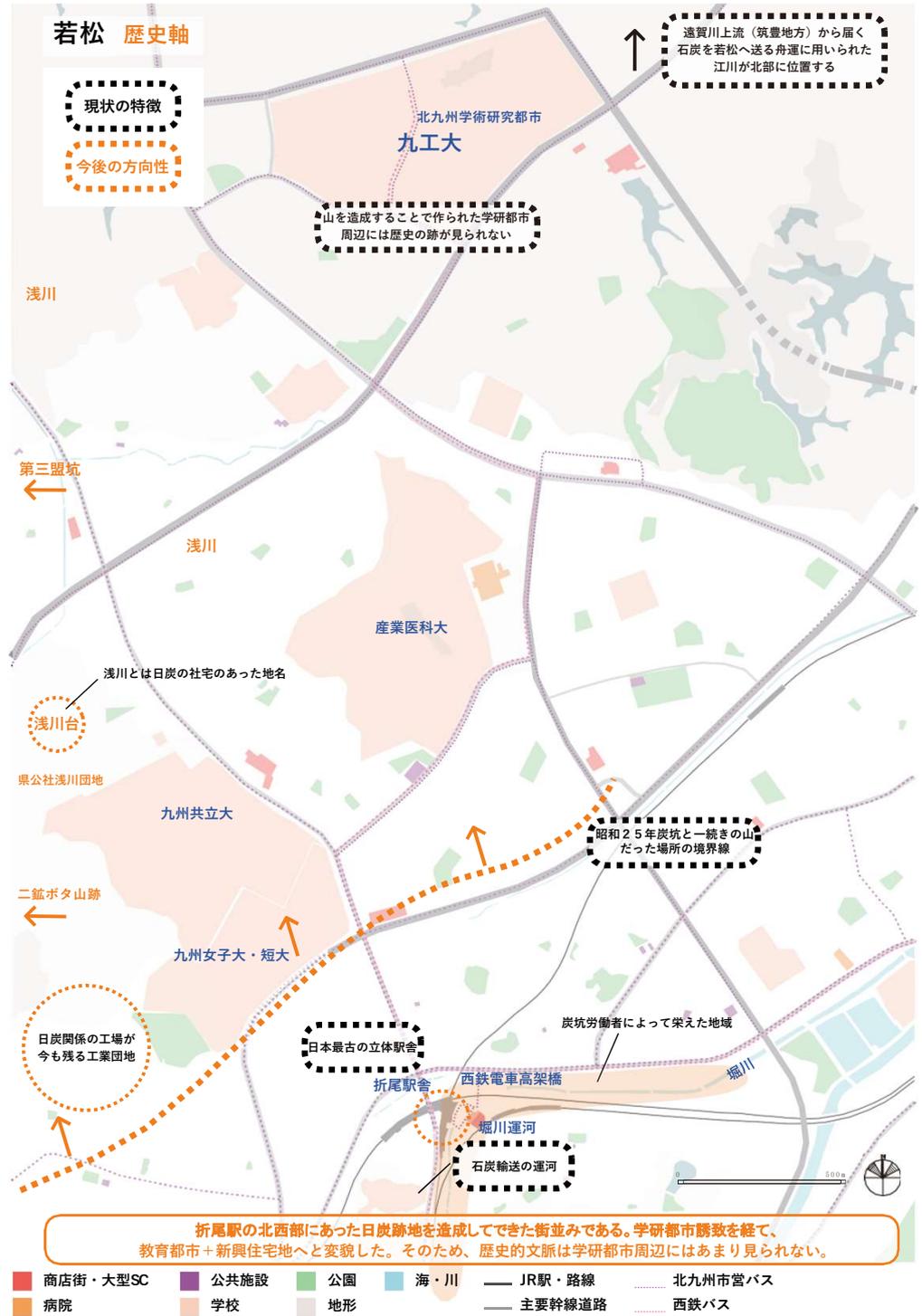


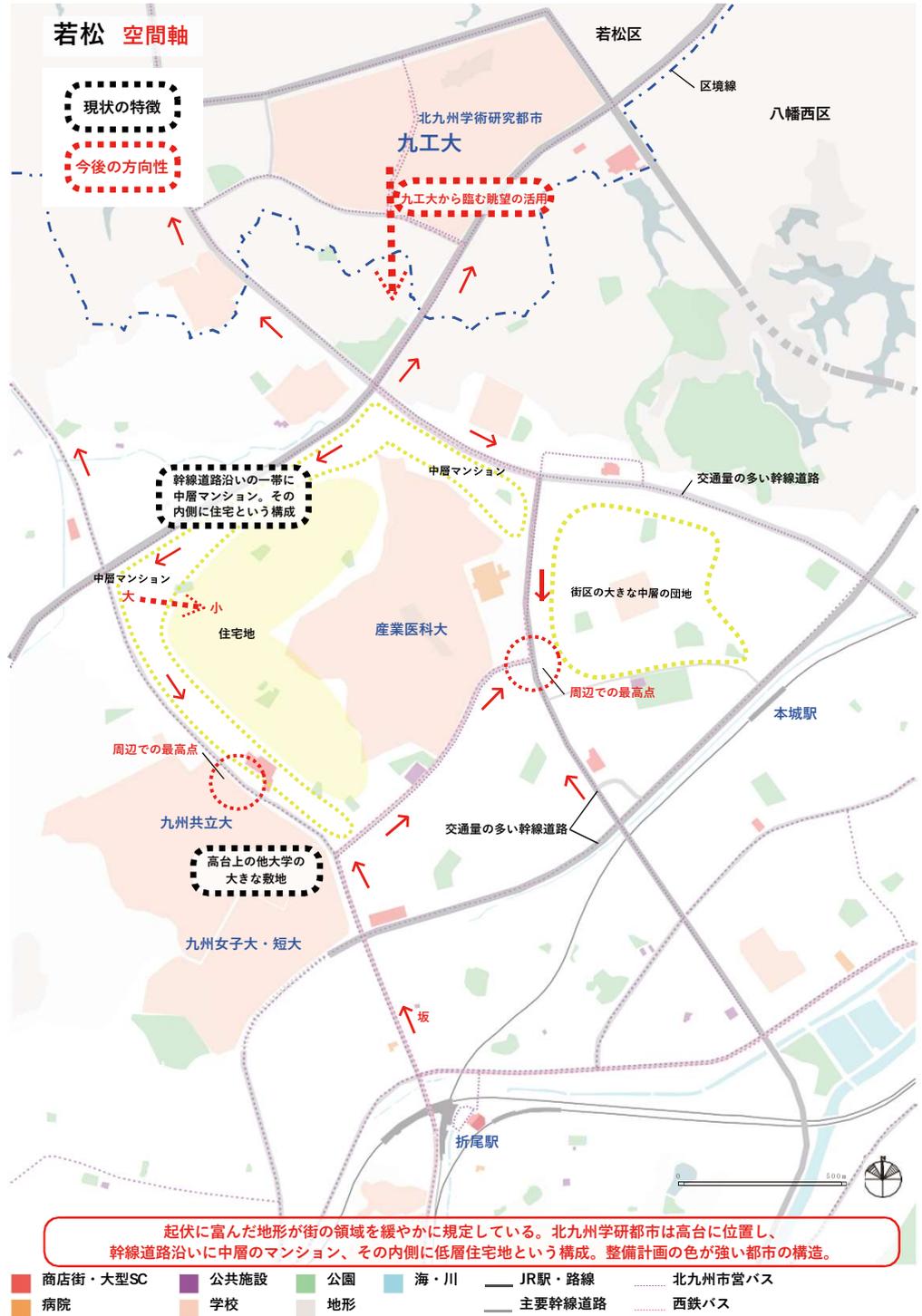


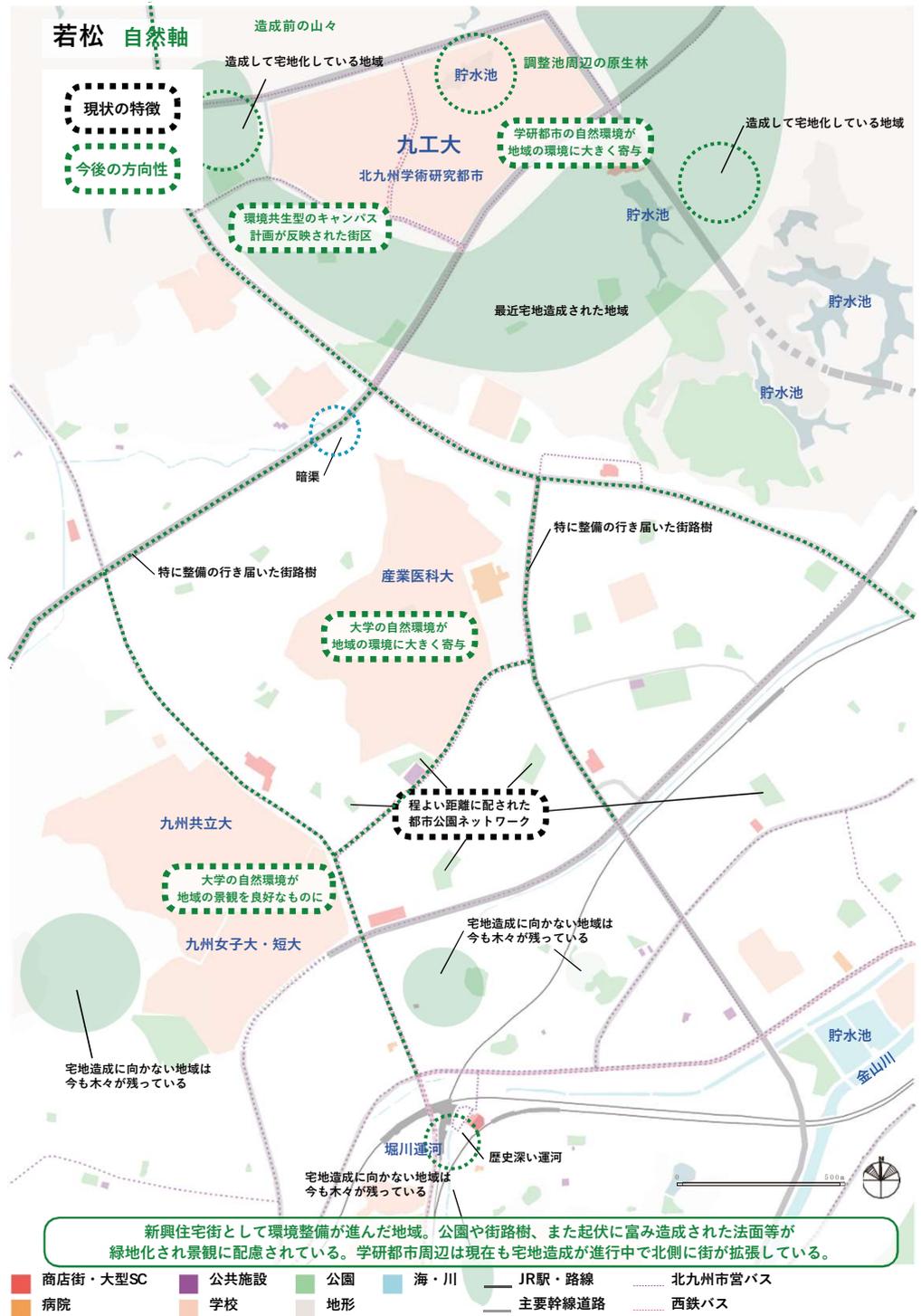








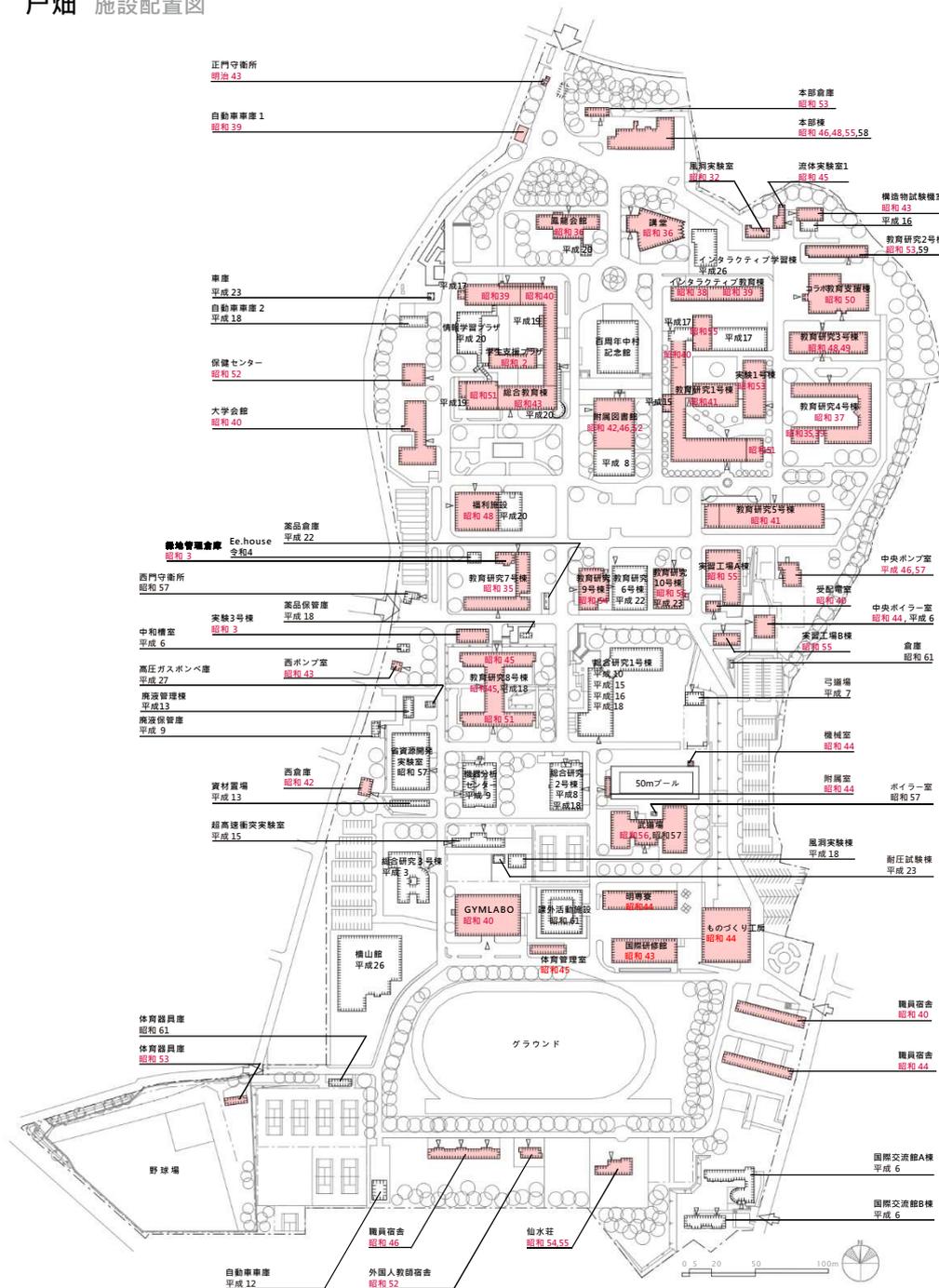






2-3-2. キャンパスの空間

戸畑 施設配置図



取壊し・用途変更予定
 昭和56年以前建築
 (本プラン目標年度の令和24(2042)年に築60年を超える建物)

戸畑 歴史軸

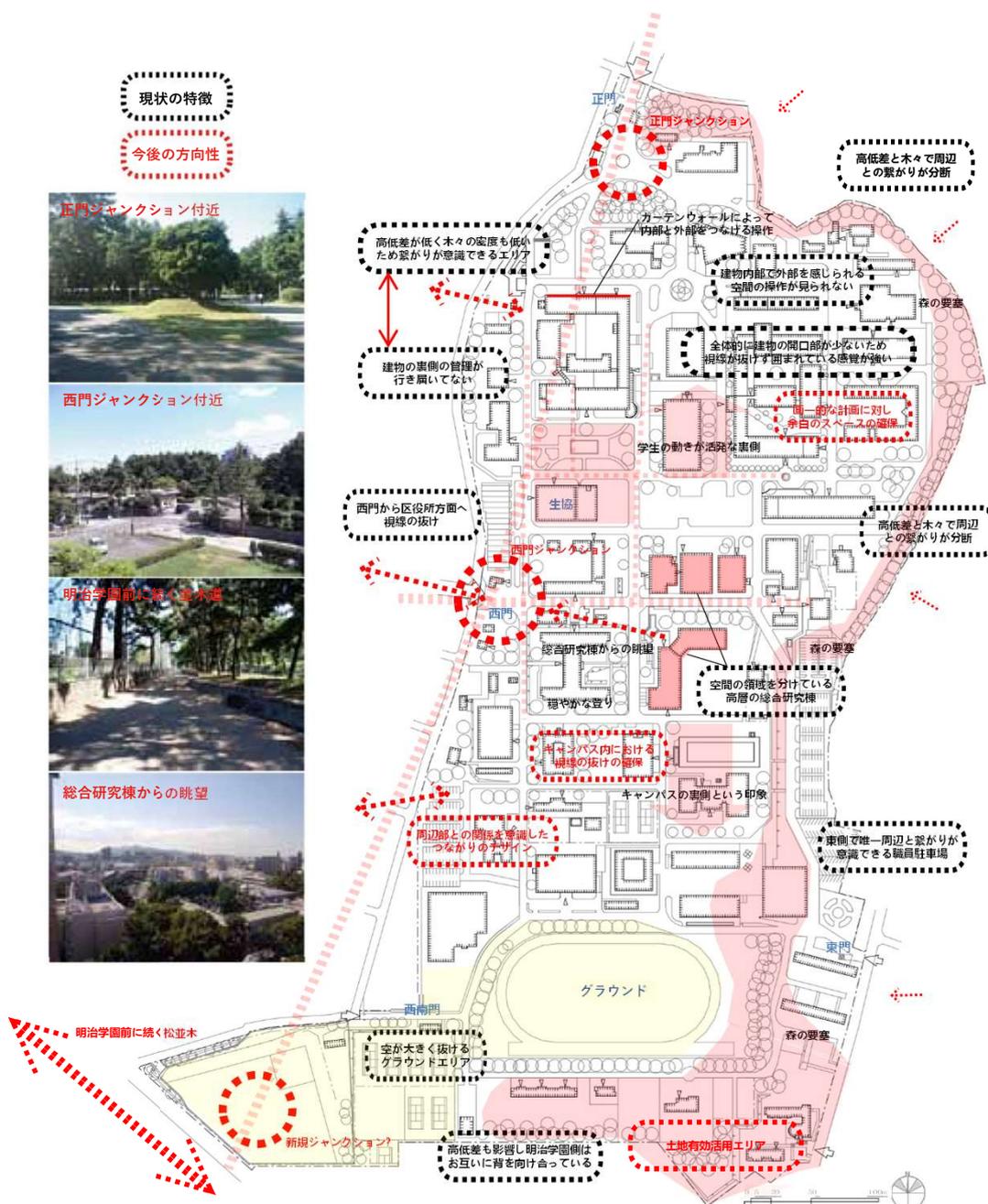


正門付近には守衛所をはじめ、街区形状等歴史的な文脈が現存している。
 九工大、明治学園、夜宮公園で「明専の森」として一体的に景観保存を行っていく必要がある。

戸畑 空間軸

現状の特徴

今後の方向性



キャンパス中央にある総合研究棟によってキャンパスが南と北に領域が分かれている。敷地自体も木々によって囲われており、周縁地域とのつながりが意識しにくい。

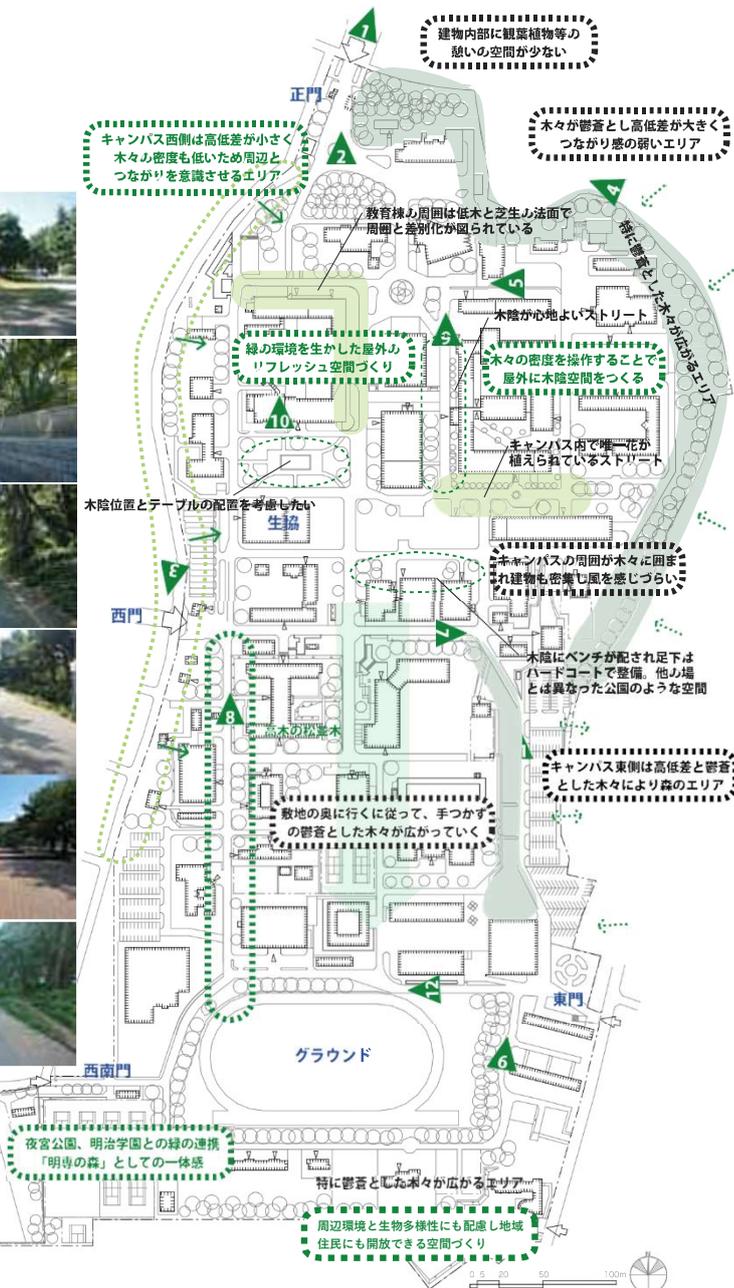
戸畑 自然軸

現状の特徴

今後の方向性

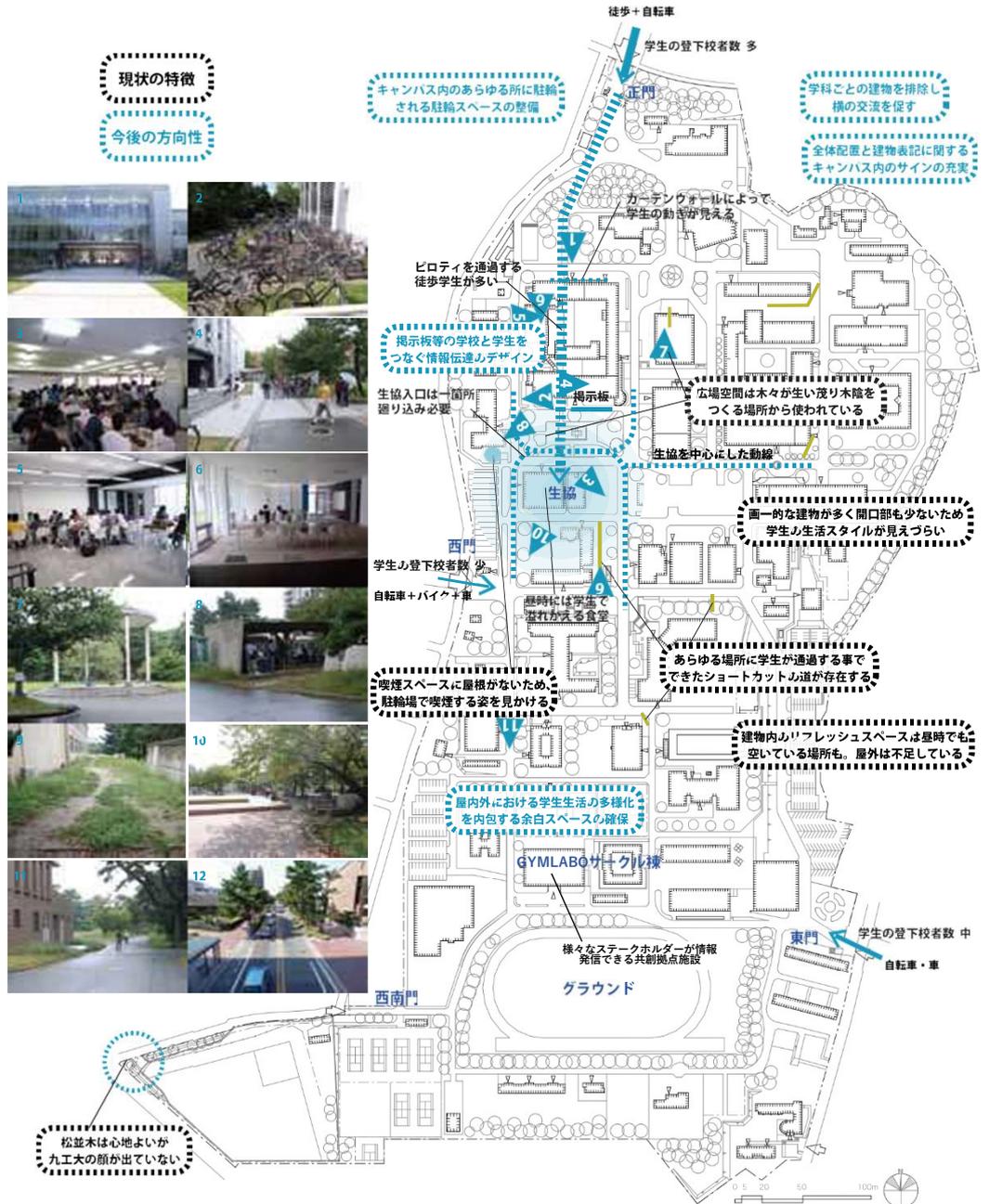


明治学園前まで続く風と緑、光が心地よい松並木



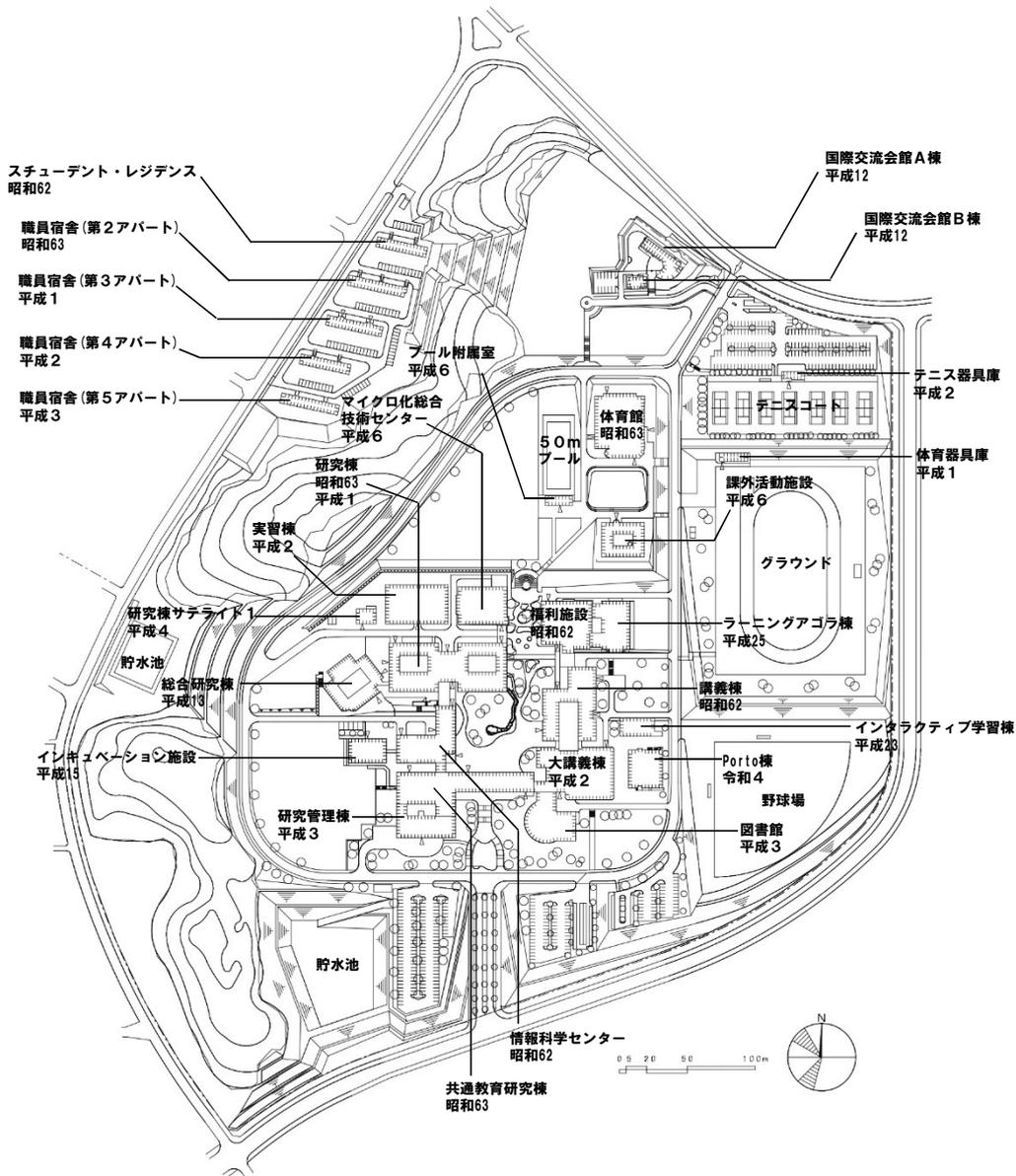
敷地南側に植栽の管理が行き届いてないエリアもあり、憩いの場としての緑地空間が比較的に少ない。木々の種類や密度を調整して周縁部とのつながりを考慮したり、学内も木々による場所の特徴づけが必要である。

戸畑 生活・情報軸



生協へと向かう動線が活動の中心となっている。緑豊かで広大な空間が広がる一方でピロティ空間が少なく、雨天時の活動が制限されている。学生が気軽に集まれる、出会う場の整備が必要である。

飯塚 施設配置図



取壊し・用途変更予定
 昭和56年以前建築
 (本プラン目標年度の令和24(2042)年に築60年を超える建物)

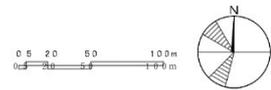
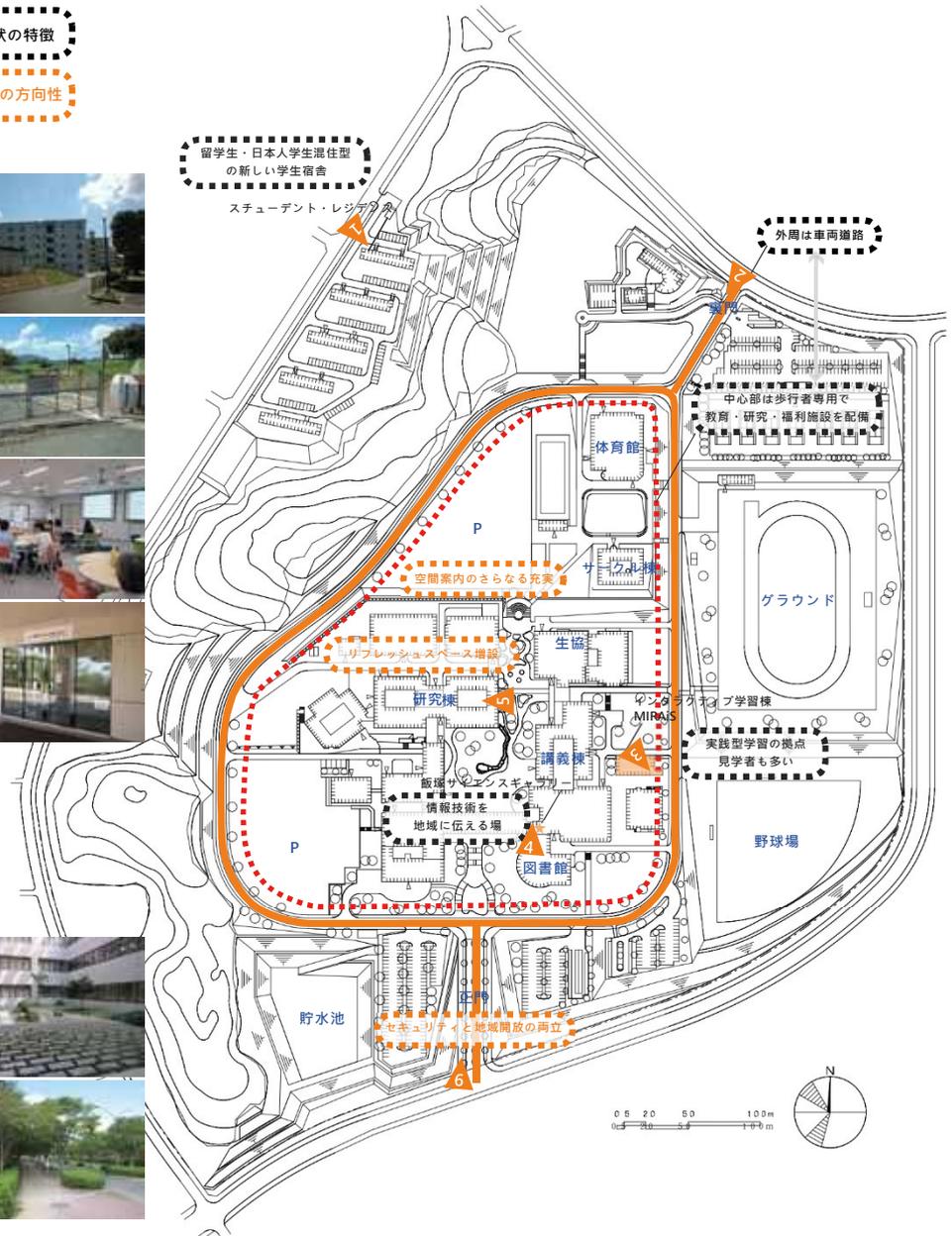
飯塚 歴史軸

現状の特徴
今後の方向性



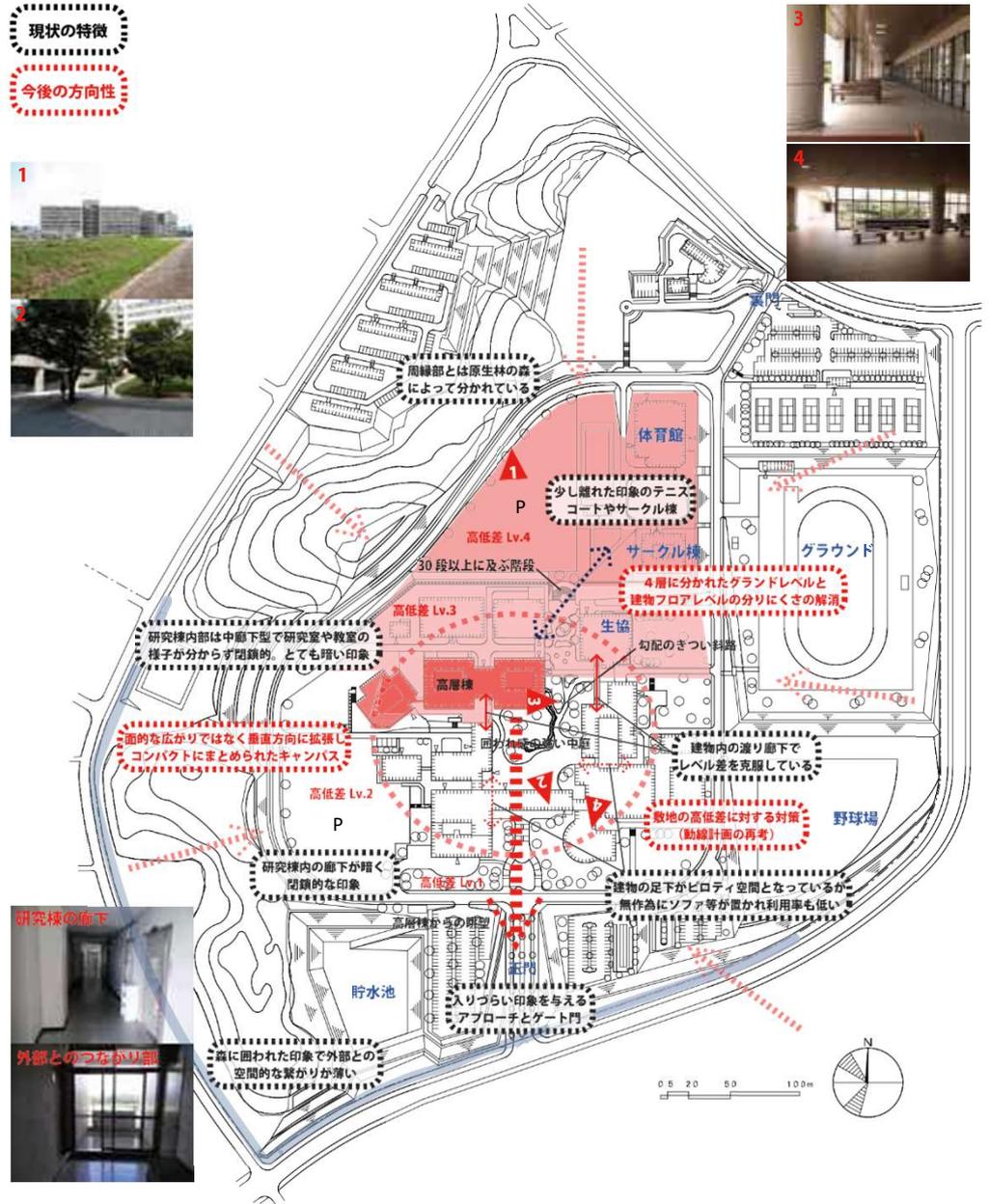
留学生・日本人学生混住型の新しい学生宿舎
スチューデント・レジデンシャル

外周は車両道路



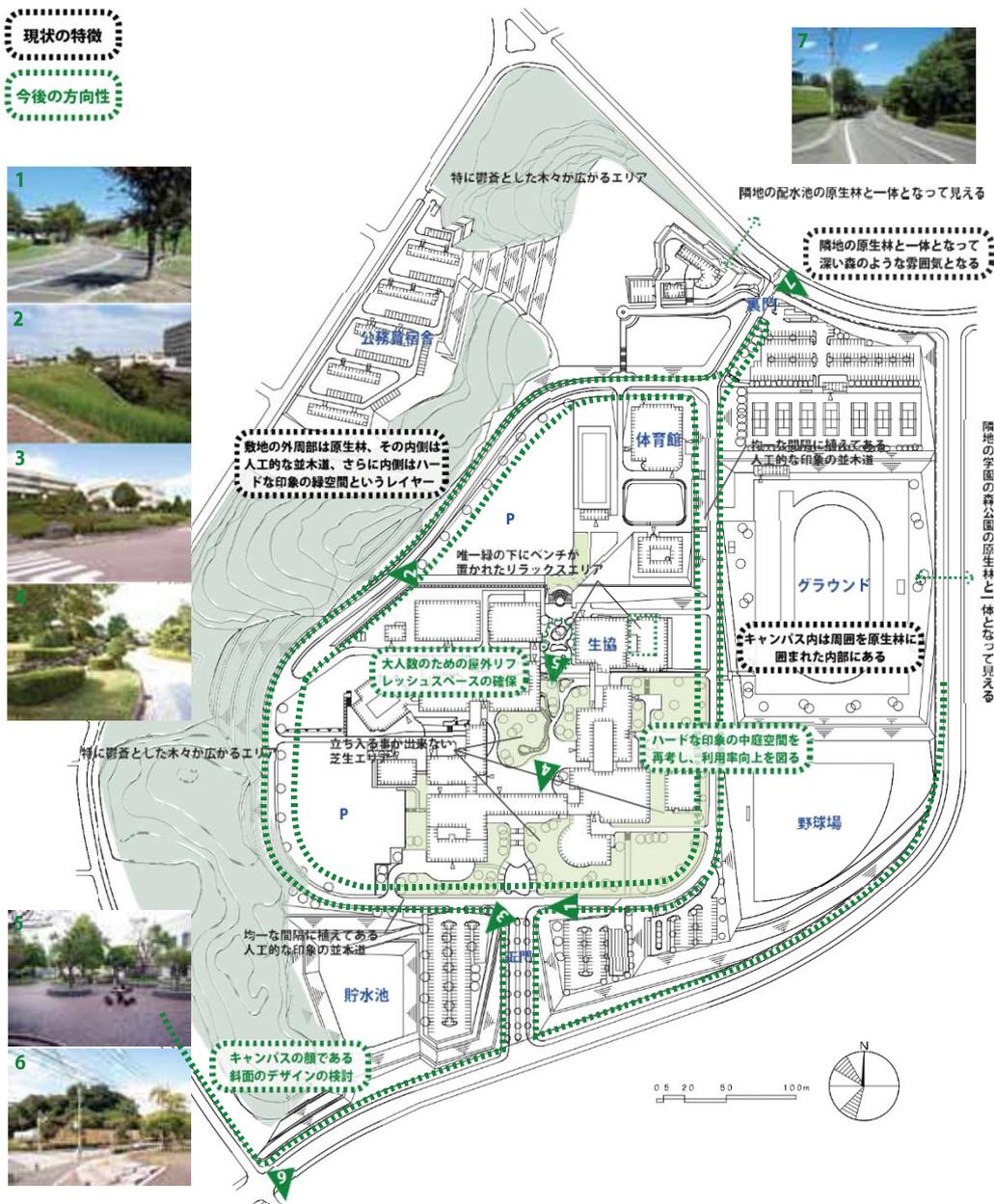
創立時のコンセプトである外周と中心部に分かれたはっきりとしたゾーニング、「キャンパスオートメーション構想」を継承し、キャンパス自体を先端情報技術の結晶に更新し続けていきたい。

飯塚 空間軸



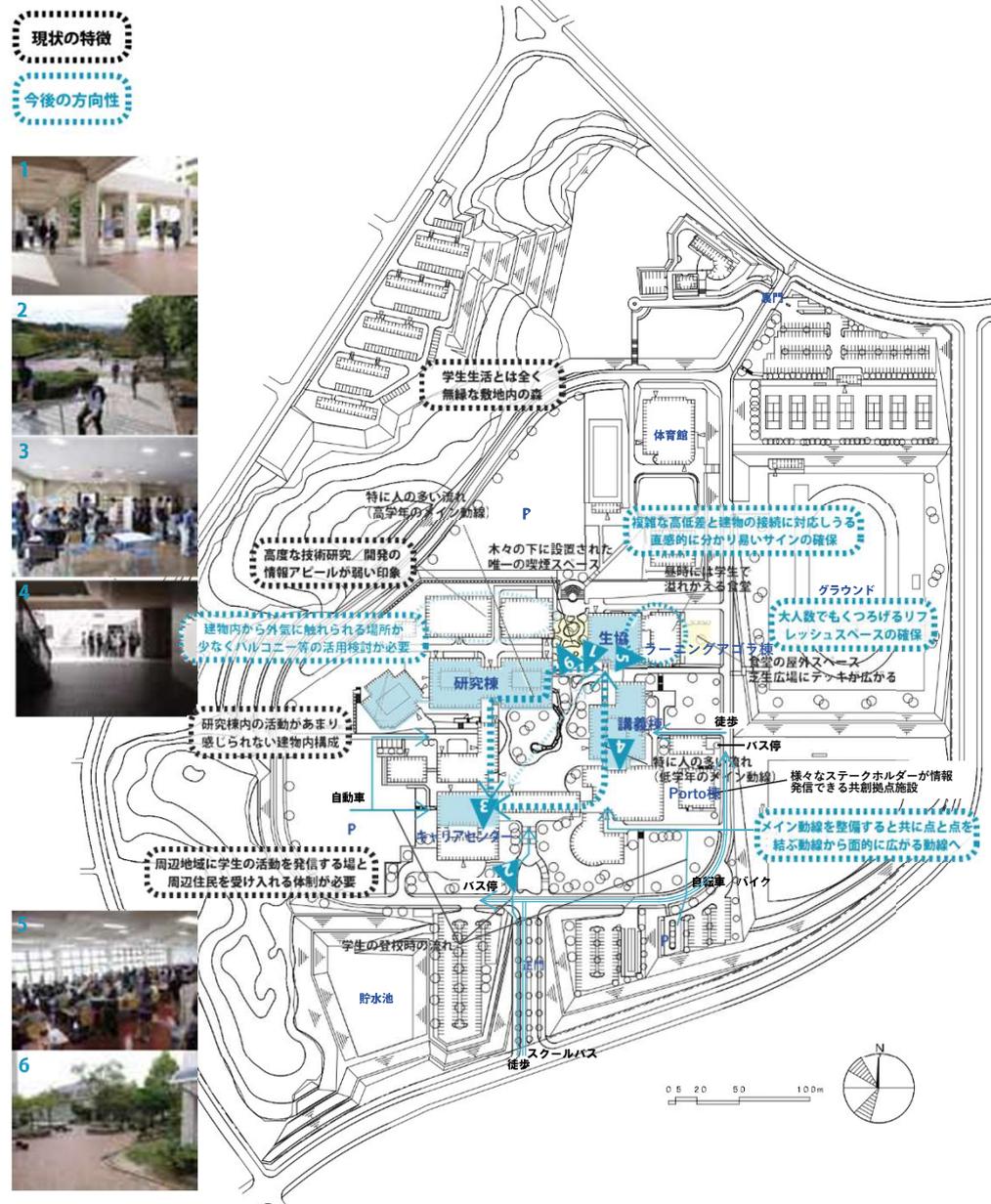
敷地内の高低差を渡り廊下によってつなぎ、レベル差をうまく解消したキャンパス。水平的な広がりよりも垂直方向に機能を拡張したコンパクトなつくり。屋外空間との関係性が今後の課題。

飯塚 自然軸



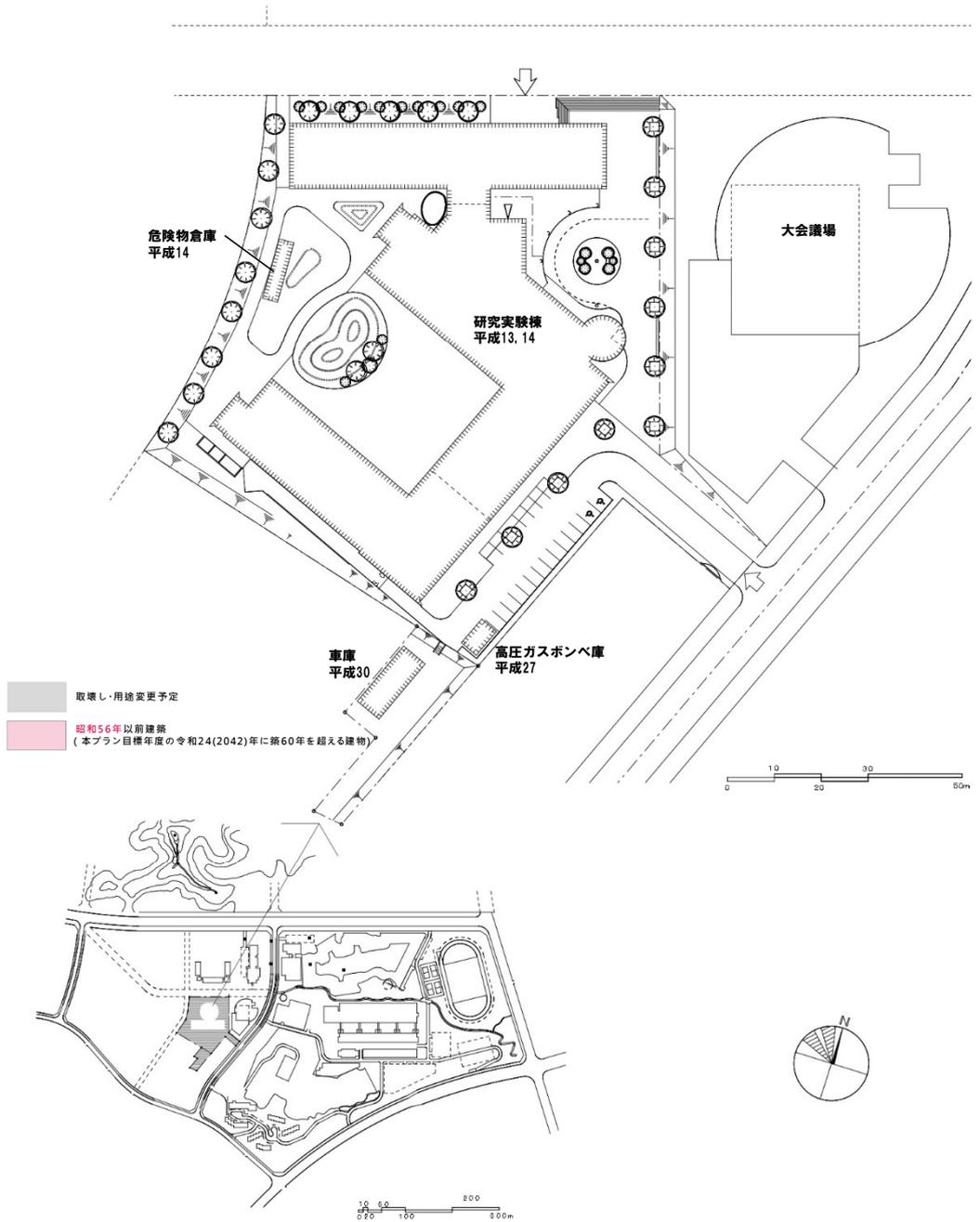
山を造成して作られたキャンパスには今も周囲を原生林が取り囲む。その内側には人工的に計画された樹木が配されている。緑と一体となった憩いの場の整備が必要。

飯塚 生活・情報軸

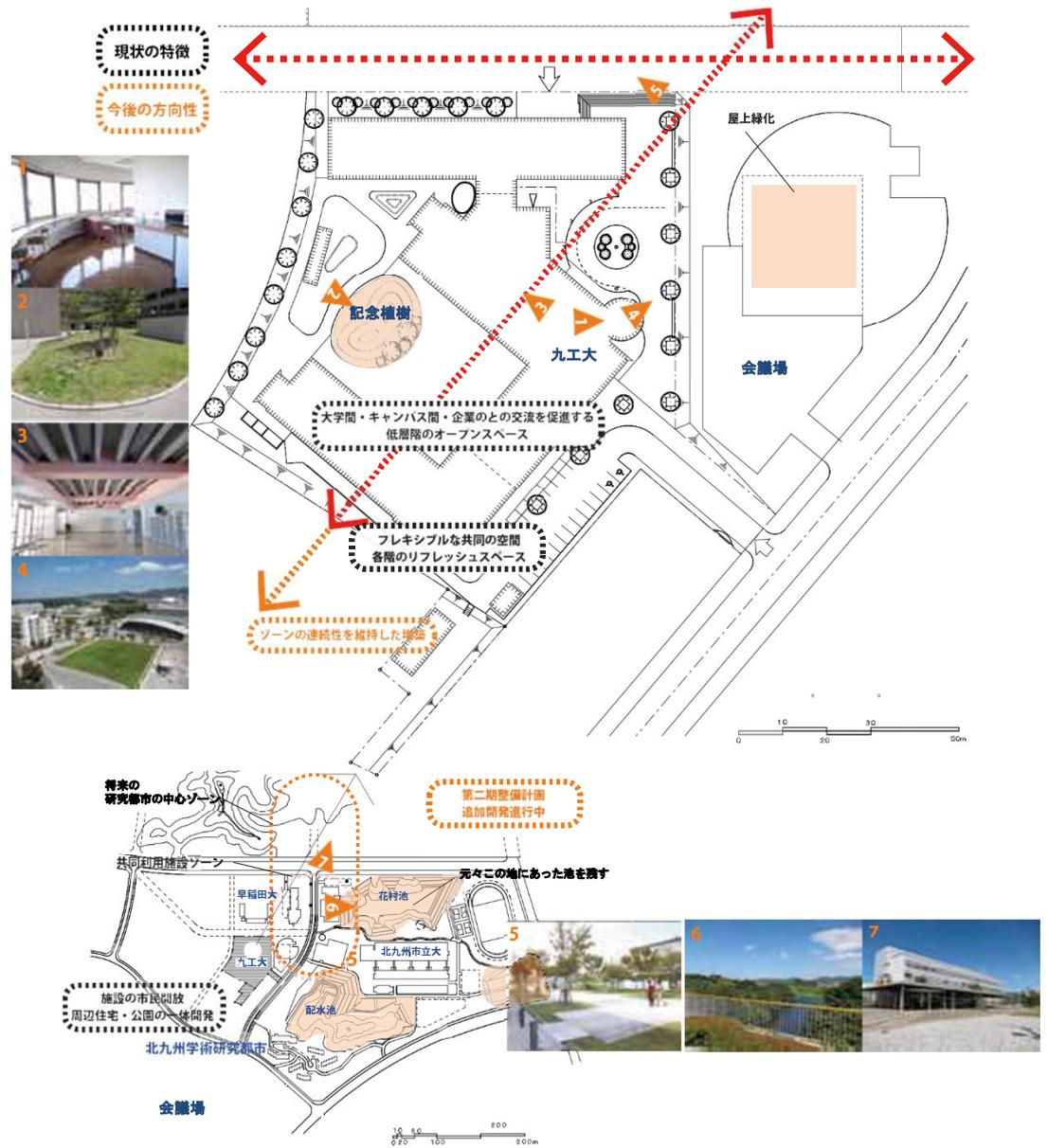


キャンパス内への公共交通機関乗り入れに伴う関連施設等の見直しを行い交通の利便性向上を検討する必要がある。コンパクトな学生の動線に対し、高低差を生かしながら大人数でもくつろげるたまり場のデザインがやや不足している。建物内もアクティビティが感じられる仕掛けとリフレッシュスペースを確保する必要がある。

若松 施設配置図

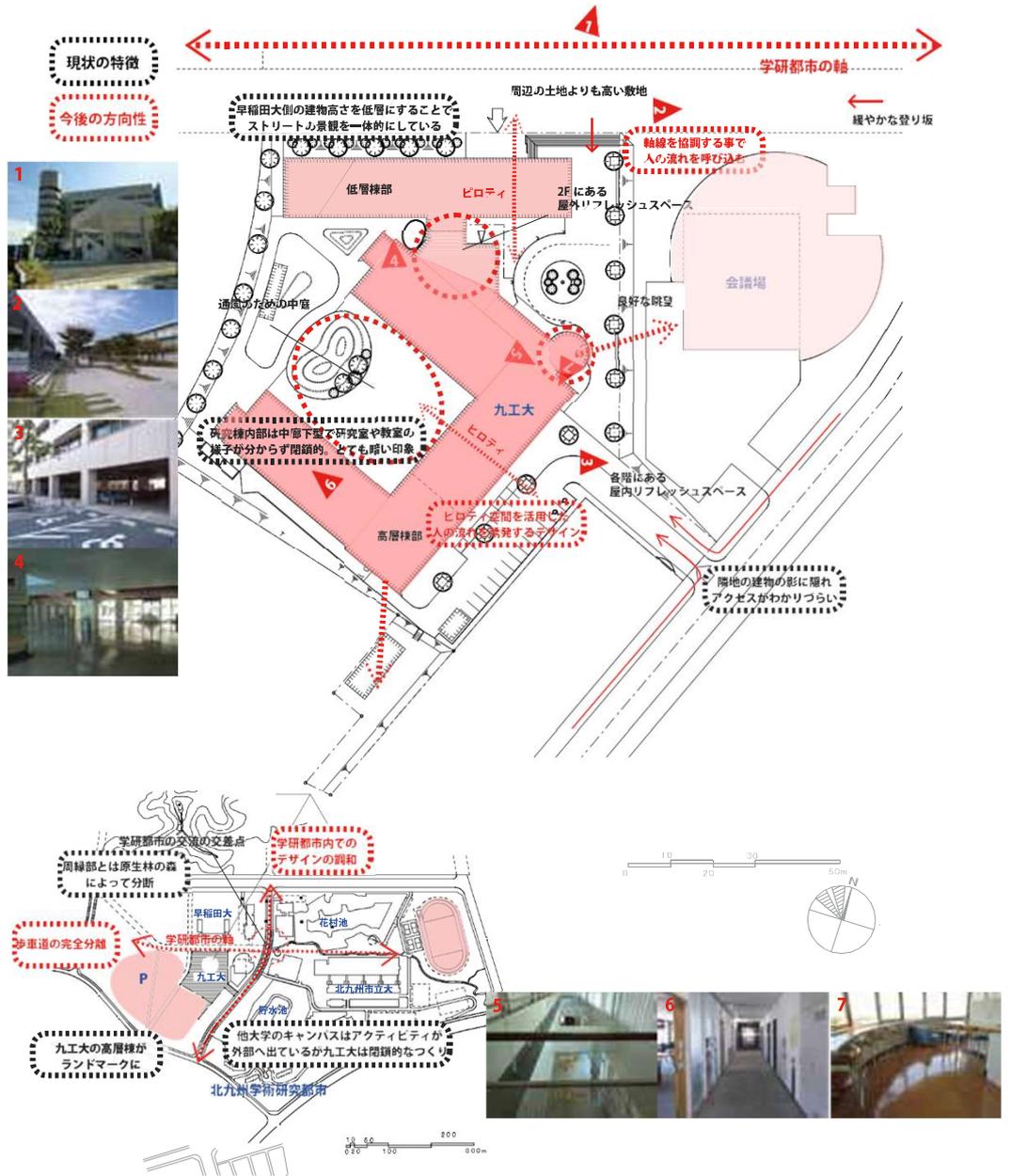


若松 歴史軸



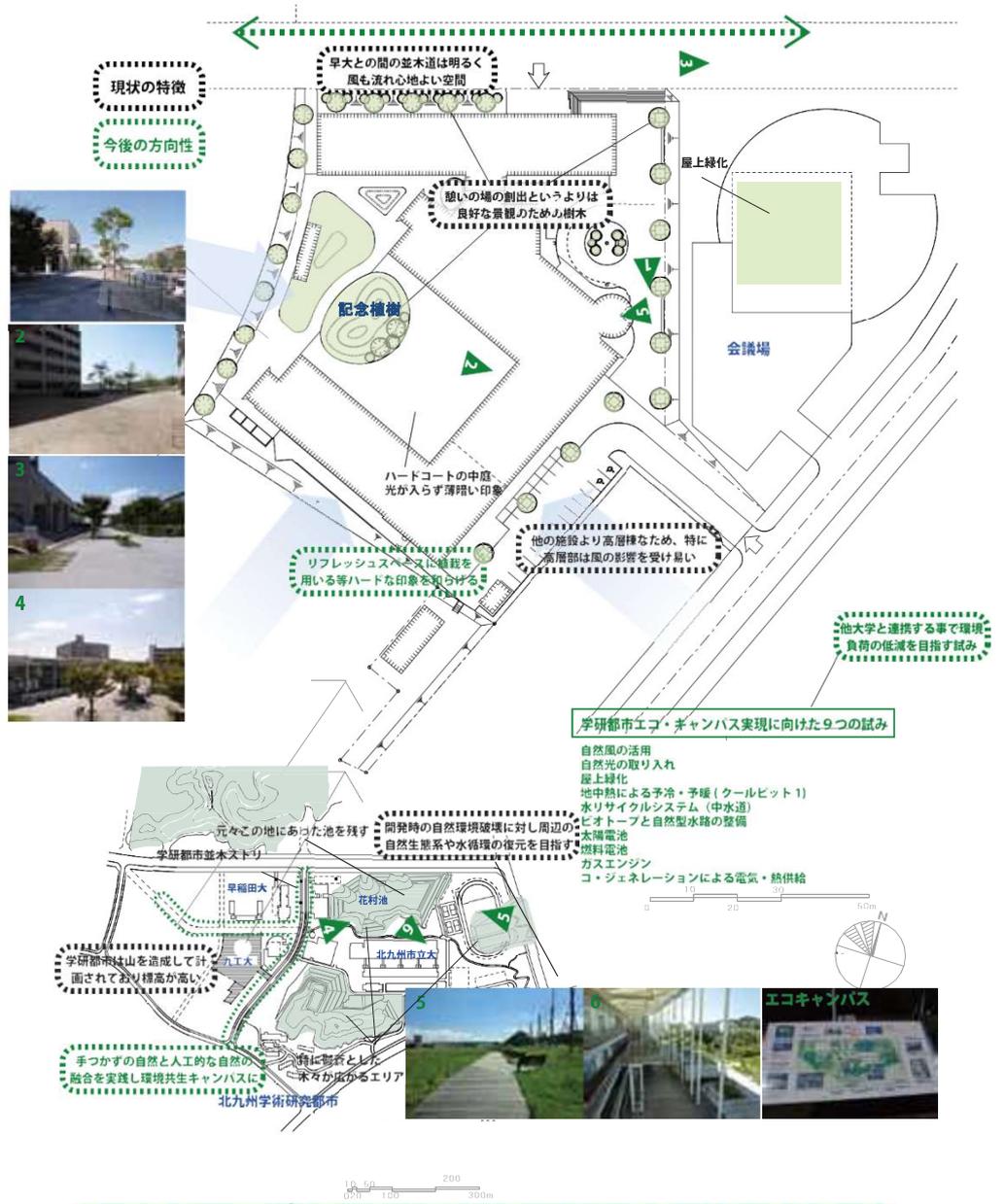
施設共同利用による先進的エコキャンパス。施設の市民開放・周辺との一体開発が学園都市全体の出発地点。住宅・公園の東・北側への追加開発も組み込んだ、よりフレキシブルな共同の空間を目指す。

若松 空間軸



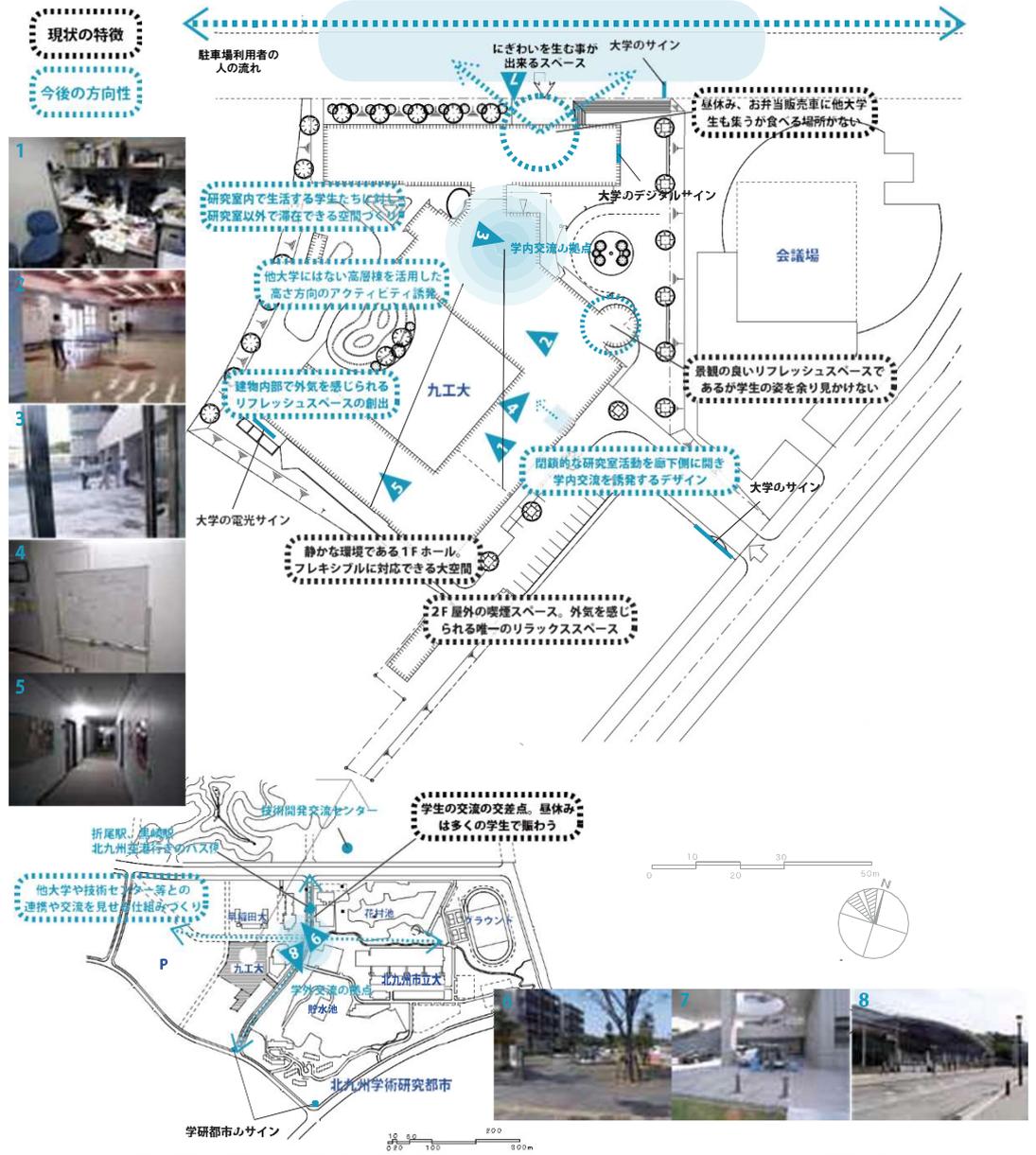
学研都市全体を見渡した一体化した計画によって、周辺地域との連携や交流促進を図る必要がある。周辺と敷地に高低差がある、開口部が小さい等、外部への繋がりを強化する空間づくりが必要である。

若松 自然軸



学研都市全体で環境共生をテーマに環境対策がなされている。他大学との連携を見える形として示す必要がある。学研都市全体で憩いの場も多いが九工大自体は反対に強風対策や交流の仕組み等の整備が必要である。

若松 生活・情報軸



学研都市全体で連携や交流を図れる仕組みづくりを目指す。研究室のオープン化とキャンパスのオープン化等、外部との繋がりを意識したデザインやアクティビティを誘発するデザインの整備が必要。

2-3-3. まとめ今後に向けて

九州工業大学の周辺地域とキャンパスの空間の分析をふまえた、今後に向けた課題を整理します。

戸畑キャンパスでは、長い歴史や「明専の森」の中心であることを活用するとともに、周辺地域とのつながりを深め、学生がより快適かつ自由に生活できるキャンパスづくりが望まれます。

飯塚キャンパスでは、高低差と深い緑が与える閉鎖的印象を解消し、周囲とのつながりをもたせることや、キャンパス内の垂直方向の複雑な空間構成の見直し、屋内外での憩いの場の充実などが重要です。

若松キャンパスでは、学研都市・周辺住宅地との調和・連携を図るとともに、キャンパス内のオープンな交流空間をより有効活用し、研究室間の交流を促進していくことが求められます。

	周辺地域との関係について	キャンパス内の空間について
戸畑	<ul style="list-style-type: none"> ■九州工業大学・明治学園・夜宮公園の一帯で「明専の森」としてのつながりを強化する ■周辺の環境・生態系を支える緑地空間としてキャンパスを維持・整備する ■周辺の商店街・住宅・学校や病院等との連携を深める、オープンな空間を整備する ■戸畑駅方面とのつながりを創出するための整備を行う ■近接する周辺地域とのつながりを深める周辺部・出入口整備を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ■建学からの歴史を残す正門周辺のエリアを保存しつづける ■深い緑を維持しつつ、適切な管理と憩いの場への有効活用を進める ■天候に関わらず学生が集い、憩いや自由な活動に利用できる環境を整備する
飯塚	<ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスの存在を知らせ、アクセスを改善する ■閉鎖性を解消し周囲とのつながりをもたせる 	<ul style="list-style-type: none"> ■フロアレベルの分かりにくさを解消し、屋内外の空間をつなぐ快適な動線を整備する ■整備された芝生や緑を憩いの場としても活用する ■研究活動や人々の活気が感じられる屋内外のオープンなりフレッシュ空間を整備する
若松	<ul style="list-style-type: none"> ■北九州学術研究都市・一体開発された周辺住宅地との調査と連携を進める 	<ul style="list-style-type: none"> ■他大学キャンパスと調和し、人の流れを呼び込むデザインと空間利用の見直しを進める ■低層階や各階のオープンなりフレッシュスペースの利用率を高め、有効活用する ■研究室の閉鎖性を和らげ、学内交流を促す

2-4. 九州工業大学の価値観、想いとニーズ

本節では、インタビュー・対話（ワールドカフェやワークショップ）・ヒアリング・WEB アンケートから得た関係者の声をもとに、九州工業大学全体で重視されている価値観と、各キャンパスに対する想いやニーズを整理します。

2-4-1. 全学で重視されている価値観

■ 1: 技術者として、人として、成長できているか ■

九州工業大学では建学の理念を引き継ぎ、学生を一技術者としても、人間としても育てていくことが今日も重視されています。

— 学生を育てる学校なんで、どう言ったらいいのかな、基礎を叩き込むといたらいけないんですけど、その辺をやっぱり重視している大学ですよ。結局そのレベルまで達しないと卒業させないところはやっぱり、結構先生たちが強くやってる学校で。[教職員]

九州工業大学では、手厚い指導を通じて学生を技術者として養成しています。こうした教育方針は企業からも評価されています。

— 技術者を養成する国立大学として、九工大の存在は大きい。ものづくりの基礎から理解している学生は、九工大の他には多くない。[企業]

また、大学生活を通じ人として成長することの大切さも共通の価値観として捉えることができます。

— 建学の理念が『技術に堪能なる士君子』ということで、技術を教えるんじゃなくて人間を作るんだっていうね、他にはあまりない、こういう所を引き継いでいきたいよね。[教職員]

■ 2: 密接な人とのつながりがあるか ■

九州工業大学には、教員と学生が密接にコミュニケーションをとる家族的教育の伝統があります。今日でも、人とのつながりのなかで成長していくことが重視されています。

— 先生と学生の日頃からの付き合いが深かった。専門分野に限らず様々なコミュニケーションをとっていた。[卒業生]

— いろいろな人との関わり合いが面白かった、～そういうことで世間がいろいろと広がるよ、っていう経験をしているものですから、～人と人とがちゃんとコミュニケーションがあって、そこで役割分担が出来てきて、物事って始まるんで。そこはどんなことでもいいから体験しておかないと。[教職員]

— 社会に出て、九州工業大学で学んでいて良かったと思うことがしばしばあった。お互いの連帯感がとてもすばらしいと思っています。[卒業生]

— 一方、研究室配属前の学部1～3回生からはこの伝統に相反する現況が語られています。今後、伝統の再興を含む、そのあり方について議論や検討が必要と考えられます。

— 先生と生徒の隔たりがある、先生と仲良くなりたい。[学生]

— 学生と先生とのつながりを仲介する役割が必要。[教職員]

■ 3: ユニーク（唯一、優れる）か ■

九州工業大学は、コンパクトな工学系大学ならではのまとまりのよさを持っています。

—非常にまとまりがよくて、～理解をして頂ければとんとん拍子に行くというのがうちの大学の特長だと思います。[教職員]

—そんなに大きな大学じゃないので、割と風通しがいい、っていうか。学長がこうやりたい、っていうのが末端まで来てできるっていうところがありますね。[教職員]

こうした構造的長を背景に、他大学にはないユニークな取り組みにチャレンジすることが重視されてきました。他大学に先駆けて全学で実施したスペースチャージ制度はその一例です。

—スペースチャージ、部屋料を取るんですよ。～全学的にやっているところがないんだったら、うちの大学で何とかやろう、っていうことですね、これはかなり苦労したんですけど、学長に全面的にバックアップしてもらってですね。[教職員]

■ 4: 人や社会の役に立つ実践を行っているか ■

九州工業大学は、国家への利益還元を目的に産業界の出資により創設されました。こうした背景から、人と社会の役に立つ実学志向の技術開発・ものづくりが重視されています。

― うちの産学連携、あるいは地域産業界、もともとの設立の主旨もそうだったじゃないかと。日本で唯一の産業界が資金を出して、それが国立大学になった、唯一の大学。だから、実学志向なんですよ、もともと。[教職員]

― アカデミア追求という話をし始めるとね、世の中に使ってもらおうか、使ってもらえないかっていうのはもう二の次だっていう話のこともあったりするんですね。～そこもやっぱり多様性だと思うんですが、形だけのものを、金をつぎ込んでどんどん作っていくのは反対なんで。反対だから、もうちょっと使えるものを、ちゃんと使える形で実現しろよ、って話だと思うんですよ。[教職員]

また、多くの学生が、ものづくりの実践に九州工業大学らしさを感じる一方、近年の実践性低下を懸念する声も聞かれます。今後、人と社会への貢献に向けてものづくりを実践する九州工業大学らしさが続く仕組みの構築が重要と考えられます。

― みんなが何かを「つくっている」ところが九工大らしい。[学生]

― 見ているだけでいい人が増えている。[教職員]

■ 5: 社会と対話できているか ■

九州工業大学では、社会を実感し、社会と対話する環境のもとで教育研究活動を行うことが重要視されています。現在、PBL（Project-Based Learning：課題解決型学習）やインターン等、社会を実感する教育機会を提供しています。一方で、学生や教職員からは、社会との交流を望む声が聞かれるなど、より一層の強化・充実が必要と考えられます。

—自分の研究活動が社会にどう役立つか、リアルに知りたい。[学生]

—研究室で社会人の人とも一緒に学びたい。[学生]

—専門外の人からの素朴な疑問が研究の起点になる。[学生]

■ 6: その土地に根ざしているか ■

九州工業大学では、各キャンパスが立地する地域（戸畑・飯塚・若松）の暮らしや産業に根ざして活動することが大切にされています。特に、戸畑、若松では、歴史ある工業地帯に根ざす琴が産学連携などの取組みにつながっていると認識されています。

—ここは北九州という地域性が強いんですね。いくら産学連携と言ったって、周りに産業が発達していなければ、やはり、ここは元々工業地帯というか、そういう歴史から来ていますので、そういうことで、連携も非常に上手くいっているんだなあ、産学連携が強いのってのは。[教職員]

また、飯塚市は「大学無しに飯塚はない」と考え、さまざまな大学支援を行っています。まちづくり活動経験のある学生も地域との関係性を肯定的に捉えています。

—飯塚はよそ者を明るく迎え入れてくれる風土があった。地元でまちづくり活動に関わっていても、気持ちのいい人が多かった。[卒業生]

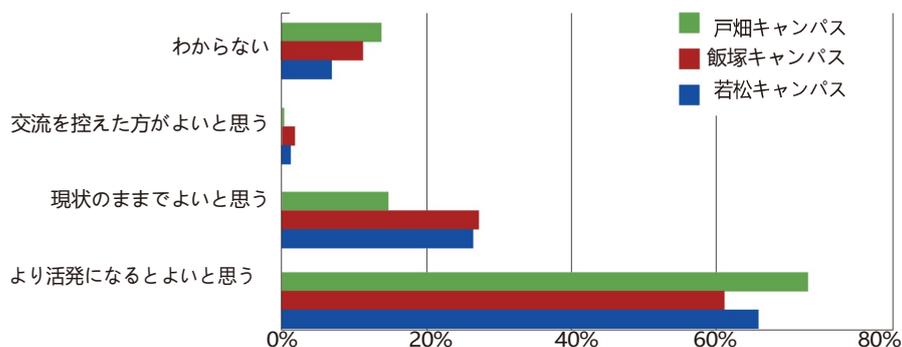
一方、地域にとって九州工業大学はまだまだ敷居の高い存在として捉えられています。今後、大学がより土地に根差していくためにはオープンな交流の機会など、関係性構築のきっかけを創出していくことが重要と考えられます。

—地域にとって九工大は、何をしているか、連携が可能なのか、まだまだ分かり難く、敷居の高い存在。[自治体職員]

—Facebookなども使って、敷居を下げて、気軽に大学と地域のコミュニケーションがしたい。[企業]

—国・世代・企業・地域などにとらわれない、徹底的にオープンな環境を作って欲しい。[卒業生]

キャンパスと周辺地域との交流は、今後どのようにになるとよいと思いますか？



■ 7: 学内外での幅広い交流があるか ■

九州工業大学では、学内外での幅広い交流を行うことが重視されています。

—(所属する)サークルは結構いろんな人が入っていますので、魅力的でしたね。いろんな話を聞けるというのもありますし、上下の関係っていうのはこれから絶対ためになると思いますし、いい経験だと思うので。研究室でも上下はあるんですけど、研究だけでなく遊びとかも、幅が広いので、いろいろな事を経験したいと思いますので、学生のうちにですね。[学生]

—(若松キャンパスで実施された、4つの研究室に所属する取り組みを経験した学生について) たくましいんですよ。柔軟にものを考えられるんですね。違う感覚の先生と密接に接して学んできた、っていうのが影響すると思うんです。[教職員]

一方、学内外・キャンパス間のコミュニケーション不足が挙げられるなど、現状では幅広い交流が十分に行われていない、との声も多く聞かれます。今後、キャンパス間、研究室間、学生・教職員間の学内コミュニケーション、他大学や地域との学外コミュニケーションの促進が必要と考えられます。

—戸畑に友達が通っているんですけど、なんかもう全然別の学校、みたいな感じで。～基本的に関わりはなくて、学校の話聞いてても、なんか全然違う感じがしました。[学生]

—他学科、他の研究室が何をやっているか全くわからない。[学生]

—内輪のコミュニケーションに終始しがち。[学生]

—つながり・コミュニティに飢えている。[学生]

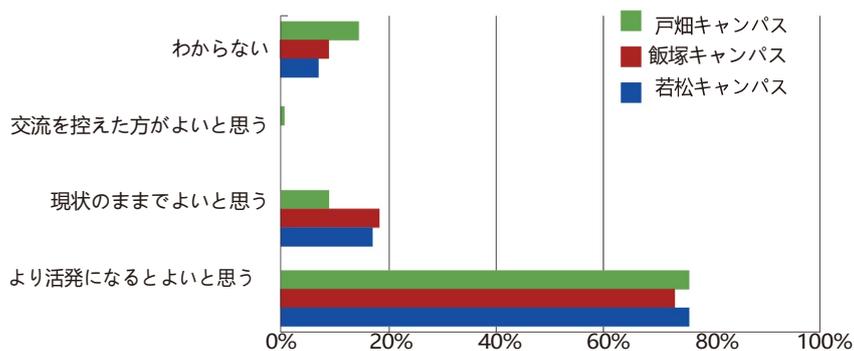
—どこともつながりがない、飯塚は孤島のような。[学生]

—北九大・早稲田大とのつながりが薄い。[学生]

—学生と接しコミュニケーションする機会がない。[教職員]

—キャンパス間交流がない。[学生]

3 キャンパス間の交流は、今後どのようにになるとよいと思いますか？



■ 8: 自らの魅力を知り、外部へ発信しているか ■

九州工業大学では、学生や大学など、各々が自らの魅力を積極的に発信することが重要であると考えています。現在は、学生に対しては、力はあるものの、地味で自己表現が苦手であるという声が多くあります。学生が自らを知り、表現する力を獲得するための支援が重要となっています。

—学生さん達が横並びというか、活動的ではない。非常に均質なんです。[教職員]

—学生は地味だが、まじめで力はある。でも、もっと外に出て自己表現を学ぶべき。[卒業生]

大学に対しては、教育・研究・社会貢献の各分野で特色ある取組を行っていながら、うまく伝えることができていないという声が多く寄せられています。特に WEB アンケートの中では、卒業生から外部へのアピール強化を望む声が多く寄せられました。今後は、大学全体としての統一的なブランド・広報戦略のもと、情報発信を行っていくことが重要と考えられます。

—大学ではすごいことをやっているけど、アピール下手・アピール不足。[学生]

—大学がどんなことをやっているのかそもそもわからない。[学生]

—もっと外に向けた PR 活動を強化してほしい。外部から見ると、大学の姿がほとんど見えず、どんな大学かがわからない。[卒業生]

—関西に住んでいますが母校からの活動が聞こえてきません。
メディアへの発信を積極的にお願いします。[卒業生]

—大学としての統一性って何もないですね。だから、大学の売りはなんですか、って言う時に、それでは売れない、というかですね、だから実は、これは大学としてのひとつ大きな悩みなんです。[教職員]

■ 9: 多様性があるか ■

九州工業大学では、多様な属性を持つ人や、考え方が共存・共生することが重要視されています。あわせて、多様な環境で学び、人としての幅を広げることが望まれています。

—多様性の中からもいろいろな新しいアイデアって出てくると思うんですよね。古くなるとだんだん多様性がなくなってきた。本学はね、多様性が高い方だと思うんですよ。先生方の出身校を調べてみると九工大出身者の比率って低いんですよね。～多様性があったら、一緒に何かをやる、というのが非常にいい組織だと思います。[教職員]

—いろいろな所の人がおること、絶対。～これはもう絶対、心掛けないといけないです。無理矢理掘り出してでもその組み合わせにはしておかないと。[教職員]

—情報工学部には色んな、多彩な分野の先生がおられますね。非常にそれがまた面白いんですよね。～そういうところは伸ばしていく必要があるんですよね。多様性というの、今後、情報工学部としても強みとしてアピールする必要があると思いますけれども。[教職員]

—いろいろな文化に接する機会が少ない。[学生]

—女性や留学生など、人の幅を広げ、多様化して欲しい。[学生]

—今の学生は本当におとなしい。モノをいわない。九工大生は自己PRが下手。人付き合いが狭く、話題が足りないのでは。学生のみならず、大学もPR下手だ。[卒業生]

—自分で新しいことをはじめ、個性や積極性を持った学生が少ない。[教職員]

■ 10: すき間（多様な活動を支える自由度）があるか ■

学生が自由に過ごしたりチャレンジするための時間や空間の存在（すき間）が重視されています。

一方で、タイトな時間割やキャンパス管理など、時代とともにすき間が減ってきている、と感じる声が聞かれます。今後、学生が、自分の関心を持ち、それに熱中することを支える「すき間」の提供が望まれます。

—最近では、学内でバーベキューをしようとしたら、届け出て許可を得ないといけなくなっています～昔はもう、そういうことは全然関係なくって、騒音とかを出して、学内の他の研究室とかに迷惑をかけなければですね、花見とかも木の下とか、学内でいろいろとやっていたんですが。[教職員]

—厳しい時間割や、居場所の不足のため、学生に大学生らしさを感じられない。[教職員]

—学生の自由な個人活動をもっと後押しして欲しい。[学生]

—戸畑のものづくり工房のような自由に使える場所が欲しい。[学生]

—みんなの居場所・休めるスペースがあったらいい。[学生]

■ 11: 九工大でよかったと感じられるか ■

九州工業大学では、九州工業大学に関わる全ての人が、九工大に来てよかった、九工大でよかった、と感じられることが、大学の理想的な姿のひとつとして描かれています。九州工業大学との関わりが肯定的経験として印象づけられることは、ひいては大学への愛着となり、将来、大学に価値が還元される可能性となります。これは「(社会への)価値の還元」という九州工業大学の建学理念に通じるものであり、九州工業大学のアイデンティティと密接に関係する価値観であるといえます。

—教員からしてみると、九工大で仕事できてよかった、学生にしてみたら、九工大に来てよかった、っていう思いが最後にあるってことが大事かなと思いますね。～自分がこの九工大に限られた時間とか与えられた時間過ごしてきたことに対して、あー、自分が九工大でこの時間を過ごして来てよかったと。[教職員]

—たとえば、職員の方でも学生の方でも一緒だと思うんですけど、入ってきて、出ていくまで、あるいはその、そこにおられる間に、多分自分として納得ができる、それは例えば、自分の、自己を成長させたい人だったら、自分が成長できたな、と分かるとかね。[教職員]

—ここの大学の学生っていうのはですね、卒業した後にですね、後輩がいると、その間くらいは必ず帰ってくるんですよ。季節季節に帰ってくるんですよ、研究室にですね。そういう、愛着心みたいなのが強くてですね。[教職員]

2-4-2. 各キャンパスへの想いとニーズ

各キャンパスに対する関係者の想いとニーズについて、長期的に対応が求められるものと、短中期的に対応が求められるものに分け整理します。なお後者については、主に中期プラン（12年程度の施設・環境の整備計画）において対応を検討します。

■ 戸畑キャンパス ■

□ 長期的対応が求められるもの □

歴史の継承

戸畑キャンパスは、100年以上の歴史を備えており、その継承に対して強いニーズがあります。歴史は、キャンパスに風格を与え、卒業生にとっては保存された施設や景観が学生時代と今をつなぐものとなり、地域社会にとっての資産にもなります。継承に向けた明確な方針が求められます。

—ここは伝統があって～主要な建物は無くなっていますが、一応、門であるとか、守衛所は、建物が出来た当時のものだと聞いていますんで、そういうものがきちっと残っているっていうのかその、そういうものがどっかにちゃんと見る人が見たら、ああここにちゃんと残っているんだな、っていうのが結構大事だと思うんですよ。[教職員]

—戸畑キャンパスの卒業生ですが、在学中の建物が一部を除いて、殆ど全ての建物が撤去や建替えられたが、昔の教室や学生寮等が撤去や建替えられたとしても、以前の建物の遺構の一部でも残っていれば、OBにとっては昔を思い出し、懐かしむ事が出来、癒されます。しかし何も残っていないと、非常に寂しい思いが致します。今後は、出来るだけ多くの建物の一部を残すとか「ここに何々が有った」等の歴史的表示板を設置する様にして頂ければ、良いなと思います。[卒業生]

—九工大は「文教のまち」戸畑のシンボル。歴史ある建造物・景観を今後も守ってほしい。
[自治体職員]

明専の森の継承と管理

戸畑キャンパスの緑は、明治専門学校時代から、「明専の森」と呼ばれ、地域に親しまれています。松やクスノキが多く、クスノキが多いは樟脳の研究に使用していたことに由来します。そうした大学の歴史とともに残ってきた「明専の森」は、学内外の人々にとってキャンパスと地域の象徴になっています。今後も保全・継承していくことが求められます。

—（「明専の森」の背景には）やっぱり歴史的なものがあって、周りの住民の、もうおじいさんたちから見ると、明専の森っていうのは原風景ですよ。[教職員]

—このキャンパスがいいのは、緑が多いんですよね。相当古い木もいっぱいありますし、そういう意味で落ち着いた雰囲気の良いキャンパスができています。～落ち着いた木の感じというのは時間が経つしかない、待つしかありませんので、お金では買えません [教職員]

—地域周辺のオアシス的な、環境に気を使ったそれこそ「緑の森」そのものになって欲しい。子供連れの親子が散歩できる、地域に溶け込んだ大学になって欲しい。[卒業生]

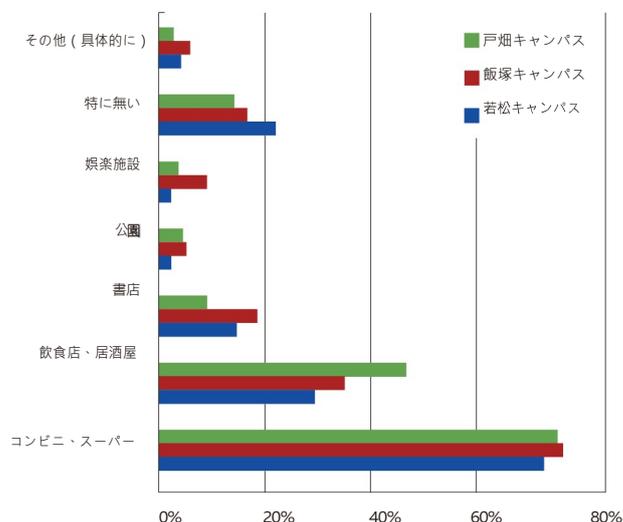
—一方で、豊富な緑の維持管理に十分手が行き届いていないという問題があります。緑を保全し、価値を高めていくための仕組みづくりも必要とされています。

—緑が沢山なのに、全く整備されていない。大きな木なども台風の後には枝が散らばり放題、草は生え放題。見せる努力をしていない。～管理をするのに、学校全体でこの地区の緑地としての価値を見直し、どうすれば学校全体で価値を高めていけるか、考えた方がよい。～定期的にボランティアを募り、～積極的に学校活動にかかわるようにすれば、業者に頼むよりコストもかからずに美化が実現できるのではないか？[教職員]

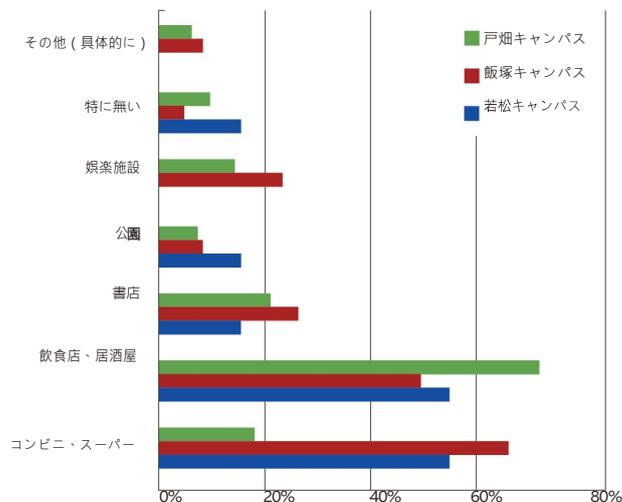
街との共生

戸畑キャンパスは住宅地に囲まれ、最寄り駅から正門までの通学路には商店街があり、地域と密接した位置関係にあります。1910年代から1930年代にかけての北九州工業地帯の発展に伴い、周辺地域には企業の社宅等が多く立地し活性化しました。しかし1940年以降、北九州工業地域における重化学工業産業の衰退とともに人口流出と高齢化が進んでいます。アンケートの結果によれば、以前の九工大生（卒業生）に比べ、現在の学生・教職員では、飲食店・居酒屋、書店、娯楽施設などをよく利用する人の割合が減少しており、周辺のまちとの関わりが薄くなりつつあることを示唆します。

<学生・教職員>キャンパス周辺であなたがよく利用するところはどこですか。(複数回答)



<卒業生>在学中、キャンパス周辺の地域でよく行っていたところはどこですか。(複数回答)



一方、まちの中にあるキャンパスとして、周辺の地域との結びつきを深め、ともに地域を活性化していくことが学内で望まれています。また、一部の学生は、地域の自治会の祭りのお手伝いをするなど、地域との関わりをもっています。そうした学生との関わりは、高齢化の進む地域の中で強く求められています。

—このキャンパスは街の中にあるんですね。だから、大学の理想としてはですね、やっぱり、街との共生っていうかですね、そういう形に持っていければ一番いいな、って思うんですね。このキャンパスはそれが出来ると思うんですよ。[教職員]

—九工大に対して私、らしさも含めてね、一番不満なところはね、近隣の街が発達していないこと。～やっぱそこの、近隣も栄えないとね、～学生の街が育ってないことが、私一番不満なんです。[教職員]

—学生さんとはこれからも関わりを持って、こちらからも働きかけて、いろいろな活動をしていきたい。高齢化が地域で進んでおり、地域の高齢者の方は学生さんと話す機会があるとうれしいと思う。[地域住民]

□ 短中期的対応が求められるもの □

駐輪マナー・駐輪所配置の改善

戸畑キャンパスでは、その敷地の広さから、建物間を自転車で移動する行動が見られます。結果として、各建物の入り口付近に多くの自転車が止められる状況が発生しています。今後、マナー向上などソフト面と、行動特性を考慮した設備などハード面の両面からの改善が必要と考えられます。

福利施設（食堂・売店・憩いの場等）の充実

戸畑キャンパスでは、食堂や売店、体育館など、福利施設そのものは揃っているものの、老朽化などから、質の向上を求める声が多く聞かれます。

—軽食・カフェなど話ができる場所がほしい。[学生]

—トイレの清潔さを高めてほしい。（トイレの清潔さは大学の第一印象にもつながる）[学生]

全天候型の課外活動施設の改善・拡充

戸畑キャンパスは独立する複数の建物がキャンパス内に散在する構造特性上、建物間の移動や課外活動場所について天候の影響を受けやすい状況にあります。今後、建物間のモール（屋根付き動線）設置や、課外活動にも利用可能な全天候型の広間など、屋内外を含む、キャンパス全体の使い勝手向上が必要と考えられます。

—雨が降ると大変。（工大祭の）準備もできないし、本番の会場も変更しないといけない。ピロティなど雨でも作業できる場所もあるが、そんなに広くはない。[学生]

上記をはじめ、アンケート等で寄せられたキャンパスへのその他のニーズについては、中期プランの中で具体的な対応を検討していきます。

■ 飯塚キャンパス ■

□ 長期的対応が求められるもの □

飯塚市との連携

飯塚市では、学園都市・情報産業都市づくりに向けて、大学を中心にしたまちづくりを進めており、大学に対してさまざまな支援を行うとともに、学術的研究のみならず、まちづくりや産学連携の分野においても大きな期待を寄せています。

—大学無しに飯塚はない。大学で学ぶ学生にも、飯塚に来てよかったと思って欲しい。まずは飯塚を知ってもらい、その上でさまざまな活動に加わってくれればと考えている。[自治体職員]

—九工大に要望したいのは、医工連携を進めてもらうこと。さらに、観光や、中心市街地活性化など、まちづくりにおいてもITの活用に協力いただくなど、力を貸していただきたい。日本でここだけ、という取組みが出来ると良い。そのためには積極的にバックアップする。[企業]

九州工業大学の学生も、積極的に地域のまちづくり・ボランティアに関わっています。お互いが支えあう飯塚市との連携は、今後も九州工業大学にとって重要なものです。

—地域に愛着がある。[学生]

—大都市でない飯塚だからこそ、地域の人と交流しやすい。[学生]

外部とキャンパスをつなぐ仕組みづくり

飯塚キャンパスは、JR新飯塚駅から車で10分程度を要し、飯塚市の中心市街地とも離れた位置にあります。また、戸畑・若松キャンパスともそれぞれ41Km、34Km離れており、移動に時間を要します。こうした立地環境から、外部からの孤立感を訴える学生の声も聞かれます。学生の学びを活性化させるためにも、他キャンパスや周辺地域とのつながりを強化する仕組みづくりが求められます。

—どこともつながりがなく孤島のような。[学生]

—キャンパス間の交流がない。[学生]

□ 短中期的対応が求められるもの □

キャンパス案内・サインの改善

飯塚キャンパスは、当初から明確なゾーニングのもと建設されているものの、初めての来校者や不慣れな人に対する案内が不足しているとの声が聞かれます。今後、地域（飯塚市）との連携を強化するうえでも、キャンパス内の案内機能を改善する必要があると考えられます。

— 正門から入った、あるいはバスや車でアクセスしたときに、どこからはいつどこに行ったら何があるのか、全く想像がつかないですよ、飯塚は。[教職員]

— 駐車場はどこでとめたらいいのか、飯塚ではすぐにはわからない。[地域住民]

課外活動施設の改善・拡充

飯塚キャンパスは、授業、研究、食事、購買など、用途・目的別に施設が整備される一方、学生の自由な活動に対応し得る施設が不足しているとの声が聞かれます。近年整備された未来型インタラクティブ教室「MILAI S（ミライズ）」に対する学生の評価が高いことから、今後、機能的かつ自由度の高い空間の提供が必要になると考えられます。

— ものづくりセンターのような自由に使える場所がほしい。[学生]

— 全ての教室が「MILAI S（ミライズ）」だったらいいのに。[学生]

キャンパスゲートの見直し

現在、飯塚キャンパス正面口は歩車分離され、自動車入退場路にはセキュリティゲートが設置されています。歩行者は自由に出入りできるものの、外部に対してキャンパスは非常に閉鎖的な印象を与えており、卒業生や地域住民からは、「ゲートができてからキャンパスに入りづらくなった」という声が寄せられています。今後、飯塚市（地域）との連携を強化していくうえでも、ゲートの設置位置を外部から見えにくい場所に配置するなど、セキュリティレベルを維持しつつ外部に与える圧迫感を軽減するなどの工夫が必要と考えられます。

上記をはじめ、アンケート等で寄せられたキャンパスへのその他のニーズについては、中期プランの中で具体的な対応を検討していきます。

■ 若松キャンパス ■

□ 長期的対応が求められるもの □

北九州学術研究都市・他大学との連携

北九州市立大・早稲田大等の大学と企業・機関が集い、施設の共同利用などを行う北九州学術研究都市に位置する若松キャンパスでは、その特性を活かした取組みが重要です。例えば、九州工業大学・北九州市立大学・早稲田大学の3大学の連携大学院・カーエレクトロニクスコースのように、大学間連携を推進し、特色ある教育研究に取り組むことが考えられます。学術研究都市の運営団体である財団法人北九州産業学術推進機構（FAIS）も、更なる連携への期待を寄せています。

—3大学への期待としては、強みを持った人材の育成を、大学間連携の中で行うことができる。カーエレクトロニクスコースに限らず、出来る分野があればさらに連携を深めて欲しい。[FAIS]

一方、憩いの場作りや、実験設備の共同利用といった課題に対し、3大学とFAISが一体となり、より充実したキャンパス、ひいては、北九州学術研究都市の構築を行うことが重要といえます。

—3大学の学生が集まれるような憩いの場があればいいと思う。今は各大学内での交流の場しかほとんど無い。3大学でいっしょにFAISに要望するなどできるとよい。[教職員]

戸畑・飯塚との連携

現在、大学院のみが存在する若松キャンパスでは、学生の確保が重要な課題です。現在、学内他キャンパスとの協力関係を強化しつつ、安定的な学生の確保に取り組んでいます。

—今までは戸畑・飯塚の学生に若松を理解してもらう機会が少なかったが、徐々に戸畑・若松との連携を深め、若松を紹介する機会を増やしているところだ。[教職員]

階をまたいだ学内交流

大学院のみの若松キャンパスには、九州工業大学出身者だけでなく、さまざまな大学の出身者や、留学生が集っています。学生からは、「外からも入って来やすい」「多様性がある」大学だという声が聞かれます。

一方で、研究室でじっくりと研究に従事する時間が長いことから、「研究室の中のつながりしかない」「つながり・コミュニティに飢えている」という声も聞かれます。特に、学生の間では「～階の人」という表現が使われているように、階をまたいだ学内交流は希薄となっています。

若松のそなえる多様性を活かして教育研究を活性化していくため、より活発な学内交流の促進が求められます。

□ 短中期的対応が求められるもの □

交通アクセスの改善

最寄駅（JR 筑豊本線折尾駅）から学研都市へのバスの本数が少ないことを指摘する声が聞かれます。また、北九州学術学研都市は地理的に高台に位置することと、最寄駅からの道程が起伏に富むことから、自転車の利用も容易ではないことが伺えます。授業履修中心で定型行動の多い学部生とは異なる、大学院生特有の行動特性を考慮した交通アクセスの改善が必要と考えられます。

—バスの本数も少ないんですよね。だんだん本数も減ってきているんですよ。[教職員]

—（駅からキャンパスまではバスを利用している？）もう普段自転車です。まあ慣れれば・・・（苦笑）。最初は結構びっくりしましたが、まあ慣れたら大体 15 分くらいですか。～まあでもおかげで運動不足にならずに済みます。雨の日はもう家から車ですね。[学生]

福利施設（食堂・売店等）の充実

食堂、生協（売店）、カフェテリアなど、それぞれ北九州学術学研都市内に存在するものの、利用頻度や満足度はあまり高くないことが伺えます。また、日本人学生向け学生寮を要望する声が聞かれます。今後、必要最低限の都市機能として整備するに留まらない、学生や教職員が積極的に利用したくなる選択肢となり得るよう、現状施設の質の向上などが重要であると考えられます。

—生協とかカフェテリアとか、作られた場所になるので、学生が自主的に過ごすとか、あと溜まり場とかは作りにくそうな感じがしますね。噴水とかはなくて、ベンチとかが人工的に置かれているだけなので、～やっぱりちょっと、学生の逃げ場所が少ないのかなあ、それは出来た当初からも言われていて。[教職員]

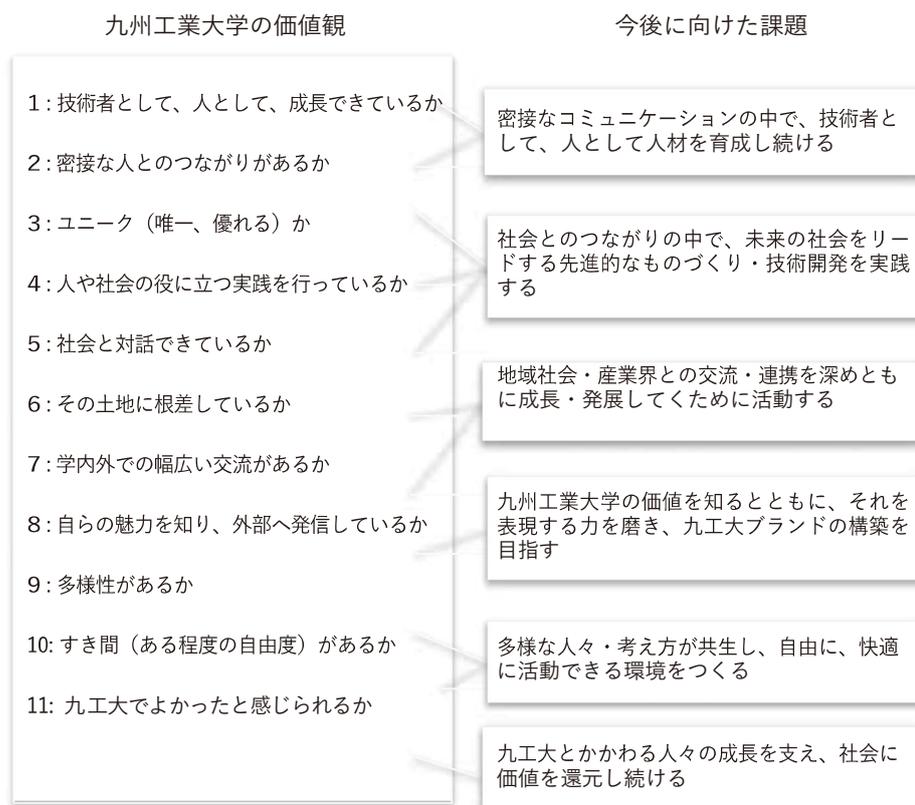
—まあ、普通ですね。そんなに悪くないけど。あそこで、食べることはあんまりこっちの人はないですね。弁当買ってる人が多いんですよ。昼になったら売りに来るんで。あとは、生協の方の弁当ですとか、それかって済ませる人とか、～たまにどっかに食べに行こうかって感じで車でいったりもするんですけど、～このすぐそばにも食べるところがないのも困るんですけど。皆なんか食べるところができたらいいのに、って言ってますけどね。[学生]

—留学生向けの寮しかない、（日本人学生も入れる）学生寮がほしい。[学生]

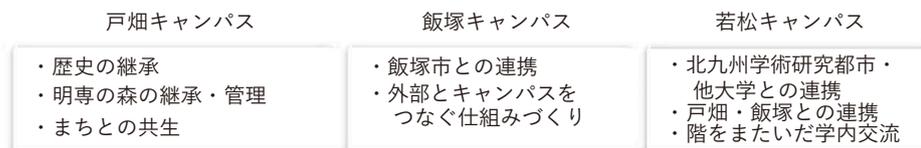
上記をはじめ、アンケート等で寄せられたキャンパスへのその他のニーズについては、中期プランの中で具体的な対応を検討していきます。

2-4-3. まとめ-今後に向けて

大学全体で重視されている価値観から、九州工業大学における今後に向けた課題を整理すると、下記ようになります。



また各キャンパスにおいては、次のような点を重視して長期的なキャンパスづくりを進めることが重要です。



2-5. 現状の課題整理とキャンパスマスタープランの方向性

2-5-1. 九州工業大学における現状の課題整理と基本方針の方向性

現状把握から導かれる今後の課題をもとに、キャンパスマスタープラン基本方針の方向性を検討します。3章にて、この方向性をふまえた基本方針を示します。

現状把握から導かれる今後の課題	基本方針の方向性	
<ul style="list-style-type: none"> ■大学の起源である、社会への価値還元を未来にわたって継続する [2-1] ■九工大とかかわる人々の成長を支え、社会に価値を還元し続ける [2-4] 	人々の成長と社会への価値還元	目標像
<ul style="list-style-type: none"> ■「技術に堪能なる士君子の養成」に向け、教育の伝統を引き継ぐ [2-1] ■品格と創造性を有し、志と情熱をもって社会に貢献する技術人材を養成する [2-1] ■学ぶ意欲、グローバル社会で活躍する力を育む教育を加速させる [2-1] ■密接なコミュニケーションの中で、技術者として、人として人材を育成し続ける 	未来を拓く技術者育成と人間形成	キャンパスづくりの柱
<ul style="list-style-type: none"> ■優れた研究成果を生み、融合技術や境界領域の創成につとめる [2-1] ■社会と接し、課題解決能力を育む実践型教育を加速させる [2-1] ■世界最先端の技術開発・社会をリードするものづくりを続ける [2-1] ■社会とのつながりの中で、未来の社会をリードする先進的なものづくり・技術開発を実践する [2-4] 	社会をリードする実践的教育研究	
<ul style="list-style-type: none"> ■地域社会との連携・調和につとめる [2-1] ■大学の社会的責任を重視する [2-1] ■産学連携・地域貢献の取組を継続・加速させ、社会と共生し続ける [2-1] ■アジアなど国際社会との結びつきを深め、優秀な留学生の獲得、教育研究の活性化につなげる [2-2] ■地域社会・産業界との交流・連携を深め、キャンパス全体にイノベーション・コモンズ（共創拠点）の場を展開し共に成長・発展してために活動する [2-4] 	社会と幅広く交流し共に成長する	
<ul style="list-style-type: none"> ■地域・世界との連携を深め、積極的に情報発信する [2-2] ■九州工業大学の価値を知るとともに、それを表現する力を磨き、九工大ブランド 	自らの価値を知り積極的に発信	
<ul style="list-style-type: none"> ■学生の課外活動における多様なチャレンジを支え続ける [2-1] ■人々が心地よく過ごすための環境施設づくりを継続・発展させる [2-1] ■留学生や社会人学生など、多様な人々を迎え入れ教育研究活動を持続的に展開する [2-2] ■多様な人々・考え方が共生し、自由に、快適に活動できる環境をつくる [2-4] 	多様な人と考え方の共生環境整備	

2-5-2. 九州工業大学各キャンパスにおける現状の課題整理

現状把握から導かれる、各キャンパスにおける課題を整理します。5章で示すフレームワークプランは、これらの課題をふまえて検討します。

	周辺地域・キャンパス外との関係について	キャンパス内の空間について
戸畑	<p>まちとの共生</p> <ul style="list-style-type: none"> ■北九州・関門・京築エリアなど北部九州での連携を深める [2-2] ■人口減少・高齢化する周辺住宅地や商店街のまちづくりを支える [2-2] ■周辺の商店街・住宅・学校や病院等との連携を深める、オープンな空間を整備する [2-3] ■近接する周辺地域とのつながりを深める周辺部・出入り口整備を行う [2-3] <p>市との協調</p> <ul style="list-style-type: none"> ■北九州市との「世界の環境首都」「アジアの技術首都」構想実現に向けた連携を深める [2-2] <p>明専の森の継承・管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ■緑あふれる文教のまちづくりの中核を担い続ける [2-2] ■九州工業大学・明治学園・夜宮公園の一带で「明専の森」としてのつながりを強化する [2-3] ■周辺の環境・生態系を支える緑地空間としてキャンパスを維持・整備する [2-3] 	<p>歴史の保全</p> <ul style="list-style-type: none"> ■建学からの歴史を残す正門周辺のエリアを保存しつづける [2-3] <p>憩いの空間整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ■深い緑を維持しつつ、適切な管理と憩いの場への有効活用を進める [2-3] ■天候に関わらず学生が集い、憩いや自由な活動に利用できる環境を整備する [2-3]
飯塚	<p>飯塚市・筑豊エリアとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ■筑豊エリアなど北部九州での連携を深める [2-2] ■飯塚市と連携したまちづくりの取組を持続的に展開する [2-2] ■飯塚市の経済活性化に向けて産官学連携等の取組を持続的に展開する [2-2] <p>外部とキャンパスをつなぐ仕組みづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ■キャンパスの存在を知らせ、アクセスを改善する [2-3] ■閉鎖性を解消し周囲とのつながりをもたせる [2-3] 	<p>わかりやすい空間・動線</p> <ul style="list-style-type: none"> ■フロアレベルの分かりにくさを解消し、屋内外の空間をつなぐ快適な動線を整備する [2-3] <p>にぎわいと憩いの場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ■整備された芝生や緑を憩いの場としても活用する [2-3] ■研究活動や人々の活気が感じられる屋内外のオープンなりフレッシュ空間を整備する [2-3]
若松	<p>北九州学術研究都市・地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ■北九州・遠賀・中間エリアなど北部九州での連携を深める [2-2] ■学術研究都市の良好な教育研究・生活環境の維持に取組む [2-2] ■北九州市との「世界の環境首都」「アジアの技術首都」構想の拠点としての役割を果たす [2-2] ■学術研究都市・一体開発された周辺住宅地との調和と連携を進める [2-3] <p>戸畑・飯塚との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ■学生確保や教育・研究で戸畑・飯塚キャンパスとの連携を深める [2-4] 	<p>人の集まる空間づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ■他大学キャンパスと調和し、人の流れを呼び込むデザインと空間利用の見直しを進める [2-3] ■低層階や各階のオープンなりフレッシュスペースの利用率を高め、有効活用する [2-3] <p>学内交流の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ■研究室の閉鎖性を和らげ、学内交流を促す [2-3] ■階をまたいだ交流を促進する [2-5]

CHAPTER

03

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

キャンパスマスタープランの基本方針

現状の課題をふまえ、2章で示した方向性をもとに、30年後に向けたキャンパスづくりの目標と、キャンパスづくりの柱となる考え方（基本方針）を示します。

3-1. 九州工業大学 キャンパスマスタープランの目標

未来の技術に出会うキャンパス

九州工業大学は、

関わるすべての人々の成長の起点となり、

社会に価値を還元するとともに、

未来の技術に出会えるキャンパスをめざします。

3-2. キャンパスマスタープランの基本方針



品格と創造性のある技術人材を育成するキャンパス

九州工業大学は、建学の理念にある「技術に堪能なる士君子」の養成を基本とし、すべての学生と教職員が志と情熱を持ち、産業を切り拓く技術者・知的創造者として成長していくことができるキャンパスをめざします。



先進的で実践的な技術・知識・能力を育むキャンパス

九州工業大学は、自律と実践を軸に、グローバルな視点で、実社会をリードする質の高い教育・研究を行うキャンパスをめざします。さまざまな領域でダイナミックにチャレンジし、先進的な科学に裏付けられた融合技術や境界領域の創成を行うキャンパスをめざします。



地域・国際社会・産業界と支えあい、成長しあうキャンパス

九州工業大学は、地域・国際社会・産業界と密な交流のなかで、自らに対するニーズや評価を知り、未来に向けて成長していくキャンパスをめざします。本学は産業界資本の国家への還元を目的に設立されました。今後も、ニーズや評価をもとに磨き上げた教育・研究の成果を地域・国際社会・産業界へ還元しつづけ、ともに支えあい、成長しあうキャンパスをめざします。



自らの価値を知り、世界に表現するキャンパス

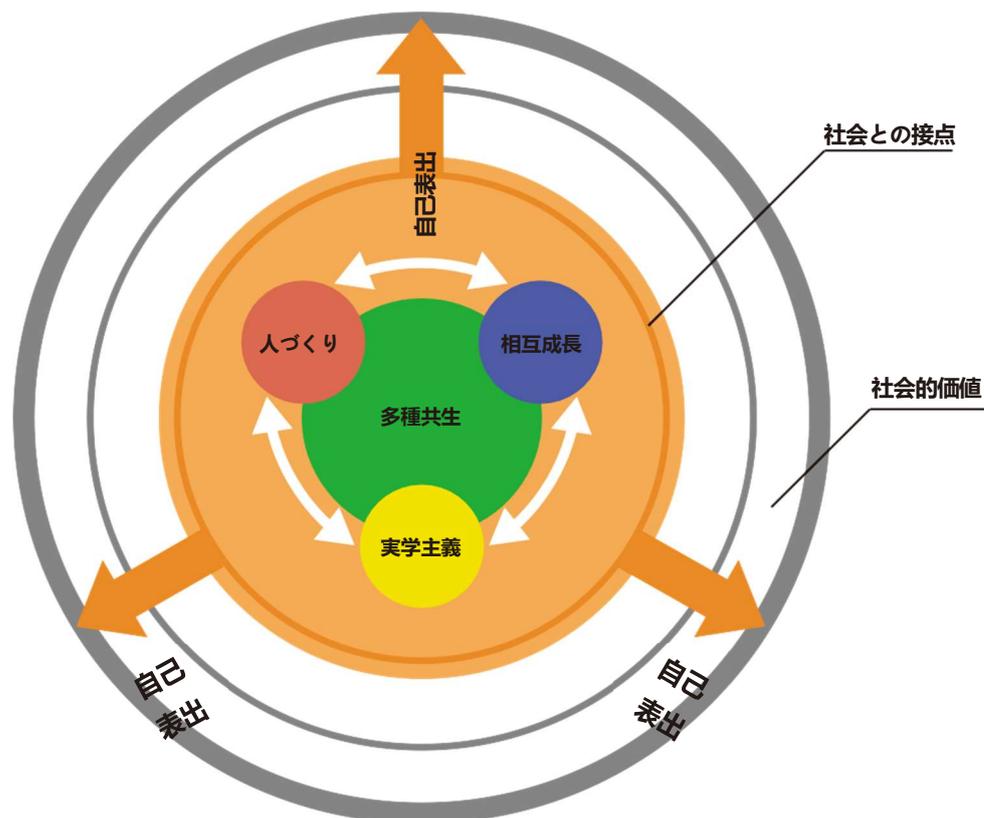
九州工業大学は、大学そのものはもちろん、学生、教職員が自らその研究や能力の価値と意義を把握し、社会へ、アジアへ、世界へ、積極的にプレゼンテーションしていくことのできるキャンパスをめざします。



多様な個の共生と挑戦をささえるキャンパス

九州工業大学は、多様な個性・考え方を受け容れるとともに、異なる視点や専門性をもつ人々が共生し、刺激しあいながら、人づくり、ものづくりに向けて新たな挑戦をつづけていくキャンパスをめざします。

基本方針の概念図



多様性を受け容れる**多様共生**の環境のもと、**実学主義**、**人づくり**、**相互成長**の3要素が作用し合いながら、社会との接点において、たえず積極的に**自己表出**を行い続けることから社会に還元する価値を生み出し、またその価値を大きく拡大していきます。

I 人づくり

品格と創造性のある技術人材を育成するキャンパス

九州工業大学にとっての「人づくり」とは

- ものづくりセンスをもって産業界を切り拓く技術人材を育てる。
- コミュニケーション力の高い、グローバルエンジニアを育てる。
- 先人に学び、共に学ぶことで、自らの活動に志と情熱をもってあたることのできる人材を育てる。

2 実学主義

先進的で実践的な技術・知識・能力を育むキャンパス

九州工業大学にとっての「実学主義」とは

- 社会（産業界）で活躍できる人材と技術をつくる、課題発見・解決型の実践的教育・研究を行う。
- 「あったらいいな」という社会や人々の望みを「使えるカタチ」で実現する。
- 常に産業界をリードする、先進的な研究・教育を行う。

3 相互成長

地域・国際社会・産業界と支えあい、成長しあうキャンパス

九州工業大学にとっての「相互成長」とは

- 地域・国際社会・産業界との接点を増やし、交流・連携のすそ野を広げる。
- 社会から見た自らの姿を知り、教育・研究活動を進化・深化させる。
- 教育・研究成果の社会還元に向けた、組織・体制のさらなる強化。

4

自己表出

自らの価値を知り、世界に表現するキャンパス

九州工業大学にとっての「自己表出」とは

- 大学の教育・研究、さらには自分自身の活動や能力の価値と意義を知り、自信を持つ。
- 伝える力を磨き、発信できるさまざまな場や機会を積極的に発見し、社会や世界と繋がっていく。
- 地域、産業界、世界に九工大を認知、理解してもらい、大学の価値を高めるための九工大ブランドの構築を図る。

5

多種共生

多様な個の共生と挑戦をささえるキャンパス

九州工業大学にとっての「多種共生」とは

- 多様な属性・考え方をもつ人々が自由に、快適に共生できる環境をつくる。
- 異なるバックグラウンドを持つ人々が集い、互いに高めあうことを支援する。
- 既存の型にとらわれない、新しい、多様な人づくり・ものづくりへ挑戦できる。

CHAPTER

04

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

キャンパスマスタープランの基本方針実現に向けたアクティビティ

人づくり・実学主義・相互成長・自己表出・多種共生という基本方針を実現するために、キャンパスで展開していくべきアクティビティを示します。アクティビティの検討には、学生・教職員の対話の中で生まれたアイデアを参考としています。本学では、これらをはじめとして、多様なアクティビティを支えるキャンパスづくりを進めます。

4-1・基本方針「人づくり」を実現するためのアクティビティ

基本方針「人づくり」を実現するための方向性

ものづくりセンスを育むために、ものづくりの現場や技術製品に触れるしくみと空間を充実させる

方向性に沿ったアクティビティ

- ものづくり（構想を形にすること）に特化した講座の開設
- 企業の製品開発者や卒業生などとの人材交流
- 共同作業に適した施設や什器の重点整備



共同作業に適した施設や什器の重点整備

基本方針「人づくり」を実現するための方向性

多様性から適応力を育むために、様々なコミュニケーションを誘発するしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 様々な人と対話できる機会と場所の常設化
- 複数の研究室を経験できる仕組み
- 学部・学科横断のクラス編成
- 学際領域に触れる・学ぶ機会の提供や空間づくり
- ユニバーサルデザインなど多様性受容に資する研究や施設の整備



ユニバーサルデザインなど多様性受容に資する研究や施設の整備

基本方針「人づくり」を実現するための方向性

志と情熱を持って取り組む心を育むために、先人の思いやプロセスや成果を学び、これからの課題を見つけ、課題解決にチャレンジするしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 九工大から生まれた技術や製品に触れる機会の創出
- 様々な分野の第一線で活躍する著名人との直接交流
- 授業や研究室の枠を越え、共に課題解決に取り組む仕組み
- 全学をあげてひとつのことに挑む取り組み



全学をあげてひとつのことに挑む取り組み

4-2・基本方針「実学主義」を実現するためのアクティビティ

基本方針「実学主義」を実現するための方向性

社会を学び、ニーズを知るための地域・国際社会・産業界と日常的に対話するしくみと空間を充実させる

方向性に沿ったアクティビティ

- 幅広く社会の声を集める・聴く活動
- 地域を舞台とした活動の展開
- 世界の協定校や企業など海外の人々と日常的に交流する場の構築
- 企業参加型 PBL など社会との直接対話機会の創出



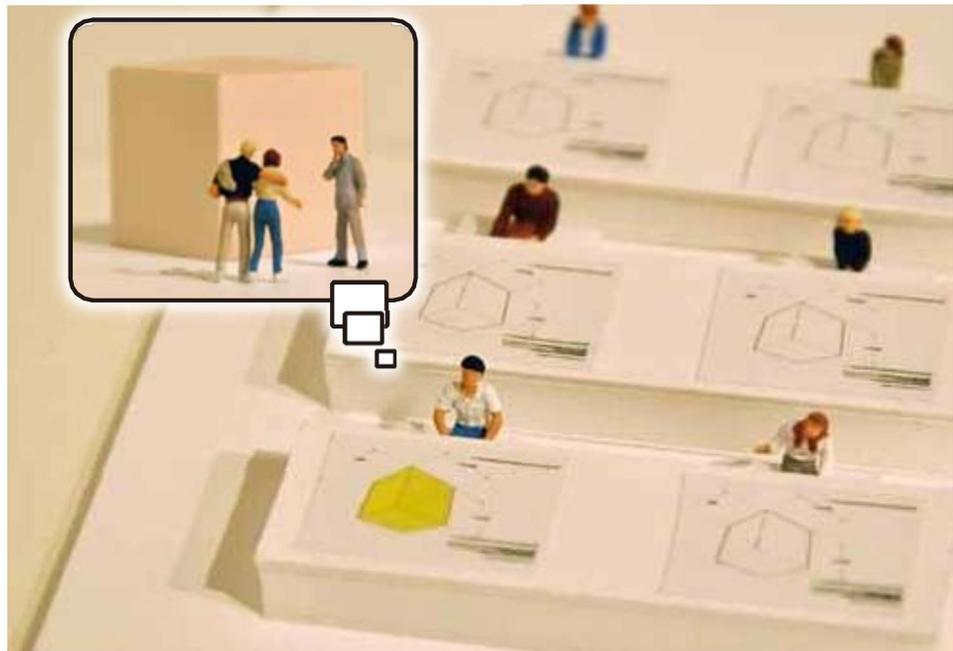
地域を舞台とした活動の展開

基本方針「実学主義」を実現するための方向性

研究成果をもとに、技術を使い、製品化するプロセスを実践できる社会空間をキャンパスに構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 研究過程・成果に対する経済インパクト評価の仕組みの構築
- 地域に資する研究成果の製品化にチャレンジする活動



地域に資する研究成果の製品化にチャレンジする活動

基本方針「実学主義」を実現するための方向性

全学協働で戦略的に境界領域・融合技術を創成し、社会にシーズを提供するしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 企業や行政などによる先端技術の実証実験への参加・場の提供
- キャンパス間合同プロジェクトなどによる学際新領域の創出促進
- 社会へのシーズ提供に向けた全学でのサテライトキャンパス活用
- 国際学会や技術見本市などへの出展促進による世界での連携開拓



国際学会や技術見本市などへの出展促進による世界での連携開拓

4-3・基本方針「相互成長」を実現するためのアクティビティ

基本方針「相互成長」を実現するための方向性

学内外の心理的・物理的な垣根を溶かし、親密な交流・連携を生むしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 地域交流を促すイベント活動やインフラ整備
- SNSなどインターネットを活用したコミュニティの運営
- サテライトオフィス誘致など企業を迎え入れる取組みの展開



地域交流を促すイベントの活動やインフラ整備

基本方針「相互成長」を実現するための方向性

社会からのニーズ・評価をもとに、新規の取組みや活動の見直しを柔軟に実施できるしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 企業などとの連携プロジェクトに柔軟に利用できる施設の設置
- 地域社会の課題解決に取り組む学生インターンシップの推進
- 多様性をもって課題解決する場の設置



企業などとの連携プロジェクトに柔軟に利用できる施設の設置

基本方針「相互成長」を実現するための方向性

全学の学生・教職員が幅広く社会との交流・連携の主体となり、持続的に社会へ価値還元するしくみを構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 人々の生涯にわたる学びを支えるサービスの充実
- 学生・教員・卒業生の出前授業など地域への主体的な価値還元
- 地域スポーツクラブなど世代を超えて人々が交流する場づくり



学生・教員・卒業生の出前授業など地域への主体的な価値還元

4-4・基本方針「自己表出」を実現するためのアクティビティ

基本方針「自己表出」を実現するための方向性

教育・研究の取組みや、一世紀超の歴史など、大学のあらゆる情報を整理、共有できるしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 九工大の歴史を学ぶコンテンツの開発
- 学生による大学公認メディアの企画・運営
- 産学連携や地域共同の実績と歴史に触れる仕組みの構築



産学連携や地域共同の実績と歴史に触れる仕組みの構築

基本方針「自己表出」を実現するための方向性

伝えるためのデザイン力、プレゼンテーション力を強化し、情報発信していくためのしくみと空間を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 学生による高校へのリクルーティング活動
- SNS活用などソーシャルスキル養成プログラムの開発
- 研究活動や成果を一般に公開する機会の創出



研究活動や成果を一般に公開する機会の創出

基本方針「自己表出」を実現するための方向性

大学が発信するイメージを統一するとともに、大学の魅力を伝え、価値を高めるためのコミュニケーション戦略を充実させる

方向性に沿ったアクティビティ

- 学生を含めた全学的な広報活動
- 研究成果のショールーム設置など主要都市での大学の魅力の発信
- キャンパスウォークツアーなど大学の魅力を体感する機会の創出



キャンパスウォークツアーなど大学の魅力を体感する機会の創出

4-5・基本方針「多種共生」を実現するためのアクティビティ

基本方針「多種共生」を実現するための方向性

多様な国籍・年齢・性別・身体的特徴をもつ人々が共に心地よく過ごすためのしくみと空間を充実させる

方向性に沿ったアクティビティ

- ユニバーサルデザインを含む福祉工学領域への取り組み強化
- 各キャンパスの災害時地域拠点化
- 一般通行者の利用を想定した生活道や遊歩道の整備



一般通行者の利用を想定した生活道や遊歩道の整備

基本方針「多種共生」を実現するための方向性

国籍、学部・学科、所属キャンパスなどの壁を越え、多様な視点や専門性をもつ人々が交流・協働する機会を構築する

方向性に沿ったアクティビティ

- 留学生の自国課題解決など特色あるオープンイノベーション活動
- 学部・学科、キャンパスを越えた教育・研究プログラムの開発
- 地域住民や企業を含めた合同展示会の開催



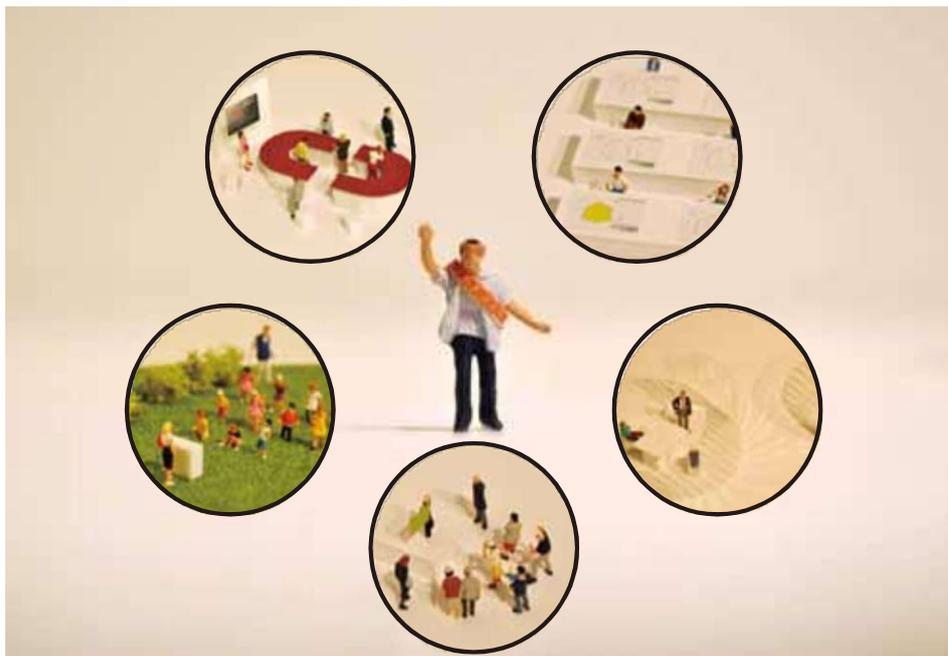
地域住民や企業を含めた合同展示会の開催

基本方針「多種共生」を実現するための方向性

教育・研究・課外活動における新たなチャレンジを積極的に支援するしくみと空間を充実させる

方向性に沿ったアクティビティ

- 学内施設をより柔軟・手軽に利用できる制度や仕組みの整備
- NPO/NGO とのマッチングなど課外活動を支援する仕組み
- 新たなチャレンジを表明・共有・応援・援助し合える仕組み



新たなチャレンジを表明・共有・応援・援助し合える仕組み

CHAPTER
05

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

**フレームワークプラン
～ 30年後のキャンパスをみつめて～**

キャンパスマスタープランの目標・基本方針と、キャンパス別の課題をもとに、戸畑・飯塚・若松それぞれのキャンパスづくりの指針となる戦略と計画を検討します。

本章では、キャンパスマスタープランの目標・基本方針と、各キャンパスにおける課題(2-5-2)をふまえ、戸畑・飯塚・若松のキャンパスづくりの戦略を示します。

また、それらをもとに整理した各キャンパスの整備において重視すべき項目から、動線・ゾーニング、パブリックスペース等の整備計画を検討します。



5-1 戸畑キャンパス

5-1-1 キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略

I: まちが大学に入り込む地域づくりとものづくりの拠点

■課題「まちとの共生、市との協調」

戸畑区では、今後 30 年の間に深刻な人口減少と高齢化が予想され、空洞化が懸念されます。戸畑キャンパスでは、これまで行ってきた地域でのインターンシップや理数教育支援、産学連携などの取り組みを発展させて、まちとの共生、市との協調を進め、地域を支える核となることが求められます。

■戦略

30 年後に向けては、学生・教職員が地域のフィールドでの活動を続けるとともに、さらにキャンパスの中にまちを呼び込み、キャンパスが地域の中心となることを目指します。そのために、北九州・遠賀・中間エリアを含む地域や海外の企業・研究機関、地域住民・NPO・NGO など、まちからキャンパス内に多様な主体が集い、地域づくりや新たなものづくり・技術開発に向けて協働する空間の形成を図ります。

II: 歴史と緑あふれる地域環境形成の拠点

■課題「明専の森の継承・管理、歴史の保全」

戸畑キャンパスは歴史豊かな地域のシンボリック存在であり、周辺環境・生態系を支える明専の森の中心です。歴史の保全と、明専の森の継承・管理は、キャンパスづくりの重要な課題です。

■戦略

30 年後に向けては、歴史を継承しながら、周囲一帯の環境・生態系を支える地域環境形成の拠点となり、北九州市の「世界の環境首都」構想を牽引していくことを目指します。そのために、学内外の先端的な環境・エネルギー技術を積極的に導入し、社会をリードする先進的キャンパスづくりを図ります。

III: オープンで快適な都市のオアシス

■課題「憩いの空間の整備」

住宅や商店に囲まれ、豊かな緑をもち、3 キャンパスで最も大きい面積を有する戸畑キャンパスは、学生・教職員だけでなく地域の人々も自由に行き交い、散策や憩いの場として利用しています。しかし、緑の有効活用、全天候型の屋外オープンスペース整備など、憩いの空間整備をさらに進める余地があります。

■戦略

30 年後に向けては、訪れるさまざまな人々が自由に活動し、憩いの時を過ごす、オープンで快適な都市のオアシスとなることを目指します。そのために、豊富な緑や広いキャンパス空間を学内外の人々に開放し、快適で魅力的な公共空間として整備していきます。

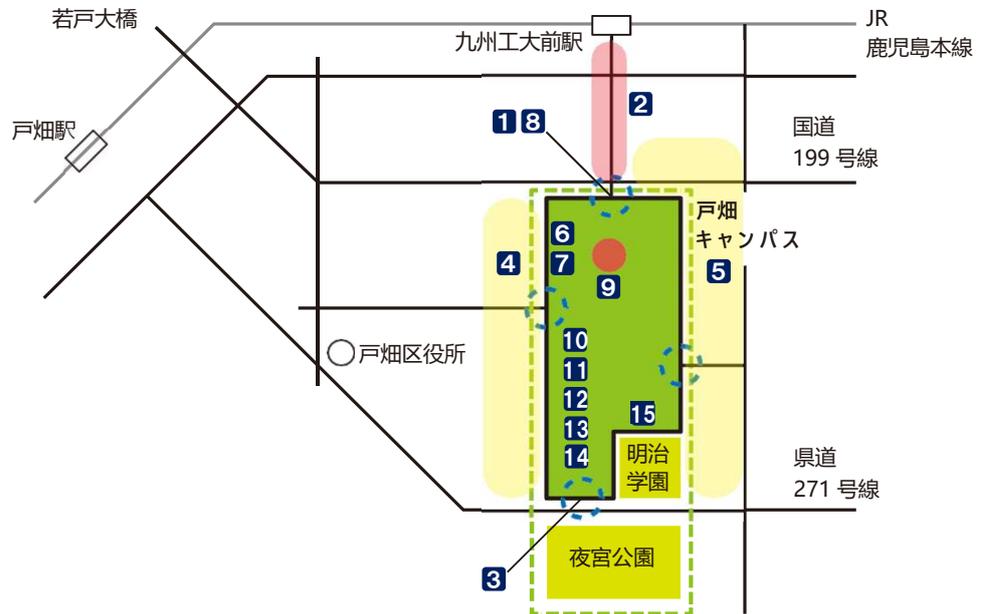
5-1-2 フレームワークプランにおける重視すべき項目

目標と基本方針	未来の技術に出会うキャンパス				
	人づくり	実存主義	相互成長	自己表出	多種共生
戸畑課題	まちとの共生	市と協調	明専の森の継承・管理	憩いの空間整備	
戸畑戦略	I: 地域づくりとものづくりの拠点		II: 歴史と緑あふれる地域環境形成の拠点	III: オープンで快適な都市のオアシス	



戸畑キャンパス フレームワークプランにおける重視すべき項目	
キャンパス周辺	キャンパス内
<p>1. 歴史と緑のキャンパスの象徴となる正門の整備を進める。 < I > < 相 ></p> <p>2. JR九工大前駅へと続く工大前通り商店街との関係強化を図る。 < I > < 相 ></p> <p>3. 県道271号線からのアクセスを考慮した出入口の整備をおこない、戸畑駅と九工大の繋がり、明治学園や夜宮公園に続く明専の森の連続性を強化する。 < II > < 相 ></p> <p>4. 西側では、住宅街や医療福祉施設、教育施設等の周辺の施設との連携・調和に向けて、用途、スケール感や景観の調整を行う。 < II > < 相 ></p> <p>5. 東側周縁部では、遠景の緑のスカイラインとキャンパスエッジの整備に配慮し、視覚的に連続した整備を行う。 < 人 > < 実 > < 相 > < 自 ></p>	<p>6. 大学とまちの人々が集い、交流し、まちづくりやものづくりに自由に取組むための場の整備を進める。 < I > < 人 > < 実 > < 相 > < 多 ></p> <p>7. 先端技術・研究成果を実証し、地域や国際社会に向けて発信するキャンパスづくりを進める。 < I > < 人 > < 実 > < 自 ></p> <p>8. 歴史と緑を活かし、キャンパスと地域の象徴となる正門付近一帯の整備を進める。 < II > < 自 ></p> <p>9. 鳳龍会館を中心としたエリアを九工大の歴史と未来の象徴となるよう整備し、九工大と地域、産業界、アジアへむけた情報交流の場とする。 < II > < 相 > < 自 ></p> <p>10. 豊かな植生や生態系の継承を図り、地域の財産としての明専の森を守る。 < II > < 相 ></p> <p>11. 緑の環境を生かして屋外空間を整備し、潤いのある心地よいキャンパス空間を創出する。 < III > < 多 ></p> <p>12. 人の気配が感じられる、親しみやすい空間づくりを行う。 < III > < 多 ></p> <p>13. 来訪者の多い施設は、外部からのアクセスの良い場所に配置し、利便性の向上を図る。 < III > < 多 ></p> <p>14. 学内外の全ての利用者にとって安全・快適で持続可能な環境づくりを行う。 < III > < 多 ></p> <p>15. 民間資金を含め多様な財源による、土地の有効活用と施設整備を検討する。 < I > < 相 ></p>

* < I > < II > < III > < 人 > < 実 > < 相 > < 自 > < 多 > は、各項目とかわりの深い戦略と基本方針を示



戸畑キャンパス概念図

* 図中の番号は、フレームワークプラン
における重視すべき項目を示す

5-1-3 動線・ゾーニング計画

動線計画

キャンパスと社会のつながりを深める結節点である出入口整備、学内外の人々が、安全・快適にキャンパス内を移動し、活動するための動線整備を目指し、次の点に取り組む。

- キャンパスの出入口は、現在の正門、西門、東門に加え、県道 271 号線側の 4 か所とする。県道 271 号線側の出入口を新たに設けることで、戸畑駅との繋がり、明治学園や夜宮公園に続く明専の森の連続性を強化し、アクセスしやすいキャンパスづくりを行う。なお、西南門は、県道 271 号線側の出入口整備とあわせて閉鎖する。
- 各出入口は、周辺地域の環境の調和を意識して整備を行う。特に正門と県道 271 号線側出入口は、大学の顔としての品格を意識し重点的に整備する。また、西門、東門は車両の主な出入口として安全性に配慮した整備を行う。
- 歩車共存ストリート (b) はキャンパス外周を廻り、4 か所の各出入り口からアクセスする。東西方向と、キャンパス中央を南北に伸びる軸は、歩行者優先ストリート (a) で結ぶ。また、歩車共存ストリートと歩行者優先ストリアートの地下に、共同構をループ状に整備し、水やエネルギーなどの循環型学内インフラ (C) の構築を図る。
- 各ストリートは、一般車両の通行を制限し、歩行者と自転車が安全に移動できるよう整備する。また、ペイブデザインやファニチャー計画、街路樹配置の見直しなどにより、快適な街路整備を図る。また、オープンスペース、施設等との連続性や、施設のボリューム感を考慮した整備を行う。
- キャンパス内の交差点は、視覚的な見通しの確保やたまりの面的な整備などにより、安全性と快適性を考慮した整備を行う。
- キャンパス内の移動手段の一つである自転車と歩行者の共存を図るために、駐輪場の配置を見直し、自転車走行のルールの再考を行う。

ゾーニング計画

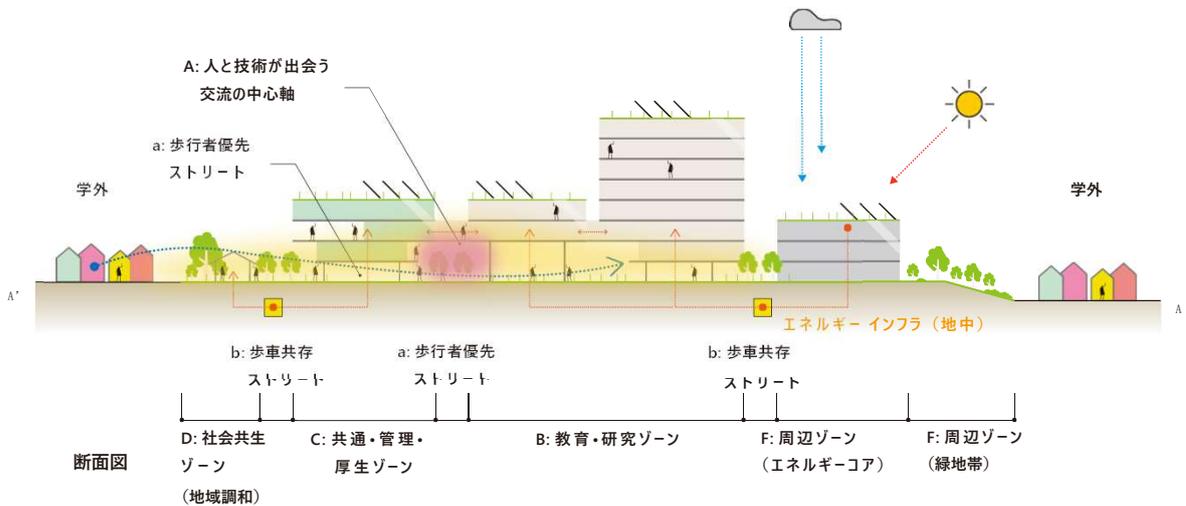
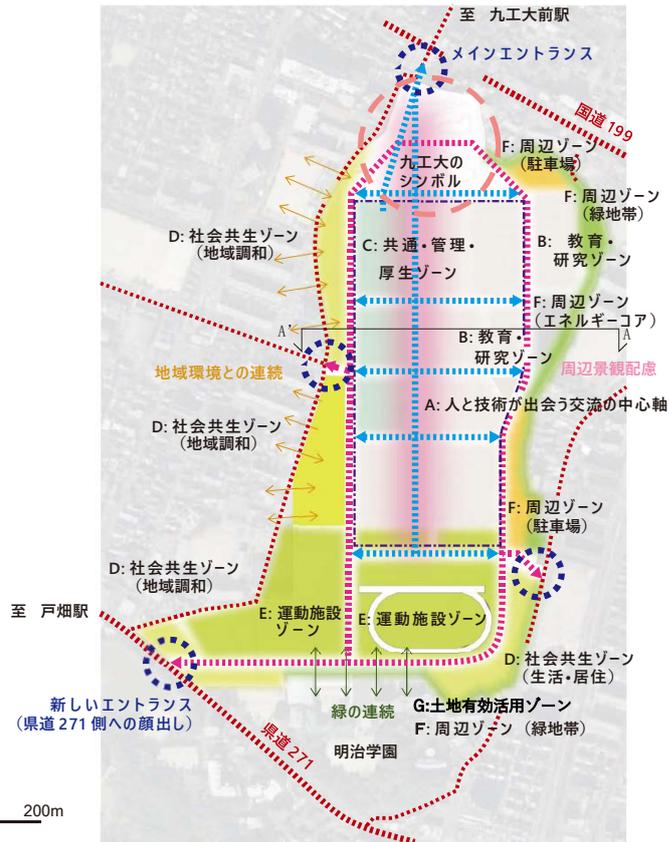
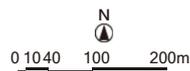
キャンパスマスタープランの目標・基本方針と、キャンパスの戦略実現に向けて、次のようなゾーニングを設定して整備を進める。

- 九工大のシンボルエリア…正門・鳳龍会館付近のエリア。キャンパスづくりに尽力した辰野金吾や清家清の思想を継承し、明治専門学校から積み重なる歴史と、これからの意識した整備を行う。
- A: 人と技術が出会う交流の中心軸…正門から九工大のシンボルエリアを経てグラウンドに至る南北の軸。学生、教職員に加え、地域住民、企業、NPO・NGO など、まちの人々が集い、情報交換・コミュニケーションするための環境を整備する。また、このゾーンでは、飯塚・若松との連携や、アジアとのつながり・国際化も意識して整備を行う。
- B: 教育・研究ゾーン…主に中心軸の東側に広がるゾーン。専門教育・研究、産学連携、また社会人の学びなおしなどを高いレベルで行うための環境を整備する。
- C: 共通・管理・厚生ゾーン…中心軸の西側に広がるゾーン。基礎教育や事務・管理の機能、レストランなどの施設を配置するとともに、九工大の技術を知る場、世界に向けて発信するプレゼンテーションの場としての役割ももつ。また、このゾーンでは、飯塚・若松との連携や、アジアとのつながり・国際化も意識して整備を行う。
- D: 社会共生ゾーン…周辺街路と接する、西側、南東側、南西側のゾーン。南東側には、生活や居住系の施設を配する。西側、南西側では、周辺環境や景観と調和を意識し、開放的で、地域との交流の起点となるよう整備を行う。
- E: 運動施設ゾーン…基本的に現在のゾーンを継承。地域との共同運営などを進め、学内だけでなく、地域にも開放されたゾーンとする。
- F: 周辺ゾーン…キャンパスの境界ゾーン。駐車場やエネルギーコアをまとめたスペースで配置し、キャンパス内の動線の整理、効率的なエネルギー管理に役立てる。また、緑地帯などを設け隣地に配慮した整備を行う。
- G: 土地有効活用ゾーン…明治学園と接する南側及び南東側一部ゾーン。職員宿舎の廃止及び土地の有効活用を目的に、多様な財源を活用した整備を行うとともに地域住民にも開放できる拠点ゾーンとする。

* 各ゾーンにおいて想定されるアクティビティは、資料 51-57 ページに示す。

ゾーニング計画
動線計画

- A: 人と技術が出会う交流の中心
 - B: 教育・研究ゾーン
 - C: 共通・管理・厚生ゾーン
 - D: 社会共生ゾーン
 - E: 運動施設ゾーン
 - F: 周辺ゾーン (エネルギーコア)
 - F: 周辺ゾーン (駐車場)
 - F: 周辺ゾーン (緑地帯)
 - G: 土地有効活用ゾーン
-
- a. 歩行者優先ストリート
 - b. 歩車共存ストリート
 - c. 学内インフラ (モビリティ・エネルギー)
-
- 九工大のシンボル
 - エントランス

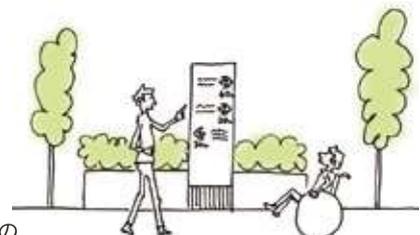


5-1-4 パブリックスペース計画

キャンパスにおける屋内外のパブリックスペースを、歴史と緑を維持しながら安全・快適に整備し、学生・教職員とまちの人々が集い活発に交流・連携する場としていくための考え方をまとめます。

ユニバーサルデザイン

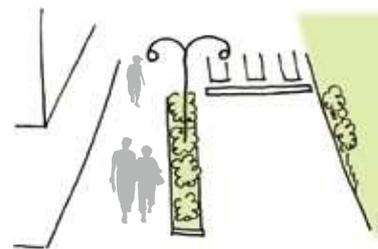
人にやさしい、多種共生の環境づくりを目指し、次のようなかたちでユニバーサルデザインのキャンパス整備を進める。



- ◆国籍や民族や人種、貧富の差、性別、年齢などの差異を超え、等しくキャンパス内での活動に参画できる整備を行う。
- ◆移動制約者、情報制約者それぞれが、自由に活動できるキャンパスを整備する。
(移動制約者：車いすの人だけでなく、怪我をしている人、荷物を持っている人、子ども連れ、妊婦など移動に困難をきたす人。)
(情報制約者：視聴覚や近くに関して障がいを持つ人、外国人、子どもなど情報を得ることに困難をきたす人。)

出入口、街路計画

安全・快適に通行でき、豊かなキャンパス景観の形成に寄与する出入口、街路づくりを目指し、次のように整備を進める。



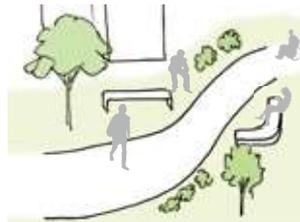
- 各出入口は、周辺地域の環境との調和を意識して整備を行う。特に正門と県道 271 号線側出入口は、大学の顔としての品格を意識し重点的に整備する。また、西門、東門は車両の主な出入口として安全性に配慮した整備を行う。
- 街路では、一般車両の通行を制限し、原則的に歩行者と自転車が安全に移動できるよう整備する。また、パイプデザインやファニチャー計画、街路樹配置の見直しなどにより、快適な街路整備を図る。
- 街路では、オープンスペース、施設等との連続性や、施設のボリューム感を考慮した整備を行う。
- キャンパス内の交差点は、視覚的な見通しの確保やたまりの面的な整備などにより、安全性と快適性を考慮した整備を行う。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

オープンスペース計画

キャンパス内のオープンスペースと緑地空間を人々の主要動線を踏まえ相互成長や自己表出の場として活用することを目指し、次のような点に取り組む。

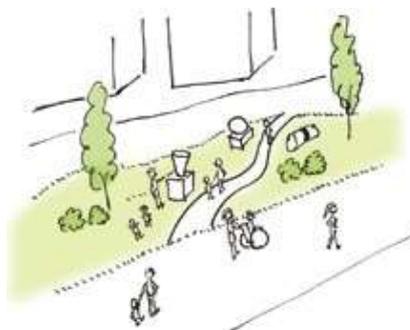
- 街路の両側に、施設のセットバックラインの設定によって、オープンスペースを設ける。ここに、緑地、ポケットパークなどを整備し、学内外の人々のコミュニケーションや自由な活動を誘発するスペースとする。
- 施設の間、将来の建て替えを考慮しつつ、明るく開放的なオープンスペースを確保する。ここにも簡易な施設や植栽、ファニチャーなどを設置し、連続的なヒューマンスケールのスペースを整備する。
- 天候にかかわらず多くの人が集い、自由に活動できるオープンスペースを整備する。
- 明専の森として育まれた緑地を維持管理し、緑豊かで快適な環境を形成する。また、憩いの場としても活用できるよう整備を進める。
- 学生・教職員・卒業生、周辺住民による主体的な緑の維持管理活動を支援し、持続的な維持管理とキャンパスに対する愛着の醸成を図る。



キャンパスエッジ計画

周辺地域と調和したキャンパス周辺部の整備を目指し、次のような点に取り組む。

- 周辺道路と接する部分は、なだらかな傾斜と適度に視線の通る緑地の整備により、視覚的な連続性をもたせる。また、フットパス（歩行者が気軽に出入できる小径）などにより、物理的な連続性をもたせた整備を行う。
- 隣地へ接する部分は、視覚面や心理面の圧迫感を感じさせない環境整備を行う。
- 周辺地域の落ち着いた住宅街の環境の維持に配慮した整備を行う。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

施設計画

学生・教職員やまちの人々が入り込む、活気あふれる施設づくりと、調和のとれた景観形成を目指し、次のように整備を進める。

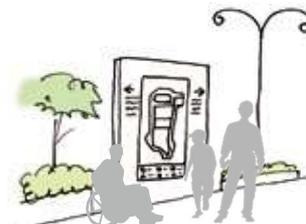
- ◆施設の低層部、人と技術が出会う交流の中心では、人の気配や活動の様子がわかるよう、見通しや構成を工夫し、活気を感じられるキャンパスづくりを行う。
- ◆施設内では、様々なシーンでコミュニケーションを誘発するスペースを点在させる。
- 施設内では、まちづくりやものづくりに取り組むまちの人々が入居し、活動できるスペースの創出を図る。
- 施設の外観は、歴史の保存を目指す「九工大のシンボルエリア」では、清家清設計の記念講堂と鳳龍会館のデザインを基調としてエリア全体の調和をとる。その他のエリアは、モダン・シンプルで高品質なデザインとする。
- 施設の素材、色彩、形態等を一定範囲で統一し、調和のとれたキャンパス景観をつくる。また、壁面ライン、スカイラインを統一することで施設群のまとまりと調和を生む。



サイン計画

学内外の人々が快適にキャンパスを利用できるよう、次のようにわかりやすいサイン整備を進める。

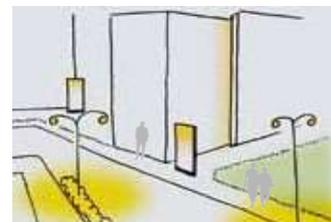
- ◆人や車の動線に基づき、案内サイン→誘導サイン→記名サイン + 注意・運営サインの組み合わせをサインシステムとして整備する。
- ◆色彩やフォント、グラフィックなどの共通コードを設け、シンプルで質の高いデザインでサインを整備する。
- ◆多言語表記や設置する高さに配慮し、誰もが見やすく分かりやすいサインとする。
- ◆ホームページやパンフレット上のキャンパスマップなど、関連する情報と共通性を持たせてサインを整備する。



照明計画

安全性と生物多様性など周囲への影響に配慮し、次のような照明整備を進める。

- ◆夜間の安全な光環境を確保する。また、交差点など人の集まるポイントは照度を上げ、メリハリのある照明とする。
- ◆街灯の配置やライトアップ等の際は周辺地域及び動植物等への光害に配慮する。
- シンボルとなる建物やスペース、イベントなどでは、演劇的な照明を設置する。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-1-5 サステイナブルな環境・建築計画

地域の環境形成の拠点となり、北九州市の「環境未来都市」構想や低炭素・循環型社会をリードする、サステイナブルなエコ・キャンパスの形成に向けた考え方をまとめます。

技術・研究成果の活用

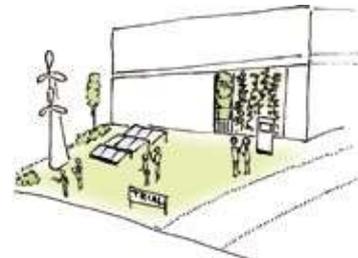
先端的技術・研究成果を導入した、社会をリードする環境形成を目指し、次の点に取り組む。

- ◆学内で保有する、低炭素化、再生可能エネルギー利用、エネルギーマネジメント、バイオマス、エコフットィング、環境配慮型建築等の先進技術・研究成果を、キャンパス整備に積極的に導入する。

実証実験の場の提供

学内に加え、学外からも新たな技術を受け入れ、エコ・キャンパス化と、多様な技術に出会えるキャンパスづくりを推進することを目指し、次の点に取り組む。

- ◆学内の研究室や学外の連携企業・機関等が保有する先端的環境配慮技術を、キャンパスをフィールドとして実証実験できる機会・スペースを提供する。



エネルギー創出・供給

エネルギー自給を行い、ゼロ・カーボン社会の形成や、地域のエネルギー供給に貢献するキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆学内の技術や研究成果（再生可能エネルギー発電、バイオマス発電、排熱エネルギー利用など）を活用し、環境にやさしい、低炭素型のエネルギー創出を実現する。
- ◆地域に対し、余剰電力の供給や、災害時の電力供給を行う仕組みの構築を検討する。
- ◆エネルギー需給を自律的に調整し、キャンパス全体で最適化する仕組みの実現を図る。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

省エネルギー

省エネルギーの、サステイナブルなキャンパスづくりを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆エネルギー使用状況のモニタリング、デマンド警報などの取組みを推進し、エネルギー使用状況の見える化、省エネルギーに向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆照明・空調・断熱などの整備は、将来の維持管理のしやすさを考慮し省エネルギー化に適したかたちで進める。例えば以下の取組みを行う。

照 明：高効率・省エネルギーな屋内外照明器具の設置。自然光を取り入れる施設整備。
照明のゾーン制御と適切な照度コントロール。

空 調：高効率・省エネルギーな空調器具の設置。

断 熱：断熱材の使用。屋上緑化、外壁ルーバー、植栽、ガラスフィルムなどによる日射遮蔽。ペアガラスの整備。

その他：IT 機器、実験機器の省エネルギーモデルへの更新。

エネルギー使用を適切なレベルに自動制御するシステムの導入。



省資源

資源を有効活用・再利用し、循環型社会の模範となるキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆水、紙などの資源使用状況のモニタリング、学内への周知に取組み、資源使用状況を見える化するとともに、省資源に向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆雨水や、ポンプ室ろ過水の再利用等により、水資源の有効活用を推進する。
- ◆紙や、その他の廃棄物・不用品の3R（Reduce、Reuse、Recycle）の取組みを継続・発展させる。

生態系保全

周辺地域の生態系を支え、人々に親しまれる地域のグリーンインフラを目指し、次の点に取り組む。

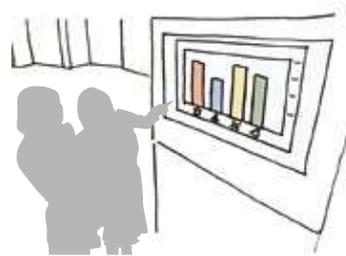
- 明専の森として親しまれるキャンパス緑地の生態系（植生、鳥類、昆虫など）を調査する。また、調査結果をもとに、多様な植生や生物多様性を維持する取組みを行う。
- 枯葉や雑草を堆肥化し、緑地整備に再利用するなど、循環型の生態系保全に向けた取組みを推進する。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

啓発・運用

持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けて、学生や教職員の主体的な活動を促すために、次のような点に取り組む。

- ◆学生・教職員に対し、省エネルギー・省資源・生態系保全などの取組みの内容や重要性を伝える啓発活動を継続的に実践する。
- ◆部局ごとのエネルギーや資源の使用目標を定め、その達成状況を予算配分に反映する制度や、学生による環境保全活動を奨励する制度など、持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けた取組みの動機付けを行う仕組みを検討する。



5-1-6 インフラストラクチャー計画

キャンパス内の電気、ガス、水道などのインフラについて、安全性や効率性を考慮した整備の考え方をまとめます。

インフラ供給計画

安全かつ効率的で、有事に対応可能なインフラ供給システムを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆有事を想定し、被害を最小限に抑える計画を行う。また、有事の後は供給計画の点検・見直しを行い、キャンパスのインフラ維持対策を講じる。
- ライフラインを集約した共同溝を設け、各エリアへのインフラ供給の循環システムを確立する。

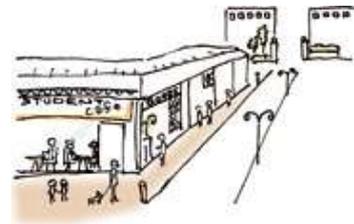
5-1-7 学外活動計画

キャンパス内にとどまらず、キャンパス外とのかかわりの中で、人づくり、実学主義、相互成長の取組みや、自己表出の活動を推進するための計画をまとめます。

教育・研究

キャンパス外との連携、交流を通じた教育・研究の活性化に向けて、次のような点に取り組む。

- ◆共創拠点を確保して戸畑、飯塚、若松キャンパスとの連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。
- ◆異分野（医療、福祉、農業、デザイン、芸術、社会科学など）との連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。



産学連携、地域貢献

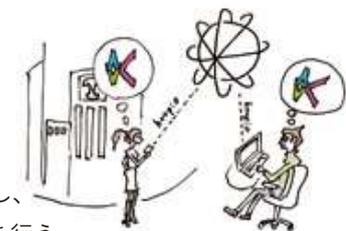
キャンパス外での活動を通じて産業界や地域社会と相互成長していくために、次のような点に取り組む。

- ◆学生や教員が企業・研究機関に出向き、ものづくりや技術開発に従事できる仕組みと環境を整備する。
- ◆学生や教職員が持つ知識や技術を地域住民に公開し、地域に還元する。
- 戸畑で活動する一生活者として、地域活動に積極的に参加する。
JR 九州工大前駅から正門へと続く商店街、北九州、関門・京築エリアなど、地域活性化の一翼を担う活動を継続的に行う。

情報発信

九州工業大学の活動を広く社会に発信し、九工大ブランドを確立することを目指し、次の点に取り組む。

- ◆周辺大都市のサテライトキャンパスを積極的に活用し、学生・教職員による教育・研究成果の積極的な発信を行う。
- ◆九州工業大学のもつシーズがニーズと合致する地域にサテライトキャンパスを設け、地域の活性化に貢献するとともに、技術と研究成果の発信の拠点とすることを検討する。
- ◆マスメディア、SNS を始め、様々なメディアを通じて情報発信と相互コミュニケーションを図る。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-2 飯塚キャンパス

5-2-1 キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略

I: まちの魅力の創造拠点 - 多様な挑戦と協働の場

■課題「飯塚市・筑豊エリアとの連携」

飯塚市の進めるまちづくりの中で、本学は、ベンチャー創出・産学連携・地域貢献活動などにより重要な役割を果たしてきました。人口減少による地域の衰退が懸念される今後は、学生確保のためにも、飯塚市や筑豊エリアとの連携をさらに深め、まちとキャンパスの魅力と共に高めていくことが重要です。

■戦略

30年後に向けては、キャンパスが人々の挑戦と協働を支え、魅力ある飯塚のまちづくりの拠点となることを目指します。そのために、学び、研究開発、産学連携、ベンチャー創業、地域づくり、国際交流など、多様な目的をもつ人々が集まり、自由に利用することのできる施設・空間の整備を図ります。

II: 市民が立ち寄る開放空間

■課題「外部とキャンパスをつなぐ仕組みづくり」

飯塚キャンパスは、中心市街地から離れた郊外に立地し、また、高低差と深い緑で周囲と隔てられています。まちの魅力を育む拠点となるためにも、外部とキャンパスをつなぎ、人を呼び込む仕組みづくりが課題となります。

■戦略

30年後に向けては、多様なアクティビティをきっかけにして多くの市民が立ち寄る、開放的キャンパス空間を目指します。そのために、市民がキャンパス内でセミナーやイベント、スポーツなどのアクティビティに気軽に参加できる環境を整えるとともに、明るく開かれた空間の整備を図ります。

III: 活気あふれる立体空間

■課題「分かりやすい空間・動線、にぎわいと憩いの場づくり」

飯塚キャンパスでは、立体的な空間の広がりやの分かりにくさを解消することが課題となっています。また、屋内外でにぎわいと憩いの場を充実させ、学内外の人々の交流や自由な活動を促進することも求められます。

■戦略

30年後に向けては、立体的空間を有効に活用し、人の活動の活気を感じられ、相互に刺激し合えるキャンパスとすることを目指します。そのために、立体的な空間利用・動線のありかたを設定するとともに、使いやすく、活動の空気が周囲に伝わるオープンスペースの充実を図ります。

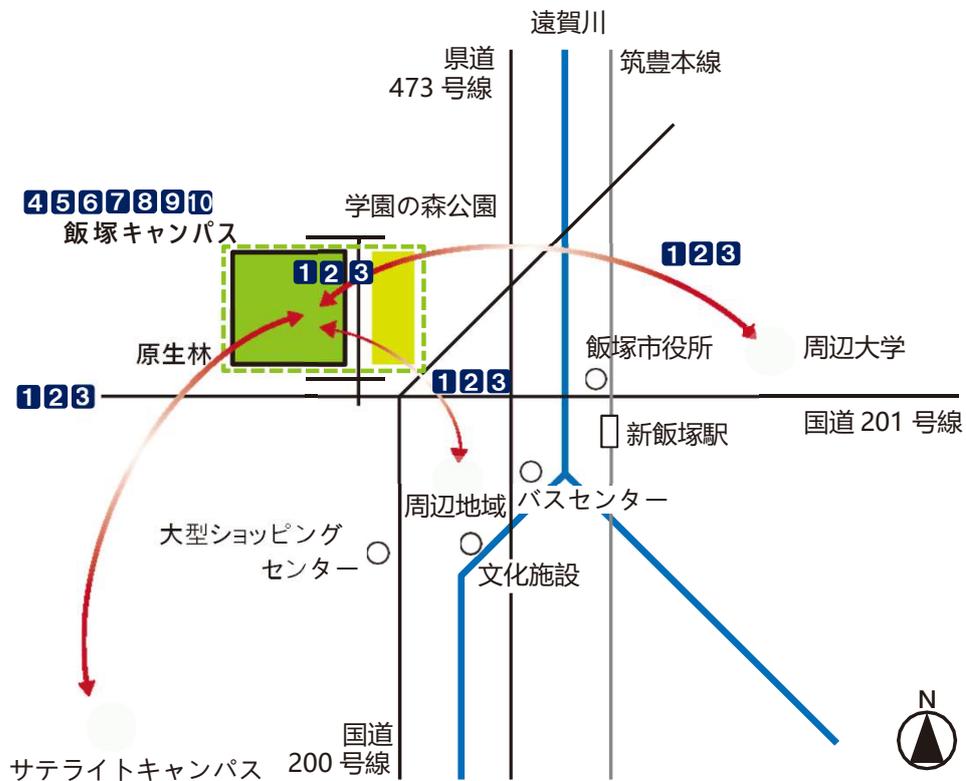
*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-2-2 フレームワークプランにおける重視すべき項目

目標と 基本方針	未来の技術に出会うキャンパス				
	人づくり	実存主義	相互成長	自己表出	多種共生
飯塚課題	飯塚市と連携	外部とキャンパスをつなぐ仕組みづくり	わかりやすい空間・動線	にぎわいと憩いの場づくり	
飯塚戦略	I: 多様な挑戦と協働の場		II: 市民が立ち寄る開放空間	III: 活気あふれる立体空間	



飯塚キャンパス フレームワークプランにおける重視すべき項目	
キャンパス周辺	キャンパス内
<p>1. 飯塚市・筑豊エリアの大学や商店街など地域との連携を重視し、飯塚のまちづくりへの貢献と質の高い教育研究の実践を図る。 < I > < 人 > < 実 > < 相 ></p> <p>2. 飯塚市の掲げる学園都市・情報産業都市づくりの核となるため、キャンパス内でのセミナー・イベントや施設開放などにより、地域の人々が立ち寄れるアクティビティを提供し、地域との関係を強化する。 < II > < 相 ></p> <p>3. キャンパス内だけでなく、キャンパス外での教育研究・社会貢献、情報発信を促進する。 < 人 > < 実 > < 相 > < 自 ></p>	<p>4. 学内外の人々が集い、多様な目的に向けて自由に挑戦・協働するためのスペース・施設の整備を進める。 < I > < 人 > < 実 > < 相 ></p> <p>5. 先端技術・研究成果を実証し、地域や国際社会に向けて発信する。 < I > < 人 > < 実 > < 自 ></p> <p>6. 緑のポリウムや敷地の高低差、高層棟の特性を考慮し、地域と調和し、市民が立ち寄るキャンパス整備を行う。 < II > < 相 ></p> <p>7. 学内外の全ての利用者にとって安全・快適で、持続可能な環境づくりを行う。 < II > < 多 ></p> <p>8. 正門から中庭へ抜けるアプローチと、中庭を中心として各棟をつなぐ回遊型の動線を整備し、コミュニケーションの誘発やキャンパス間連携を担うとともに、情報工学の専門性と人々の活気を感じられるエリアとする。 < III > < 相 > < 自 ></p> <p>9. 鑑賞に用途が限られている緑地や中庭の整備などにより、学内外の人々のにぎわいと憩いの場としてのキャンパスづくりを進める。 < III > < 多 ></p> <p>10. 民間資金を含め多様な財源による、土地の有効活用と施設整備を検討する。 < I > < 相 ></p>
* < I > < II > < III > < 人 > < 実 > < 相 > < 自 > < 多 > は、各項目とかわりの深い戦略と基本方針を示	



飯塚キャンパス概念図

* 図中の番号は、フレームワークプランにおける重視すべき項目を示す

5-2-3 動線・ゾーニング計画

動線計画

キャンパスでの分かりやすい通行と、情報工学の専門性の表現を目指し、次のような整備を行う。

- 1986年につくられた新しいキャンパスであり、機能上の問題も生じていないため、出入口は、現在のものを継承する。動線も、下記に示す部分を除き、基本的に現在のものを継承する。
- 正門から入構し、各施設の3階レベルを通る動線を中心に位置づけ、垂直方向に複雑に広がる空間をわかりやすく移動できる動線設計を行う。
- 周辺住民や市民との接点となる正門から中庭へ続くアプローチを重点的に整備する。正門と周辺の接道エリアも含め、キャンパス内の気配が感じられる整備を行う。
- 正門から中庭へと続くアプローチは幅員を十分確保し、学生や教職員、来訪者とのコミュニケーションを誘発するスペースや情報工学の専門性を伝えられる整備を行う。
- 車での来訪も多いため、歩行者の安全性に配慮した周回道路・歩道の整備を行う。

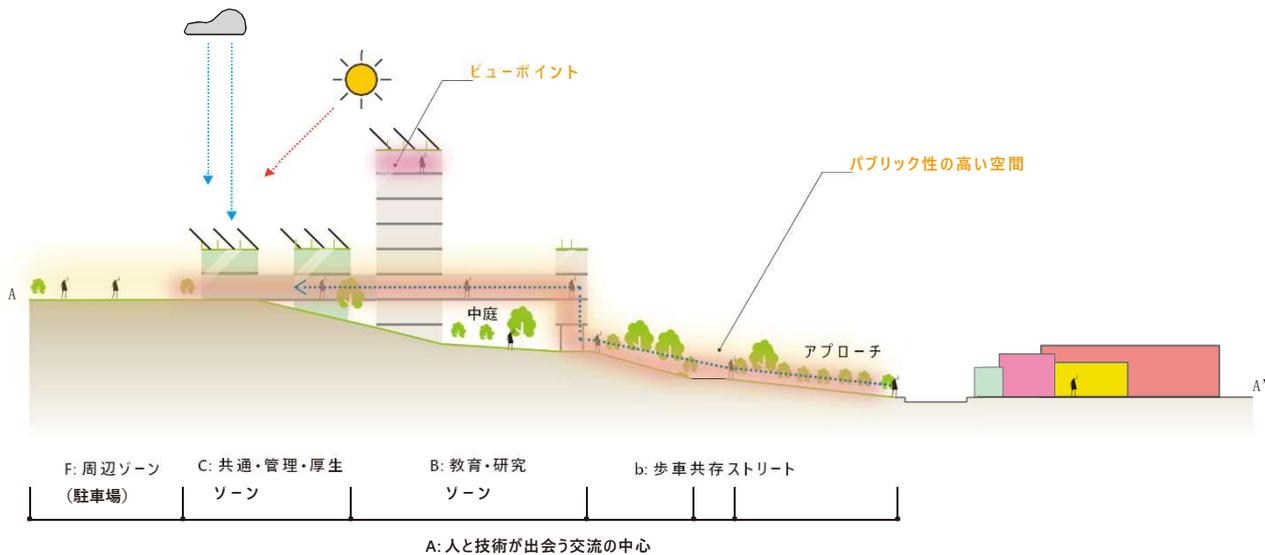
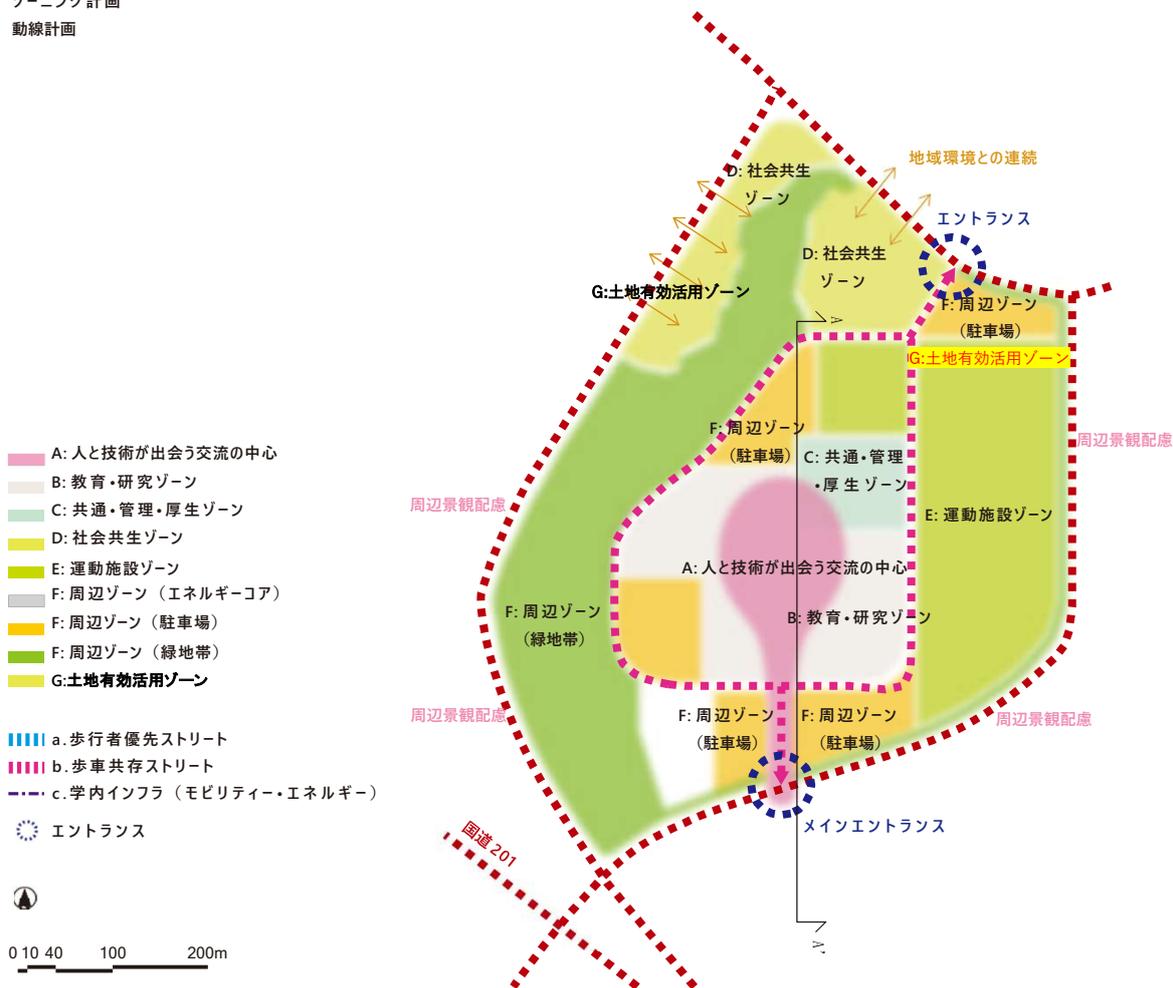
ゾーニング計画

キャンパスマスタープランの目標・基本方針と、キャンパスの戦略実現に向けて、次のようなゾーニングを設定して整備を進める。

- A: 人と技術が出会う交流の中心軸…正門から中庭への軸と、中庭を中心とした施設の3階レベル、学生、教職員に加え、地域住民、企業、NPO・NGOなど、関わる全ての人の情報交換とコミュニケーションを誘発する整備を行う。中庭を中心とした3階レベルでは、回遊性あるオープンな動線を整備し、九工大の技術を知る場、世界に向けて発信するプレゼンテーションの場も兼ねる。また、このゾーンでは、戸畑・若松との連携や、アジアとのつながり・国際化も意識して整備を行う。
- B: 教育・研究ゾーン、C: 共通・管理・厚生ゾーン…現在のゾーンを基本的に継承。質の高い基礎教育の環境や、専門教育・研究、産学連携、また社会人の学びなおしなどを高いレベルで行うための環境を整備する。また、事務、管理機能、レストランなどを整備する。
- D: 社会共生ゾーン…周辺街路と接する、西側と南東側のゾーン。生活や居住系の施設を配し、周辺環境や景観との調和を図るゾーンとする。なお、居住系の施設については今後の保有を含め土地有効活用ゾーンの転用を検討する。
- E: 運動施設ゾーン…基本的に現在のゾーンを継承。地域との共同運営などを進め、学内だけでなく、地域にも開放されたゾーンとする。
- F: 周辺ゾーン…キャンパスの境界ゾーン。駐車場はまとまったスペースでの配置とする。また、緑化舗装や樹木が点在する駐車場とし、潤いの感じられる駐車場とする。
- G: 土地有効活用ゾーン…北側駐車場及び職員宿舍ゾーン。土地の有効活用を目的に、多様な財源を活用した整備を行うとともに地域住民にも開放できる拠点ゾーンとする。

* 各ゾーンにおいて想定されるアクティビティは、資料 51-57 ページに示す。

ゾーニング計画
動線計画



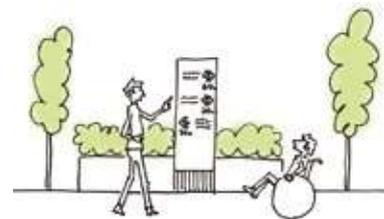
断面図

5-2-4 パブリックスペース計画

キャンパスにおける屋内外のパブリックスペースを、安全・快適に整備し、学生・教職員、学研都市、地域や企業の人々が集い活発に交流・連携する場としていくための考え方をまとめます。

ユニバーサルデザイン

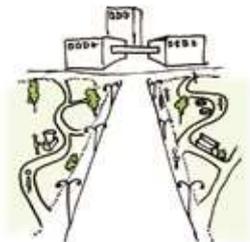
人にやさしい、多種共生の環境づくりを目指し、次のようなかたちでユニバーサルデザインのキャンパス整備を進める。



- ◆国籍や民族や人種、貧富の差、性別、年齢などの差異を超え、等しくキャンパス内での活動に参画できる整備を行う。
- ◆移動制約者、情報制約者それぞれが、自由に活動できるキャンパスを整備する。
 (移動制約者：車いすの人だけでなく、怪我をしている人、荷物を持っている人、子ども連れ、妊婦など移動に困難をきたす人。)
 (情報制約者：視聴覚や近くに関して障がいを持つ人、外国人、子どもなど情報を得ることに困難をきたす人。)

出入口、街路計画

安全・快適に通行でき、キャンパスと地域のつながりを深める出入口、街路づくりを目指し、次のように整備を進める。



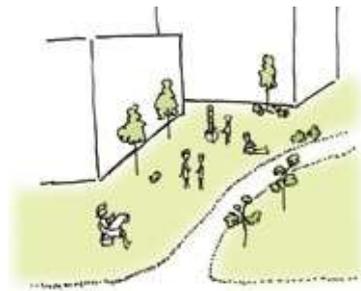
- 周辺住民や市民との接点となる正門から中庭へ続くアプローチを重点的に整備する。
正門と周辺の接道エリアも含め、キャンパス内の気配が感じられる整備を行う。
- 正門から中庭へと続くアプローチは幅員を十分確保し、学生や教職員、来訪者とのコミュニケーションを誘発するスペースや飯塚キャンパスの専門性を伝えられる整備を行う。
- 車での来訪も多いため、歩行者の安全性に配慮した周回道路・歩道の整備を行う。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

オープンスペース計画

キャンパス内のオープンスペースと緑地空間を人々の主要動線を踏まえ相互成長や自己表出の場として活用することを目指し、次のような点に取り組む。

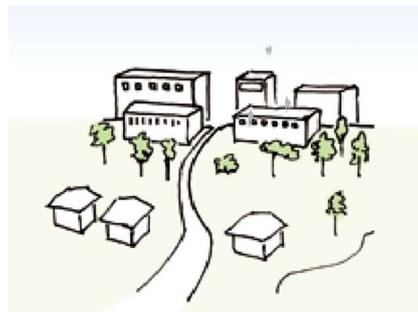
- 施設の間、将来の建て替えを考慮しつつ、明るく開放的なオープンスペースを確保する。ここに、簡易な施設や植栽、ファニチャーなどを設置し、連続的なヒューマンスケールのスペースを整備することで、学内外の人々のコミュニケーションや自由な活動を誘発する。
- 現在は鑑賞に用途が限られている緑地や中庭を、人が自由に入れる緑陰空間に整備し、潤いのある有機的な空間づくりを行う。
- キャンパス設立時から残る周辺エリアの樹木を維持し、緑豊かで快適な環境を形成する。
- キャンパス内のオープンスペースを学内外の人々がイベント開催等に利用できる仕組みと環境を整備する。



キャンパスエッジ計画

周辺地域と調和したキャンパス周辺部の整備を目指し、次のような点に取り組む。

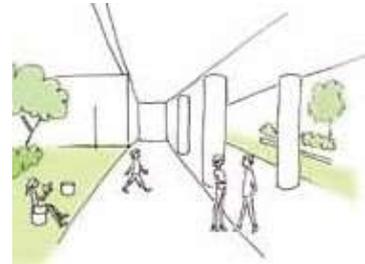
- 二つの出入口を中心に、なだらかな傾斜と適度に視線の通る緑化整備により視覚的な連続性をもたせる。また、フットパス（歩行者が気軽に出入できる小径）などにより、物理的な連続性をもたせた整備を行う。
- 高低差のある接道部分は、視覚面や心理面の圧迫感を感じさせない、周囲と調和した環境整備を行う。
- 周辺地域の落ち着いた住宅街の環境の維持に配慮した整備を行う。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

施設計画

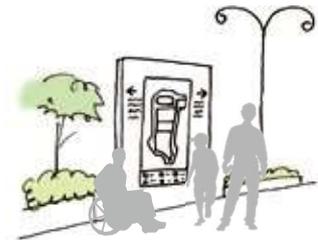
学内外の人々が挑戦し、協働する、活気あふれる施設づくりと、調和のとれた景観形成を目指し、次のように整備を進める。



- ◆施設の低層部、人と技術が出合う交流の中心では、人の気配や活動の様子がわかるよう、見通しや構成を工夫し、活気を感じられるキャンパスづくりを行う。
- ◆施設内では、様々なシーンでコミュニケーションを誘発するスペースを点在させる。
 - 施設内では、学び、研究開発、産学連携、ベンチャー創業、地域づくり、国際交流など、多様な目的をもつ人々が入居し、活動できるスペースの創出を図る。
 - 施設内では、学内外の人々がセミナー・イベント等に利用できるスペースの充実を図る。
 - 施設の外観は、モダン・シンプルで高品質なデザインとする。
 - 施設の素材、色彩、形態等を一定範囲で統一し、調和のとれたキャンパス景観をつくる。

サイン計画

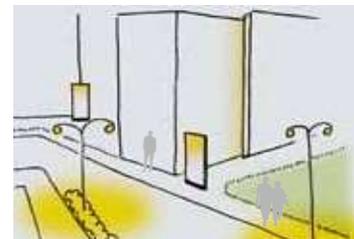
学内外の人々が快適にキャンパスを利用できるよう、次のようにわかりやすいサイン整備を進める。



- ◆人や車の動線に基づき、案内サイン→誘導サイン→記名サイン＋注意・運営サインの組み合わせをサインシステムとして整備する。
- ◆色彩やフォント、グラフィックなどの共通コードを設け、シンプルで質の高いデザインでサインを整備する。
- ◆多言語表記や設置する高さに配慮し、誰もが見やすく分かりやすいサインとする。
- ◆ホームページやパンフレット上のキャンパスマップなど、関連する情報と共通性を持たせてサインを整備する。

照明計画

安全性と生物多様性など周囲への影響に配慮し、次のような照明整備を進める。



- ◆夜間の安全な光環境を確保する。また、交差点など人の集まるポイントは照度を上げ、メリハリのある照明とする。
- ◆街灯の配置やライトアップ等の際は周辺地域及び動植物等への光害に配慮する。
- ◆シンボルとなる建物やスペース、イベントなどでは、演劇的な照明を設置する。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-2-5 サステイナブルな環境・建築計画

地域環境形成の拠点となり、飯塚市・筑豊エリアの環境づくりや、低炭素・循環型社会をリードする、サステイナブルなエコ・キャンパスの形成に向けた考え方をまとめます。

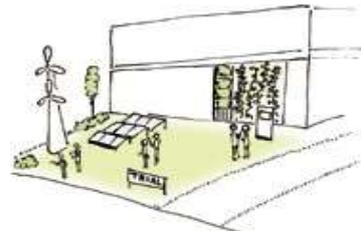
技術・研究成果の活用

先端的技術・研究成果を導入した、社会をリードする環境形成を目指し、次の点に取り組む。

- ◆学内で保有する、低炭素化、再生可能エネルギー利用、エネルギーマネジメント、バイオマス、エコフットィング、環境配慮型建築等の先進技術・研究成果を、キャンパス整備に積極的に導入する。

実証実験の場の提供

学内に加え、学外からも新たな技術を受け入れ、エコ・キャンパス化と、多様な技術に出会えるキャンパスづくりを推進することを目指し、次の点に取り組む。



- ◆学内の研究室や学外の連携企業・機関等が保有する先端的環境配慮技術を、キャンパスをフィールドとして実証実験できる機会・スペースを提供する。
- 情報との融合が実現した時代最先端の情報通信技術を整備する。

エネルギー創出・供給

エネルギー自給を行い、ゼロ・カーボン社会の形成や、地域のエネルギー供給に貢献するキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆学内の技術や研究成果（再生可能エネルギー発電、バイオマス発電、排熱エネルギー利用など）を活用し、環境にやさしい、低炭素型のエネルギー創出を実現する。
- ◆地域に対し、余剰電力の供給や、災害時の電力供給を行う仕組みの構築を検討する。
- ◆エネルギー需給を自律的に調整し、キャンパス全体で最適化する仕組みの実現を図る。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

省エネルギー

省エネルギーの、持続可能なキャンパスづくりを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆エネルギー使用状況のモニタリング、デマンド警報などの取組みを推進し、エネルギー使用状況の見える化、省エネルギーに向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆照明・空調・断熱などの整備は、将来の維持管理のしやすさを考慮し省エネルギー化に適したかたちで進める。たとえば、以下のような取組みを行う。

照 明：高効率・省エネルギーな屋内外照明器具の設置。自然光を取り入れる施設整備。
照明のゾーン制御と適切な照度コントロール。

空 調：高効率・省エネルギーな空調器具の設置。

断 熱：断熱材の使用。屋上緑化、外壁ルーバー、植栽、ガラスフィルムなどによる日射遮蔽。ペアガラスの整備。

その他：IT 機器、実験機器の省エネルギーモデルへの更新。エネルギー使用を適切なレベルに自動制御するシステムの導入。



省資源

資源を有効活用・再利用し、循環型社会の模範となるキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆水、紙などの資源使用状況のモニタリング、学内への周知に取り組み、資源使用状況が見える化するとともに、省資源に向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆紙や、その他の廃棄物・不用品の 3R (Reduce、Reuse、Recycle) の取組みを継続・発展させる。

生態系保全

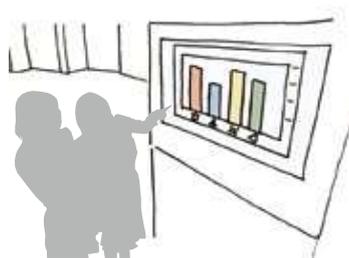
周辺地域の生態系を支え、人々に親しまれる地域のグリーンインフラを目指し、次の点に取り組む。

- 駐車場の緑化などにより、周辺街路から感じる緑の印象を、キャンパス内部にも連続させる。
- キャンパスと周辺地域の生態系（植生、鳥類、昆虫など）を調査する。また、調査結果をもとに、多様植生や生物多様性を維持する取組みを行う。
- 枯葉や雑草を堆肥化し、緑地整備に再利用するなど、循環型の生態系保全に向けた取組みを推進する。

啓発・運用

持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けて、学生や教職員の主体的な活動を促すために、次のような点に取り組む。

- ◆学生・教職員に対し、省エネルギー・資源取・生態系保全などの取組みの内容や重要性を伝える啓発活動を継続的に実践する。
- ◆部局ごとのエネルギーや資源の使用目標を定め、その達成状況を予算配分に反映する制度や、学生による環境保全活動を奨励する制度など、持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けた取組みの動機付けを行う仕組みを検討する。



5-2-6 インフラストラクチャー計画

キャンパス内の電気、ガス、水道などのインフラについて、安全性や効率性を考慮した整備の考え方をまとめます。

インフラ供給計画

安全かつ効率的で、有事に対応可能なインフラ供給システムを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆有事を想定し、被害を最小限に抑える計画を行う。また、有事の後には供給計画の点検・見直しを行い、キャンパスのインフラ維持対策を講じる。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-2-7 学外活動計画

キャンパス内にとどまらず、キャンパス外とのかかわりの中で、人づくり、実学主義、相互成長の取組みや、自己表出の活動を推進するための計画をまとめます。

教育・研究

キャンパス外との連携、交流を通じた教育・研究の活性化に向けて、次のような点に取り組む。

- ◆共創拠点を確保して戸畑、若松キャンパスとの連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。
- ◆異分野（医療、福祉、農業、デザイン、芸術、社会科学など）との連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。

産学連携、地域貢献

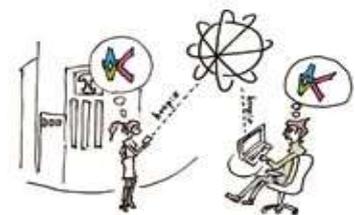
キャンパス外での活動を通じて産業界や地域社会と相互成長していくために、次のような点に取り組む。

- ◆学生や教職員が持つ知識や技術を地域住民に公開し、地域に還元する。
- ◆学生や教員が企業・研究機関に出向き、ものづくりや技術開発に従事できる仕組みと環境を整備する。
- 飯塚、筑豊エリアなど、地域の活性化の一翼を担う活動を継続的に行う。
- 飯塚で活動する一生活者として、地域活動に積極的に参加する。

情報発信

九州工業大学の活動を広く社会に発信し、九工大ブランドを確立することを目指し、次の点に取り組む。

- ◆周辺大都市のサテライトキャンパスを積極的に活用し、学生・教職員による教育・研究成果の積極的な発信を行う。
- ◆九州工業大学のもつシーズがニーズと合致する地域にサテライトキャンパスを設け、地域の活性化に貢献するとともに、技術と研究成果の発信の拠点とすることを検討する。
- ◆マスメディア、SNSを始め、様々なメディアを通じて情報発信と相互コミュニケーションを図る。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-3 若松キャンパス

5-3-1 キャンパスの課題とフレームワークプランの戦略

I: アジアを牽引する学研都市の中心

■課題「北九州学術研究都市・地域との連携」

若松キャンパスは、北九州学術研究都市の中で、北九州市立大・早稲田大と連携しながら活動していることが大きな特色です。人口減少・高齢化が進む中でも、学研都市の一員であることを強みとし、都市内の連携をより深めて高度な技術開発と魅力的なキャンパス環境整備を行うことが重要です。そのためには、留学生を含めた学生の確保が必要であり三大学連携し住環境を整備することが重要です。

■戦略

30年後に向けては、アジアの学術研究拠点たる学研都市の中心として、新たな技術と産業を創出しつづけることを目指します。そのために、教育・研究に加え、施設・実験装置の共同利用や、エコ・キャンパスづくり、地域づくりにおける学研都市内の連携の深化を図ります。

II: 外部との交流を支える空間

■課題「北九州学術研究都市・地域との連携、人の集まる空間づくり」

若松キャンパスでの教育・研究・社会貢献の発展に向けては、学研都市内の人々だけでなく、近隣大学の学生、周辺住民や近接する北九州・遠賀・中間エリアの市民、企業など、キャンパス外からも人々が集まる、活気ある空間づくりが重要です。

■戦略

30年後に向けては、外部との継続的交流を通じた、教育・研究・社会貢献の活性化を目指します。そのために、キャンパス内の既存オープンスペースや余剰スペースを有効活用するとともに、学研都市の施設やオープンスペースも他大学と共同で活用することを検討します。

III: 内部の多様性が交わる空間

■課題「戸畑・飯塚との連携、学内交流の活性化」

大学院のみで構成される若松は、さまざまな大学の出身者、留学生、社会人が集う、多様性のあるキャンパスです。しかし、研究室を超えた交流は必ずしも活発でなく、戸畑・飯塚キャンパスとの交流も活性化の余地があります。学内に多様性を持ちながら、それを十分に活かさきれていない状況と言えます。

■戦略

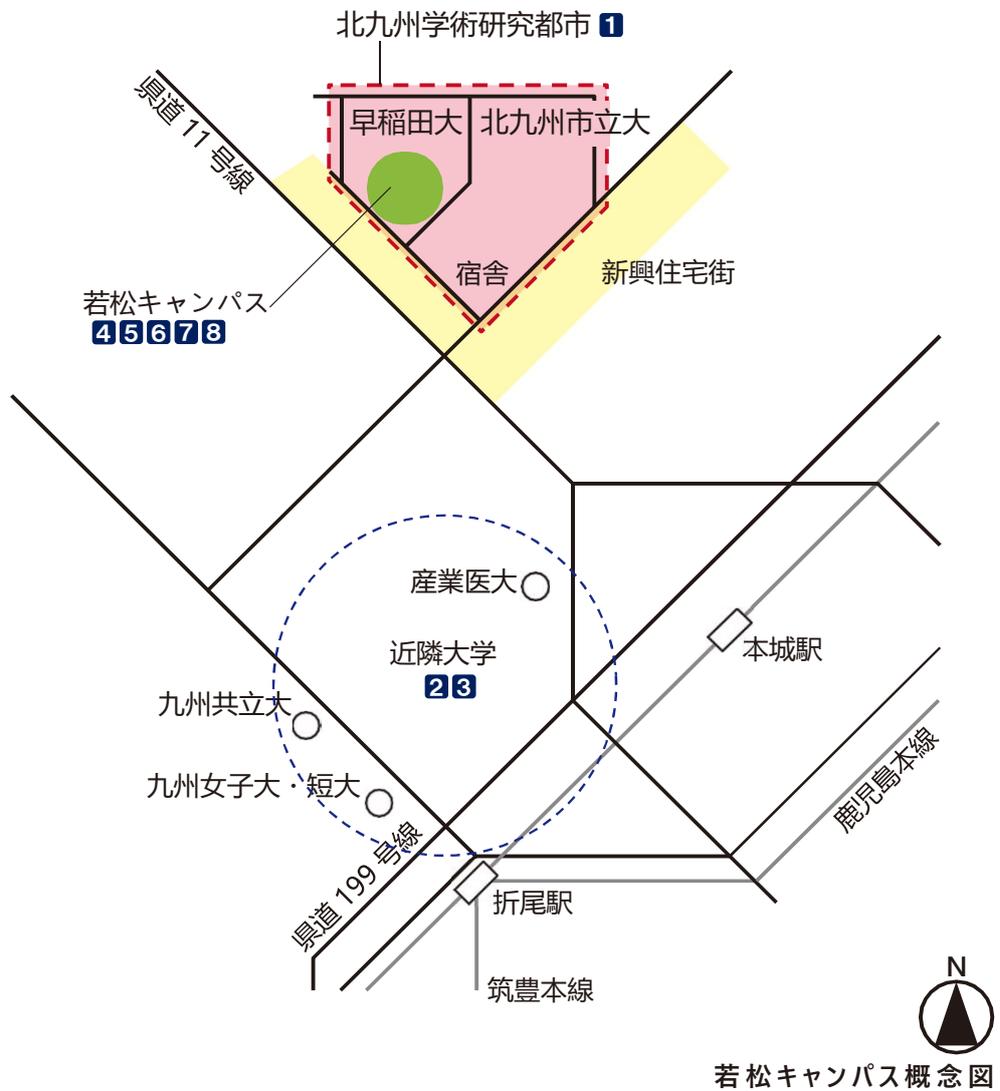
30年後に向けては、学内の多様性が交わり、新たな価値が生まれる空間づくりを目指します。そのために、情報交換・コミュニケーションスペースの充実を図ります。

5-3-2 フレームワークプランにおける重視すべき項目

目標と 基本方針	未来の技術に出会うキャンパス				
	人づくり	実存主義	相互成長	自己表出	多種共生
若松課題	北九州学術研究都市 ・地域との連携	戸畑・飯塚 との連携	人の集まる 空間づくり	学内交流の活性化	
若松戦略	I: アジアを牽引する学研都市 の中心		II: 外部との交流を 支える空間	III: 内部の多様性が 交わる空間	



飯塚キャンパス フレームワークプランにおける重視すべき項目	
キャンパス周辺	キャンパス内
<p>1. 「未来をひらくアジアの学術・研究都市」という都市像の実現に向けて開設された北九州学術研究都市を、一つのキャンパスととらえ、他大学・研究機関との調和・交流・連携を意識して整備を行う。 < I > < 人 > < 実 > < 相 ></p> <p>2. 北九州学術研究都市内の他大学・研究機関だけでなく、近隣地域の大学や近隣住民、企業等にとっても、開放的で親しみやすいキャンパスづくりを行う。 < II > < 相 ></p> <p>3. キャンパス内だけでなく、キャンパス外での教育研究・社会貢献、情報発信を促進する。 < 人 > < 実 > < 相 > < 自 ></p>	<p>4. 北九州学術研究都市や地域の人々が集い、活動するためのスペース・施設の整備を行う。 < I > < 人 > < 実 > < 相 ></p> <p>5. 先端技術・研究成果を実証し、地域や国際社会に向けて発信するキャンパスづくりを進める。 < I > < 人 > < 実 > < 自 ></p> <p>6. 生命体工学の専門性と、人々の活気が感じられるキャンパスづくりを行う。 < II > < 多 ></p> <p>7. 学内外の全ての利用者にとって安全・快適で、サステイナブルな環境づくりを行う。 < II > < 多 ></p> <p>8. 研究室や階をまたいだ繋がりや、キャンパスを越えた交流・連携を促す、利用率の高いフレッシュ空間整備を行う。 < III > < 多 ></p>
<p>* < I > < II > < III > < 人 > < 実 > < 相 > < 自 > < 多 > は、各項目とかかわりの深い戦略と基本方針を示</p>	



若松キャンパス概念図

※図中の番号は、フレームワークプランにおける重視すべき項目を示す

5-3-3 動線・ゾーニング計画

動線計画

歩行者に配慮した出入口整備を、次のように進める。

- 2000年につくられた新しいキャンパスであり機能上の問題も生じていないため、出入口や動線は、現在の骨格を継承する。
- キャンパス北側の大学通りに面した出入口を歩行者中心のメインエントランスとし、東側は車両を中心とした出入口整備を行う。

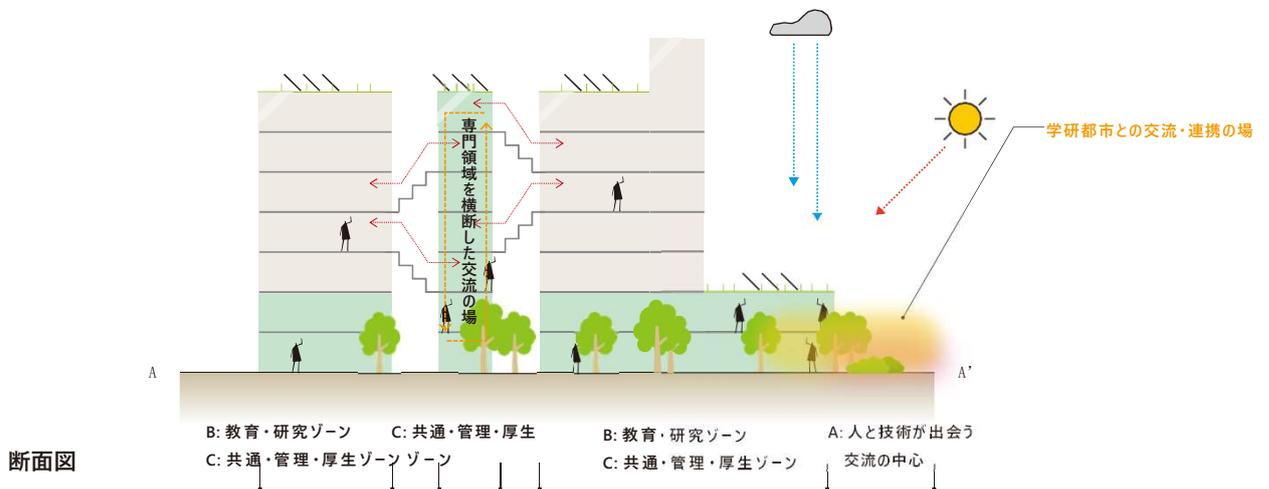
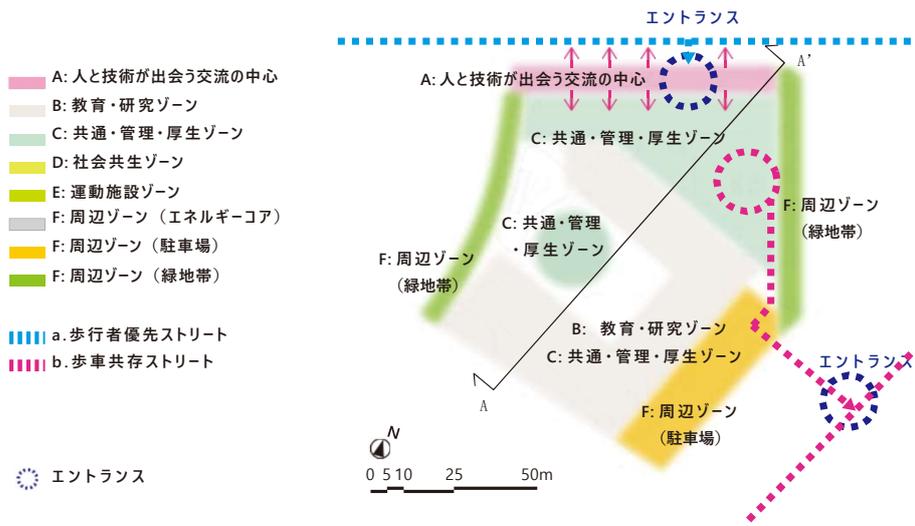
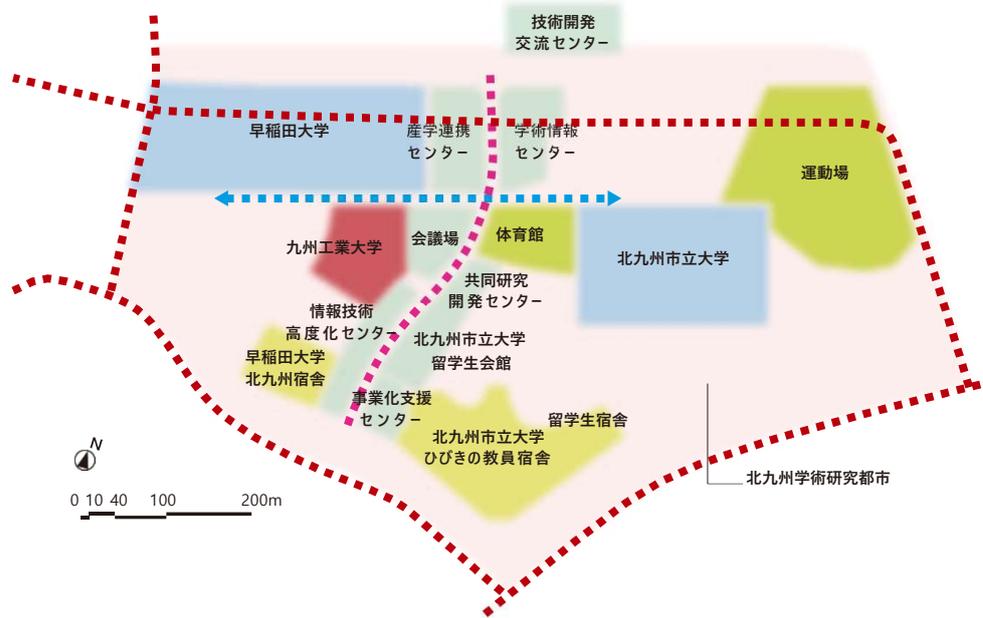
ゾーニング計画

キャンパスマスタープランの目標・基本方針と、キャンパスの戦略実現に向けて、次のようなゾーニングを設定して整備を進める。

- A: 人と技術が出会う交流の中心軸…キャンパス北側の大学通りに面するゾーン。学内、北九州学術研究都市、地域社会や産業界との交流を図るために、学生、教員、地域住民、企業、NPO・NGOなど、関わる全ての人の情報交換とコミュニケーションを誘発する空間づくりを行う。また、キャンパス外の人々が気軽に立ち寄ることができる空間づくりを行う。このスペースは、3キャンパスの交流の場や、九工大の技術を知る場、世界に向けて発信するプレゼンテーションの場としての役割も兼ねる。
- B: 教育・研究ゾーン、…高層棟（現在の研究実験棟）の中・高層部。専門教育や研究、産学連携、また社会人の学びなおしなどを高いレベルで行う環境の整備を行う。また、書庫の一元化などスペースの有効活用を図る。
- C: 共通・管理・厚生ゾーン…高層棟（現在の研究実験棟）の低層部。事務、管理機能を整備する。また、コの字に囲まれた中庭の一部に増床し、情報交換とコミュニケーションを誘発するスペースを設ける。なおレストラン・売店等の機能は、従来通り学研都市内の共有施設・テナントで充足する。
- 社会共生ゾーンと E: 運動施設ゾーンは、キャンパス敷地内には設置せず、学研都市の運動施設ゾーンで機能を充足する。
- F: 周辺ゾーン…キャンパスの境界ゾーン。現在の駐車場、緑化帯の構成を基本的に維持する。

* 各ゾーンにおいて想定されるアクティビティは、資料 51-57 に示す。

ゾーニング計画
動線計画



5-3-4 パブリックスペース計画

キャンパスにおける屋内外のパブリックスペースを、安全・快適に整備し、学生・教職員、学研都市、地域や企業の人々が集い活発に交流・連携する場としていくための考え方をまとめます。

ユニバーサルデザイン

人にやさしい、多種共生の環境づくりを目指し、次のようなかたちでユニバーサルデザインのキャンパス整備を進める。

- ◆国籍や民族や人種、貧富の差、性別、年齢などの差異を超え、等しくキャンパス内での活動に参画できる整備を行う。
- ◆移動制約者、情報制約者それぞれが、自由に活動できるキャンパスを整備する。
(移動制約者：車いすの人だけでなく、怪我をしている人、荷物を持っている人、子ども連れ、妊婦など移動に困難をきたす人。)
(情報制約者：視聴覚や近くに関して障がいを持つ人、外国人、子どもなど情報を得ることに困難をきたす人。)



出入口、街路計画

歩行者に配慮した出入口整備を、次のように進める。

- キャンパス北側の大学通りに面した出入口を歩行者中心のメインエントランスとし、東側は車両を中心とした出入口整備を行う。

オープンスペース計画

キャンパス敷地内と学研都市内のオープンスペースを人々の主要動線を踏まえ相互成長や自己表出の場として活用することを目指し、次のような点に取り組む。

- 明るく開放的で潤いを感じる有機的なスペースづくりを行い、人が自由に入れる緑陰空間を整備する。
- 施設の低層部分と一体的な整備を行い、広がりと連続性を感じる空間づくりを行う。
- 車動線や駐車場、駐輪場はできる限り集約し、オープンスペース化することを目指す。
- 北九州学術研究都市における、大学間の学生交流・憩いの場の充実に向けては、北九州市立大学・早稲田大学と協調し、学研都市のキャンパス運営委員会において要望していくことを検討する。

キャンパスエッジ計画

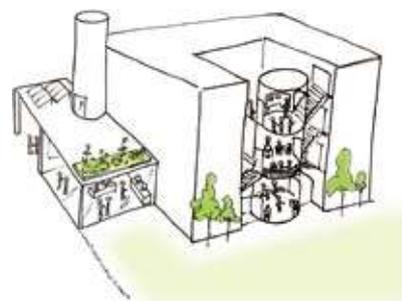
周囲と調和したキャンパス周縁部の整備を目指し、次のような点に取り組む。

- 北側の大学通りに面する部分は、視覚的、物理的な連続性を確保し、気軽にキャンパスにアクセスできる整備を行う。
- 隣地に対しては、連続感と調和を考慮し、植栽やルーバーを施す。

施設計画

学内外の人々が活動する、活気あふれる施設づくりを目指し、次のように整備を進める。

- ◆施設の低層部、人と技術が出会う交流の中心では、人の気配に配慮し、見通しや施設構成を工夫し、キャンパスのアクティビティーが感じられるようにする。
- ◆施設内には、様々なシーンでコミュニケーションを誘発させるスペースを点在させる。
- 現状の施設は、継続的に利用する。
- 施設内では、学外の人々が入居し、活動できるスペースの創出を図る。
- 容積の許容範囲で中庭にリフレッシュ空間を増床し、研究室や階を超えたコミュニケーションを誘発する。

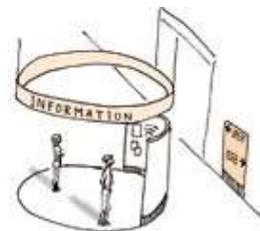


*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

サイン計画

学内外の人々が快適にキャンパスを利用できるよう、次のようにわかりやすいサイン整備を進める。

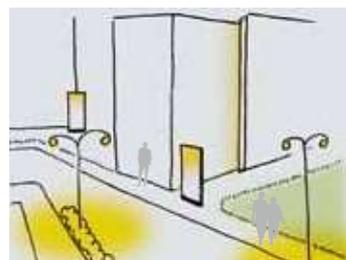
- ◆人や車の動線に基づき、案内サイン→誘導サイン→記名サイン + 注意・運営サインの組み合わせをサインシステムとして整備する。
 - ◆色彩やフォント、グラフィックなどの共通コードを設け、シンプルで質の高いデザインでサインを整備する。
 - ◆多言語表記や設置する高に配慮し、誰もが見やすく分かりやすいサインとする。
 - ◆ホームページやパンフレット上のキャンパスマップなど、関連する情報と共通性を持たせてサインを整備する。
- 学研都市のサインとの連続性に配慮してサインを整備する。



照明計画

安全性と周囲への影響に配慮し、次のような照明整備を進める。

- ◆夜間の安全な光環境を確保する。また、交差点などの行動のポイントは照度を上げメリハリをつける。
- ◆イベントなどでは、演出的な照明を設置する。
- ◆街灯の配置やライトアップ等の際には、周囲への光害に配慮する。



*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-3-45 サステイナブルな環境・建築計画

地域の環境形成の拠点となり、北九州市の「環境未来都市」構想や低炭素・循環型社会をリードする、サステイナブルなエコ・キャンパスの形成に向けた考え方をまとめます。

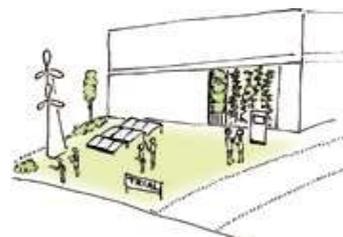
技術・研究成果の活用

先端的技術・研究成果を導入した、社会をリードする環境形成を目指し、次の点に取り組む。

- ◆学内で保有する、低炭素化、再生可能エネルギー利用、エネルギーマネジメント、バイオマス、エコフットイング、環境配慮型建築等の先進技術・研究成果を、キャンパス整備に積極的に導入する。
- 北九州学術研究都市における環境技術・エコキャンパスの取組みを積極的に活用する。

実証実験の場の提供

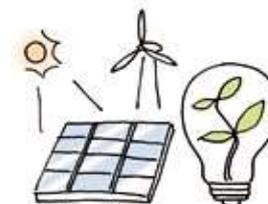
学内に加え、学外からも新たな技術を受け入れ、エコ・キャンパス化と、多様な技術に出会えるキャンパスづくりを推進することを目指し、次の点に取り組む。



- ◆学内の研究室や学外の連携企業・機関等が保有する先端的環境配慮技術を、キャンパスをフィールドとして実証実験できる機会・スペースを提供する。
- キャンパスのみならず、北九州学術研究都市をフィールドとした実証実験の推進を目指す。

エネルギー創出・供給

エネルギー自給を行い、ゼロ・カーボン社会の形成や、地域のエネルギー供給に貢献するキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。



- ◆学内の技術や研究成果（再生可能エネルギー発電、バイオマス発電、排熱エネルギー利用など）を活用し、環境にやさしい、低炭素型のエネルギー創出を実現する。
- ◆地域に対し、余剰電力の供給や、災害時の電力供給を行う仕組みの構築を検討する。
- ◆エネルギー需給を自律的に調整し、キャンパス全体で最適化する仕組みの実現を図る。
- 北九州学術研究都市におけるエネルギー創出・供給の最適化の取組みに積極的に参加する。

*3キャンパス共通で取り組む項目は♦で表示。

省エネルギー

省エネルギーの、サステイナブルなキャンパスづくりを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆エネルギー使用状況のモニタリング、デマンド警報などの取組みを推進し、エネルギー使用状況の見える化、省エネルギーに向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆照明・空調・断熱などの整備は、将来の維持管理のしやすさを考慮し省エネルギー化に適したかたちで進める。たとえば、以下のような取組みを行う。

照 明：高効率・省エネルギーな屋内外照明器具の設置。自然光を取り入れる施設整備。照明のゾーン制御と適切な照度コントロール。

空 調：高効率・省エネルギーな空調器具の設置。

断 熱：断熱材の使用。屋上緑化、外壁ルーバー、植栽、ガラスフィルムなどによる日射遮蔽。ペアガラスの整備。

その他：IT 機器、実験機器の省エネルギーモデルへの更新。エネルギー使用を適切なレベルに自動制御するシステムの導入。

- 北九州学術研究都市における省エネルギーの取組みに積極的に参加する。また、インフラ・施設や、実験装置等の共同利用を積極的に推進し、学研都市全体での省エネルギー化に貢献する。



省資源

資源を有効活用・再利用し、循環型社会の模範となるキャンパスを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆水、紙などの資源使用状況のモニタリング、学内への周知に取り組み、資源使用状況が見える化するとともに、省資源に向けた啓蒙活動を発展させる。
- ◆紙や、その他の廃棄物・不用品の 3R (Reduce、Reuse、Recycle) の取組みを継続・発展させる。
- 北九州学術研究都市における省資源の取組みに積極的に参加する。

生態系保全

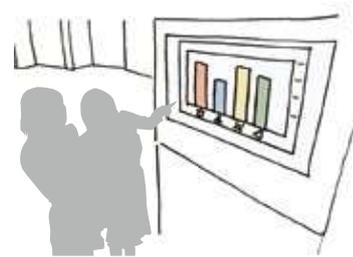
周辺地域の生態系を支え、人々に親しまれる地域のグリーンインフラを目指し、次の点に取り組む。

- 周辺地域の生態系（植生、鳥類、昆虫など）を調査する。また、調査結果をもとに、郷土種を考慮した植栽計画の検討などを行い、周辺地域の生態系との共生を図る。
- 北九州学術研究都市における生態系保全の取組みに積極的に参加する。

啓発・運用

持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けて、学生や教職員の主体的な活動を促すために、次のような点に取り組む。

- ◆学生・教職員に対し、省エネルギー・省資源・生態系保全などの取組みの内容や重要性を伝える啓発活動を継続的に実践する。
- ◆部局ごとのエネルギーや資源の使用目標を定め、その達成状況を予算配分に反映する制度や、学生による環境保全活動を奨励する制度など、持続可能なエコ・キャンパスづくりに向けた取組みの動機付けを行う仕組みを検討する。



5-3-6 インフラストラクチャー計画

キャンパス内の電気、ガス、水道などのライフライン整備について考え方をまとめます。

インフラ供給計画

有事に対応可能なインフラ供給システムを目指し、次のような点に取り組む。

- ◆有事を想定し、被害を最小限に抑える計画を行うとともに、事後の供給計画を行い、キャンパスのインフラ維持対策を行う、

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

5-3-7 学外活動計画

北九州学術研究都市の外部とのかかわりの中で、人づくり、実学主義、相互成長の取組みや、自己表出の活動を推進するための計画をまとめます。

教育・研究

キャンパス外との連携、交流を通じた教育・研究の活性化に向けて、次のような点に取り組む。

- ◆北九州学術研究都市を核として戸畑、飯塚キャンパスとの連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。
- ◆異分野（医療、福祉、農業、デザイン、芸術、社会科学など）との連携、交流を密にし、新たな分野、テーマの開拓を行う。

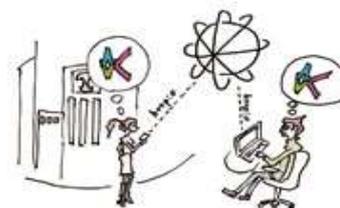
産学連携、地域貢献

北九州学術研究都市の外での活動を通じて産業界や地域社会と相互成長していくために、次のような点に取り組む。

- ◆学生や教職員が企業・研究機関に出向き、ものづくりや技術開発に従事できる仕組みと環境を整備する。
- ◆学生や教職員が持つ、知識や技術を地域住民に公開し地域に還元する。
 - 若松、折尾地区で活動する一生活者として、地域活動に積極的に参加する。
 - 若松、折尾地区、遠賀・中間エリアなど、地域の活性化の一翼を担う活動を継続的に行う。

情報発信

九州工業大学の活動を広く社会に発信し、九工大ブランドを確立することを目指し、次の点に取り組む。



- ◆周辺大都市のサテライトキャンパスを積極的に活用し、学生・教職員による教育・研究成果の積極的な発信を行う。
- ◆九州工業大学のもつシーズがニーズと合致する地域にサテライトキャンパスを設け、地域の活性化に貢献するとともに、技術と研究成果の発信の拠点とすることを検討する。
- ◆マスメディア、SNSを始め、様々なメディアを通じて情報発信と相互コミュニケーションを図る。

*3キャンパス共通で取り組む項目は◆で表示。

CHAPTER

06

The Campus Master Plan
for Kyushu Institute
of Technology

キャンパスマスタープランの運用

ここまでに示したプランを運用していくために、PDCA サイクル、組織体制、実践手法や、資金・コスト管理、施設・スペース管理、品質管理、安全管理の考え方を整理します。

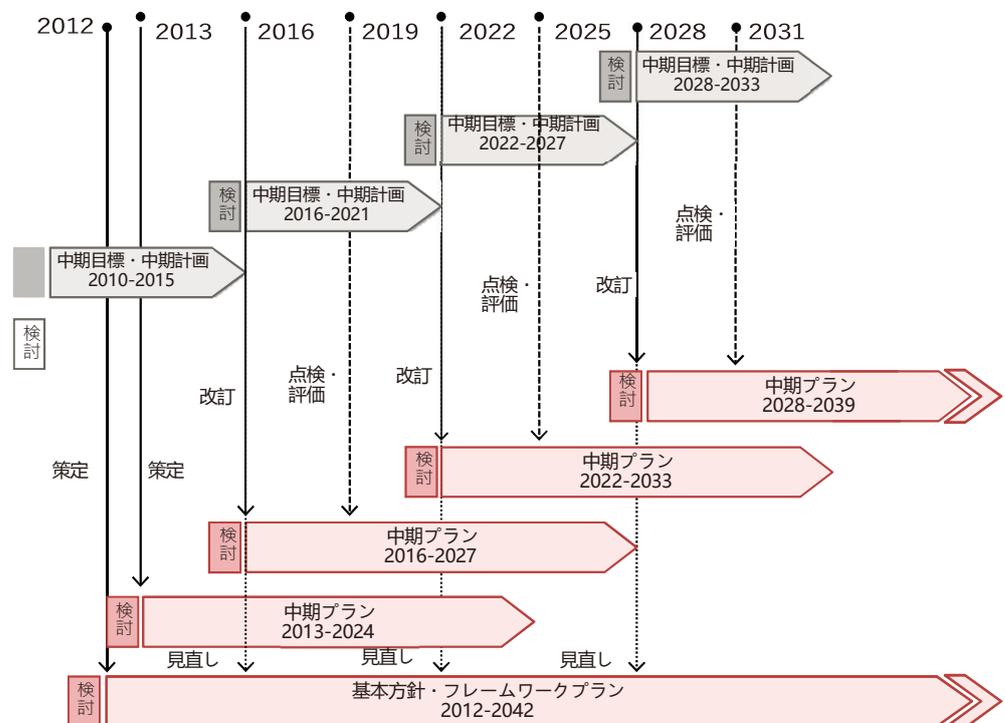
キャンパスマスタープラン実行の PDCA サイクル・組織体制等

■ PDCA サイクル ■

キャンパスマスタープランの実現に向けては、計画（Plan）、実行（Do）、点検・評価（Check）、改善（Action）のPDCAサイクルを通じて、プランの適切な運用を図ることが重要となる。

PDCA サイクルとして、次のようなものが考えられる。

- 計画（Plan）においては、長期的キャンパスづくりの指針を定める基本方針・フレームワークプランを策定する。なお、今回定める基本方針・フレームワークプランの対象年度は、2012年度～2042年度の約30年間とする。さらに、基本方針・フレームワークプランにもとづく、12年の整備計画（中期目標・中期計画2期分）として中期プランを策定し、実行（Do）に移す。
- プランの実施状況は、3年ごとに点検・評価（Check）する。また、点検・評価の結果をもとに、中期目標・中期計画の見直しのサイクルに合わせて、プランの改訂（Action）を行う。その際、必要に応じて基本方針・フレームワークプランの見直しもあわせて行う。



■ 組織体制 ■

キャンパスマスタープランの点検・評価、改訂を継続的に実施していくためには、組織体制を整備することが必要である。組織体制のあり方としては、次のようなものが考えられる。

- キャンパスマスタープランの点検・評価、改訂は、施設委員会が実施する。施設委員会は、キャンパス整備に関わる研究分野に従事する教員、キャンパス運営に関わる教職員、キャンパス施設整備に関わる職員で構成されるキャンパスマスタープラン改訂ワーキンググループを設置して検討を行う。ただし、ワーキンググループや、施設担当部局だけでは、全学の意見をふまえた点検・評価・改訂は困難であり、人的資源も十分とはいえない、このため、点検・評価、改訂においては、各キャンパスの学部生・大学院生がかかわる仕組み（学生キャンパス委員会（仮称）など）の構築や、点検、評価・改訂支援者の公募を検討する。
- 周辺地域の意見を反映するため、キャンパスマスタープラン改訂および点検・評価の年度において、周辺地域・機関（教育機関・医療機関）・自治体等との、キャンパス作りに向けた地域意見交換会（仮称）を実施する。ここでは、特に地域との連携、地域の防災・防犯についての意見交換を行う。
- キャンパスマスタープランの点検・評価、改訂の結果は、施設委員会が公表する。

■ 実践手法 ■

キャンパスマスタープランに基づき、施設整備計画を実行する際には、投資対象となる整備計画に優先順位をつけ、高いものに優先的に予算配分していくことが重要となる。優先順位付けの方法としては、次のようなものが考えられる。

- 第一に、キャンパスの老朽・狭隘解消、安全性確保に関わる計画、第二に、大学の根幹をなす教育・研究活動上の優先度が高い計画を重視して、予算配分を行う。より具体的な優先順位については、6年ごとの中期プランの改訂に合わせて検討する。

また、キャンパスマスタープランにもとづき、施設の設計や維持管理活動を行う際には、学生・教職員・卒業生・地域住民の協力を得ることで、利用者本位の、効果的なプランの実行が可能となる。協力を得るための取組みとして、次のようなものが考えられる。

- キャンパスマスタープランにもとづき、オープンスペース等の設計を行う際は、学生キャンパス委員会（仮称）や既存の学生サークル・研究室から案を募る。
- キャンパスマスタープランにもとづくキャンパスの維持管理活動に、学生・教職員や、卒業生・地域住民が参加する仕組みを構築する。

資金・コスト管理

キャンパスマスタープランの実行のためには、必要資金の計画的な調達が必要となる。資金調達の方法としては、次のようなものが考えられる。

- 資金調達においては、プランにもとづき、各年度で緊急性・教育研究上の重要性の高い課題を選定して整備計画を策定し、概算要求を行う。
- 概算要求に加え、学内予算、スペースチャージ収入、施設利用料、寄付金、長期借入金、間接経費、外部事業者との連携（PFI による施設整備、定期借地権の設定、公共団体と連携した施設整備、他大学と共同での施設整備、負担付寄付等）それぞれで多様な財源を確保し、プランの実現に向けた資金の確実な調達を図る。

また、プラン実行のための財源確保に向けては、施設整備や修繕・維持管理のコストを軽減することも重要である。コスト軽減に向けた取組みとして、次のようなものが考えられる。

- 現状の施設は、基本的に、長寿命化に向けて修繕・維持管理し、ストックとして有効に活用する。ただし、今後は、少子化・人口減少によりキャンパス人口も減少し、ストックが過剰になることが想定される。そのため、建築年数が古い施設（60年を超えるか、60年に近い建物）については、機能上の問題が生じない限りで、減築・他施設との整理統合を検討し、ストックを適正な規模に縮小する。これにより、大学の人口・財政規模に見合った施設運営を実現し、施設整備や修繕・維持管理費を適正化するとともに、良質な教育研究環境の提供を図る。
- 機能上の問題が生じない限りで、他大学や外部機関との施設・設備の共有を進め、修繕・維持管理費の軽減を図る。
- 良好なキャンパス環境を低コストで維持するため、高い技術力と価格競争力をもった業者の選定を行う。

施設・スペース管理

九州工業大学では、ファシリティマネジメント・スペースマネジメントにおける先進的な取り組みを実施してきた。たとえば、施設の有効活用に関する規程を定め、施設のレンタル制（1年単位）とスペースチャージ制を導入した。それにより確保した経費（年間約 5000 万円程度）で、立ち遅れていた予防的維持管理を充実させ、機能の改善を図っている。また、スペース管理システムを稼働させ、施設の使用状況を登録・分析し、施設の有効活用を図るとともに、改修計画へ活用している。さらに、施設の中長期修繕計画策定によるライフサイクルコストを意識した維持管理も実施している。今後も、このような先進的ファシリティマネジメント・スペースマネジメントの取り組みを継続していくことが重要である。

これに加え、ファシリティマネジメントをさらに発展させるための取り組みとして以下が考えられる。

- Web による要望受付・処理、施設管理・予算管理等の機能を統合的した、「施設管理システム（仮称）」の導入を図る。これにより、利用者のニーズ、メンテナンス履歴等を蓄積・分析し、ファシリティマネジメントの高度化に活かす。
- 近隣大学や工科大と連携して、ファシリティマネジメントの現況の大学間ベンチマーキングを実施し、維持管理活動等の高度化に活かすことを検討する。

また、スペースマネジメントをさらに発展させるための取り組みとして以下が考えられる。

- プロジェクト研究スペース、若手研究者のためのスペース、その他キャンパスマスタープランの実現に向けて必要なスペース創出のため、さらなるスペース流動化施策を実施する。たとえばスペースチャージにおいて、施設立地・階層・用途等に応じて料金設定を見直すことなどを検討する。
- スペースチャージ収入の用途について、全学への周知徹底を図り、スペースチャージの意義への理解と、取り組みの推進に向けた協力を促す。

品質管理

従来の施設整備においては、施設改修の際のアンケート調査・学生生活実態調査におけるアンケート等で、利用者である学生・教職員の声を聴取してきたが、施設整備担当者と利用者が直にコミュニケーションをとる機会は限定されていた。利用者の生の声をもとに、満足度が高く、質の高いキャンパスづくりを進めるために、次のような取組みが考えられる。

- キャンパスマスタープラン改訂ワーキンググループが、学生キャンパス委員会（仮称）・地域意見交換会（仮称）と連携し、学生・教職員、地域住民などの利用者の生の声をすくいあげる仕組みを構築する。あわせて、従来のアンケート調査も実施し、利用者本位の良質な教育研究施設・アメニティの整備に活かす。

安全管理

■ 災害対応 ■

自然災害などの緊急時、キャンパスを、学生・教職員及び周辺地域の住民の安全を守る拠点として活用するために、次のような取組みが考えられる。

- 災害時利用施設（避難場所）の設定・整備、非常食等の物資の保管、災害時も利用可能な自然エネルギーによる発電システムの整備、水源の確保等、ハード面の対策を進める。
- 緊急時行動計画（民間企業における BCP: Business Continuity Plan）の策定・周知、周辺住民と共同での避難訓練の実施等、ソフト面の対策にも取り組む。

■ 耐震改修 ■

本学では、2011 年～ 2015 年の 5 ヶ年整備計画により、耐震強度の弱い施設の改修事業をいったん完了する予定であるが、その後も、施設の現況把握を続け、安全利用に問題が生じている施設については、優先的に改修に取り組む。

■ 防犯 ■

開かれたキャンパスづくりと、安全なキャンパスづくりを両立させるための、防犯・セキュリティ強化の取組みとして、次のようなものが考えられる。

- 屋内については、各施設の低層階を、学内外の人々の集うオープンスペースとし、高層階は、階を上がるにつれてセキュリティレベルを高め専門教育・研究に落ち着いて従事できるスペースとすることを基本とし、整備を進める。
- 屋外における安全性の確保に向けては、（主に戸畑・飯塚キャンパス周縁部での）夜間の照明整備、周辺地域との防犯に関わる情報の共有などを進める。

みんなで
創ろう! **CMP**
キャンパス マスター プラン

未来の 九工大

~キャンパスマスタープラン(長期ビジョン)2012~

企画・編集

○施設委員会

○キャンパスマスタープラン検討ワーキンググループ